月刊『カーサ ブルータス』
*Life Design Magazine
casabrutus.com

きちんと知りたい和風モダンの基礎知識！

Casa BRUTUS®

5

JAPANESE MODERN

2022 vol.265
MAY
¥990

和風モダンと暮らす。
建築、インテリア、家具。

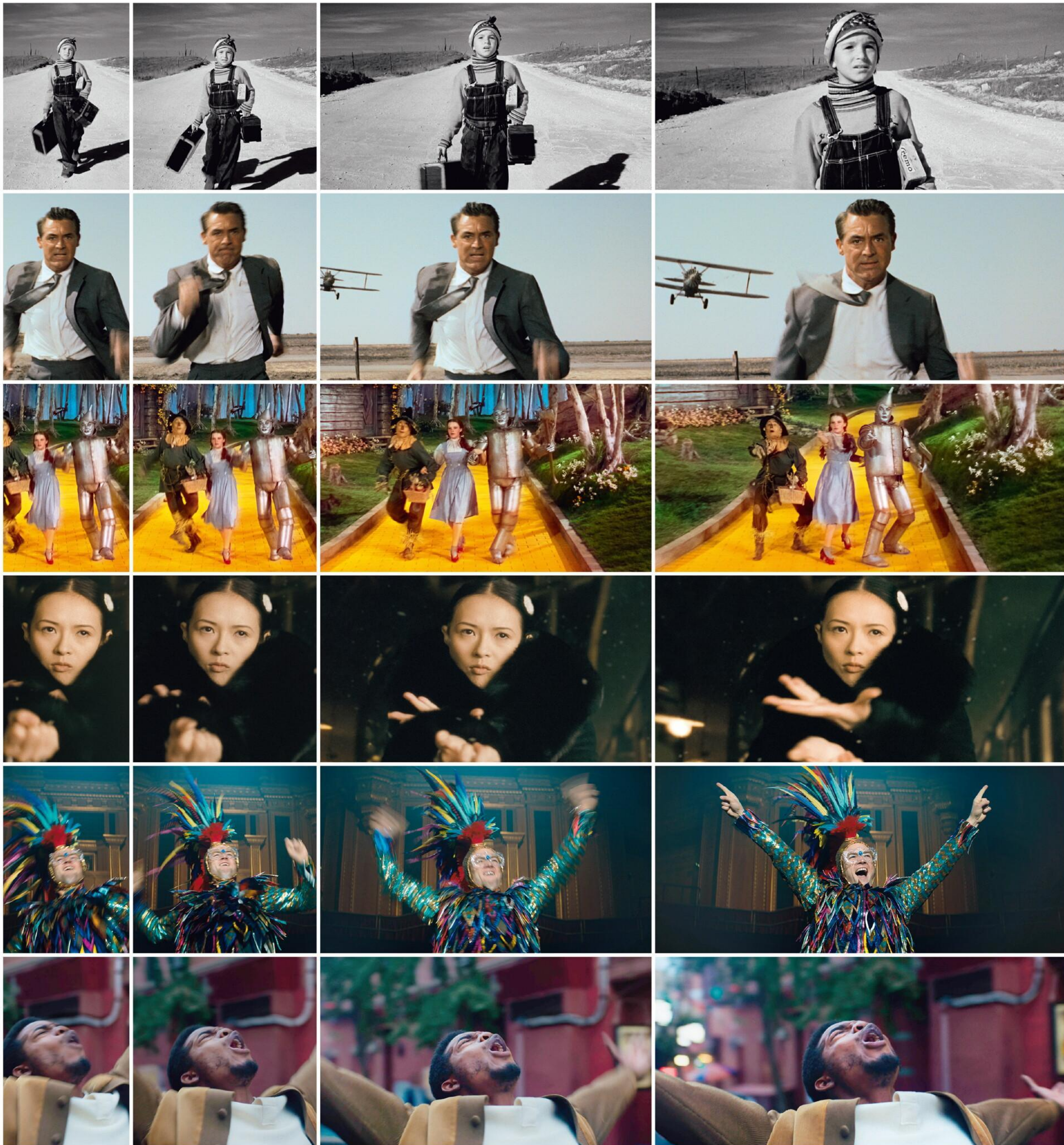
片山正通（Wonderwall®）が改修を手がけた数寄屋建築〈翠門亭〉を徹底図解！
和風住宅の基礎用語　ジャパニーズモダン家具／和風モダン建築家＆住宅案内

2022年5月号（毎月9日発行）4月8日発売　平成13年4月17日　第三種郵便物認可　第23巻第5号

before and after TANGE
ホンマタカシ「日本のモダニズム建築、再発見」
大学セミナーハウス

Discover Architecture Tour
櫻井翔「ケンチクを学ぶ旅。」
大阪中之島美術館を訪ねる。

CRAFTED IN JAPAN
「古今東西 かしゆか商店」
赤間硯

photo_Masaki Ogawa

BRUTUS®

Casa

BRUTUS Casa n.265 May Issue 2022

JAPANESE MODERN

Features

建築、インテリア、家具。
和風モダンと暮らす。

Regulars

Cover Story

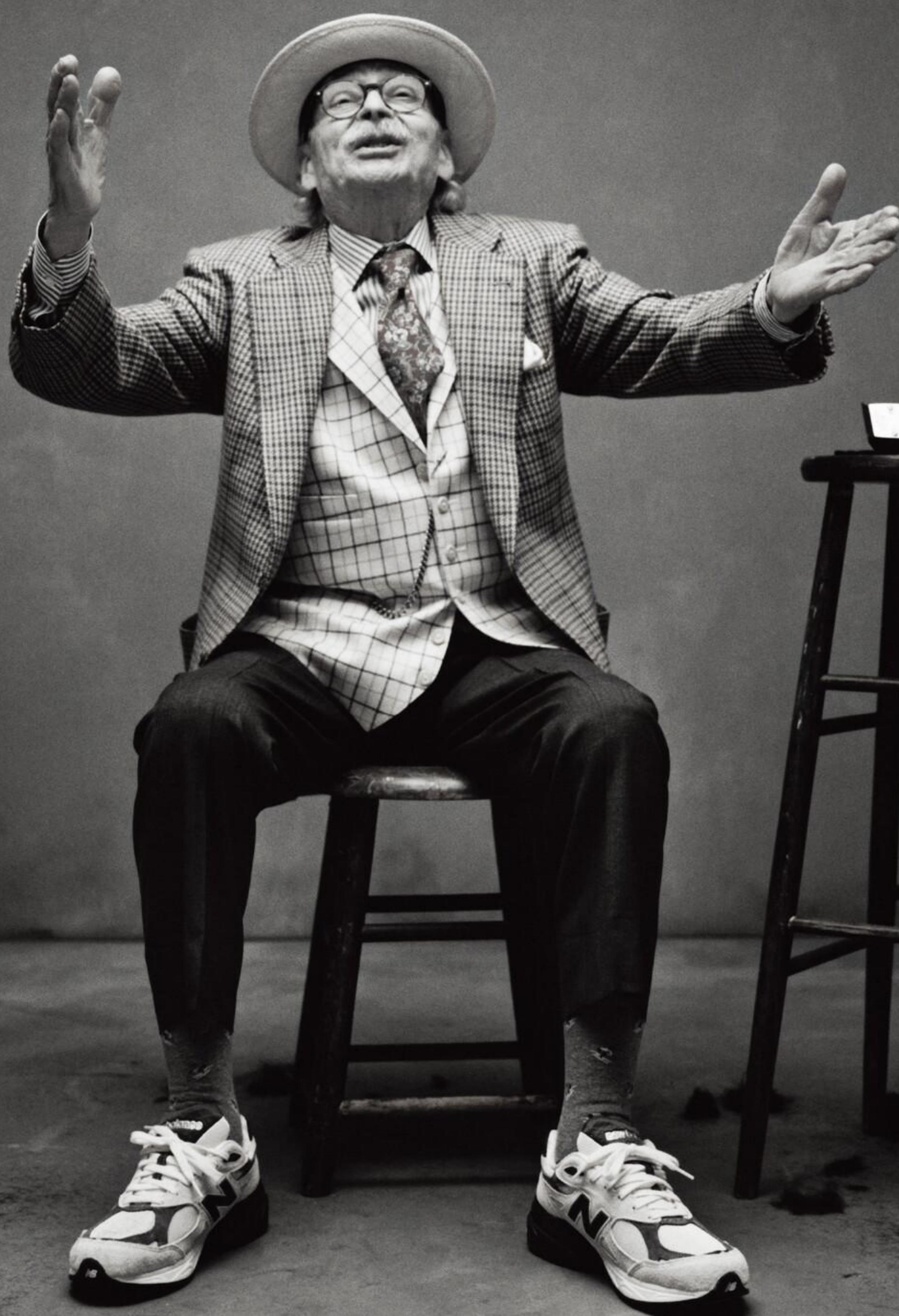
今月の表紙 奈良の高畑エリアに建つ数寄屋の名邸をインテリアデザイナーの片山正通が〈翠門亭〉として再生。カフェラウンジには前川國男や剣持勇らジャパニーズモダンの家具が並び、三畳間の茶室の床の間には現代アートが飾られた。

Cover
photo_Masaki Ogawa
design_Yasushi Fujimoto+cap

『カーサ ブルータス』のウェブマガジンcasabrutus.comもご覧ください。

＊本誌編集ページに掲載されている商品価格は、特別な表記がある場合を除き、すべて税込価格となります。

Casa BRUTUS n.265 May Issue 2022

World Index 今月号でご紹介した世界のあの場所、このショップ。

『カーサ ブルータス』のホームページもご覧ください。
http://magazineworld.jp/casabrutus

Strasbourg

Ehime
Kagawa
Kyoto
Nara
Osaka
Shizuoka
Tokyo

ホンマタカシ

before and after TANGE

photo by Takashi Homma

日本のモダニズム建築、再発見

吉阪隆正

Takamasa Yosizaka
(1917-1980)

Architecture_06

東京｜八王子

大学セミナーハウス
吉阪隆正

Inter-University Seminar House (1965)
by Takamasa Yosizaka
Hachioji, Tokyo

多摩丘陵の森林地帯にある約2万坪の敷地に点在する建築群。これらは教育研修施設〈大学セミナーハウス〉の宿泊棟とセミナー棟だ。建物は8期に分けて建設され、設計は吉阪隆正と彼の建築事務所であるU研究室（1980年に吉阪が他界した後はU研究室）が手がけた。第1期となる1965年に竣工したのは、「大地に知の楔（くさび）」をコンセプトにピラミッドを逆さにしたような形の本館と、ピラミッド形の中央セミナー室、そして木造プレハブのユニットハウス群だ。その後も増設が続いたが、一つ一つが個性的でありながらも全体として統一感を保つ様は、吉阪の建築理論である「不連続統一体」を実現したものとなっている。

左／図書館セミナー室（1967年竣工）。中央／本館。右上／左に見えるのは長期館（1970年）。右下／記念館（1989年）。

ARS LONGA VITA BREVIS

医学を習得するには長い時間がかかる。
人生は短く怠ることなく励むべきである。

芸術は長く、人生は短い。

──── 図書館セミナー室の玄関横に掲示されたヒポクラテスの言葉。

 text_Jun Ishida

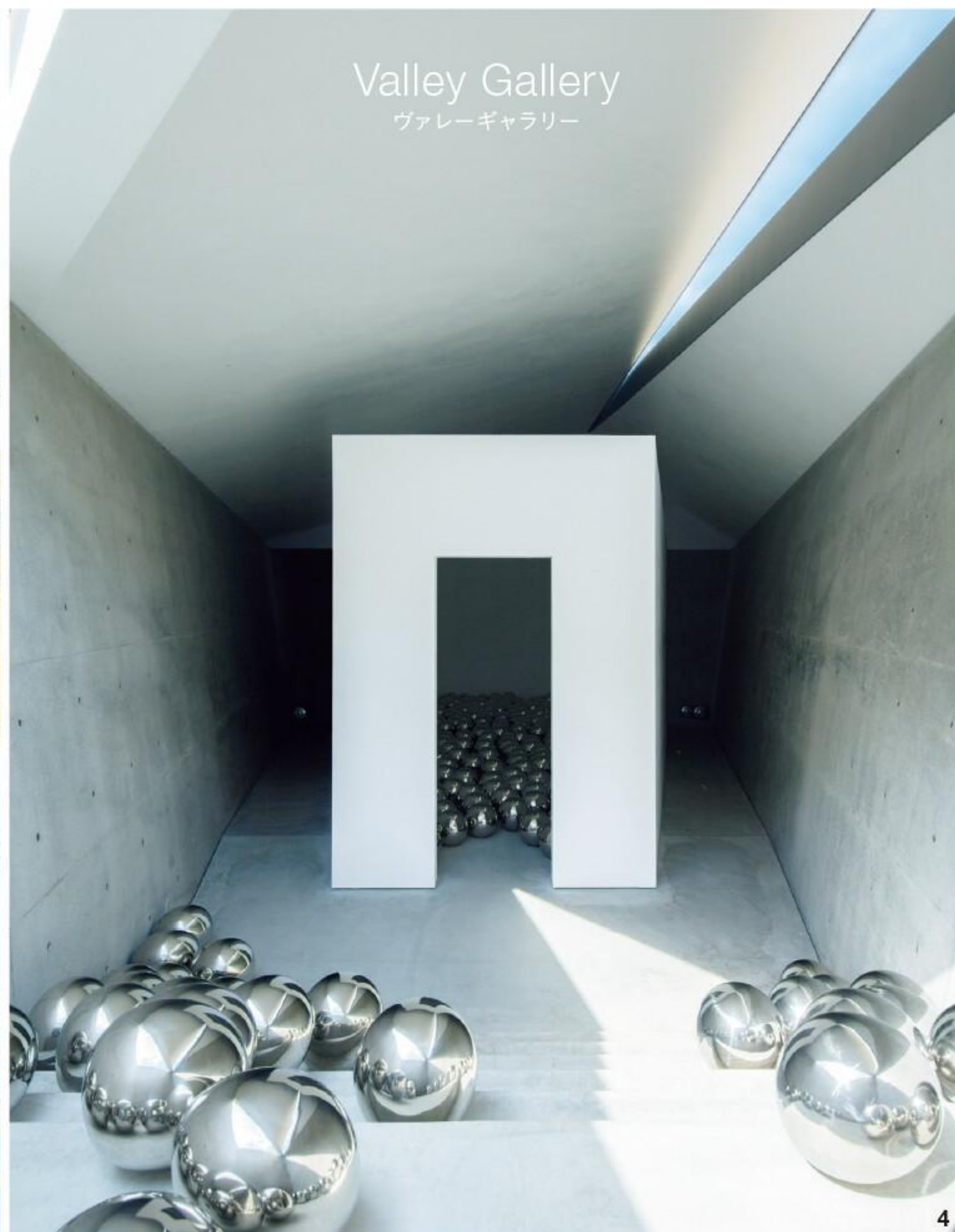
COMME des GARÇONS

Kagawa

K New Art Places in Naoshima

photo_Satoshi Nagare text_Jun Ishida

1〈ベネッセハウス パーク〉内のラウンジ。壁には《Opticks》シリーズが。テーブルには特殊な樹を使用。右のものは神代杉。2 屋外には《海景》シリーズを設置。●〈杉本博司ギャラリー 時の回廊〉香川県香川郡直島町琴弾地。11時〜15時。無休。1,500円※カフェでのお茶とお菓子代（呈茶）含む。

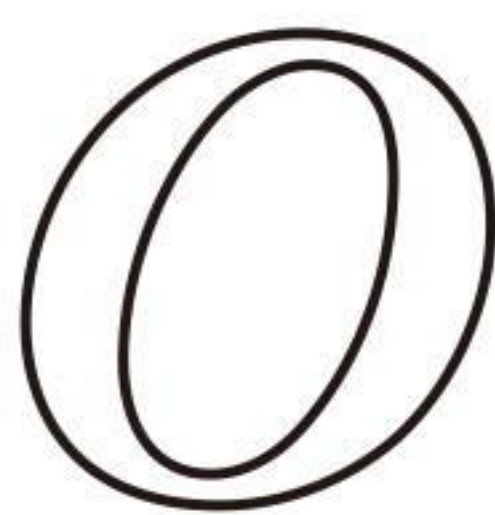
Time Corridors
時の回廊

Valley Gallery
ヴァレーギャラリー

3〈時の回廊〉の屋外には《硝子の茶屋「聞鳥庵」》を展示。ヴェネチア、ヴェルサイユ、京都を経て直島が終(つい)の住処に。4〈ヴァレーギャラリー〉内外には草間彌生による《ナルシスの庭》が展示されている。

直島に、安藤忠雄と杉本博司によるアート施設が誕生。

瀬戸内国際芸術祭の開幕が目前に迫った香川県・直島に、2つの新たなアート施設が誕生した。ベネッセアートサイト直島にある〈ヴァレーギャラリー〉と〈杉本博司ギャラリー 時の回廊〉だ。
〈ヴァレーギャラリー〉は、安藤忠雄設計による半屋外の建築物。安藤が谷間に建つ聖地のような場所にしたいと「祠」をイメージした建物には、屋内外に草間彌生と小沢剛の作品が展示されている。
〈杉本博司ギャラリー 時の回廊〉は、元々〈ベネッセハウス パーク〉内にあった杉本の展示スペースを拡張したものだ。《ジオラマ》や《劇場》《海景》をはじめとする杉本の代表的写真シリーズが揃うとともに、ラウンジスペースを杉本と榊田倫之が主宰する新素材研究所がデザイン。屋外には《硝子の茶室「聞鳥庵(もんどりあん)」》が設置された。

5《ナルシスの庭》は1966年のヴェネチアビエンナーレで発表された草間彌生の代表的作品。6 小沢剛の《スラグブッダ88》は直島の歴史に残る88か所の仏像がモチーフ。●〈ヴァレーギャラリー〉香川県香川郡直島町琴弾地。9時30分〜16時。無休。1,300円（ベネッセハウス ミュージアム入館料込み）。

内装の素材使いも見どころ！

Osaka

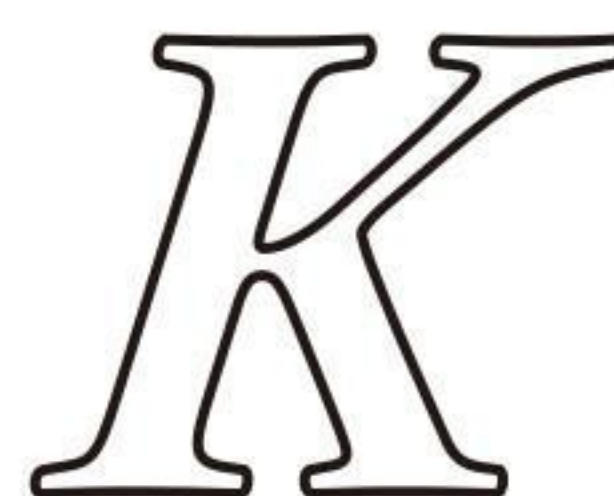
O The Second Store Opens in Osaka

text_Housekeeper

1 外観。2 店のオープンに合わせ、フランス出身のロナン＆エルワン・ブルレック兄弟によるアウトドア家具の新作コレクション《BALCONY》が発売。

3 商品が並ぶ様子が圧巻のMUSEUMエリア。4 HAYのある暮らしをイメージできるROOMエリア。5 MARKETエリア。什器は空気で膨らませる仕様で、収納時はコンパクトに。● 〈HAY OSAKA〉大阪府大阪市北区中之島4−3−1 大阪中之島美術館 1F。11時〜20時（日・月〜17時）。不定休。

倉本仁が内装を手がけた〈HAY〉の2号店が大阪に。

デンマークのインテリアブランド〈HAY〉の国内２号店が〈大阪中之島美術館〉に誕生。内装ディレクションは倉本仁。店内はカラフルな雑貨が集合する「MARKET」、カテゴリーごとに商品を並べた「MUSEUM」、家のようにスタイリングした「ROOM」の３エリアで構成。ゴムボート風の什器や大阪の工場と協業したフェンスが目を引く、ローカリティを取り込んだ独創的な空間に仕上がった。

Kyoto

K Set You Free in Moksa

photo_Norio Kidera　text_Mako Yamato

● 〈moksa〉京都府京都市左京区上高野東山65☎075・744・1001。全31室。１室２名利用で１名１泊２食付き35,000円〜（サービス料込）。京都駅より車で約40分。https://moksa.jp

京都・八瀬の地に誕生した、茶とサウナで心身を癒す宿。

比叡山の裾野に広がる八瀬は平安時代から続く窯風呂を起源とする療養の地。梵語で解放を意味する〝moksa〟と名づけられた宿は、生まれ変わりを体験するための場だ。現代作家の作品が彩るプリミティブかつモダンな空間にて、薬膳茶などの茶を飲み、薪火料理で地の恵みを味わう。３種のプライベートサウナに入り苔庭を眺める。すべて相まって心と身体を解きほぐしてくれる体験が待っている。

1 客室は高野川を望むスイートなど４タイプ。2 入口に飾られた陶芸家の廣谷ゆかり（上）と清水志郎（下）の作品。3 ウェルカムティーのほか、予約制で茶のもてなしが受けられるお茶カウンター〈帰去来（ききょらい）〉。4 陰陽五行の５色を取り入れた「養生朝食」。

FULL HEIGHT DOOR®

kamiya

□ Tokyo

T Modern Bretagne's Wind Blows

photo_Kayoko Aoki　text_Yumiko Ikeda

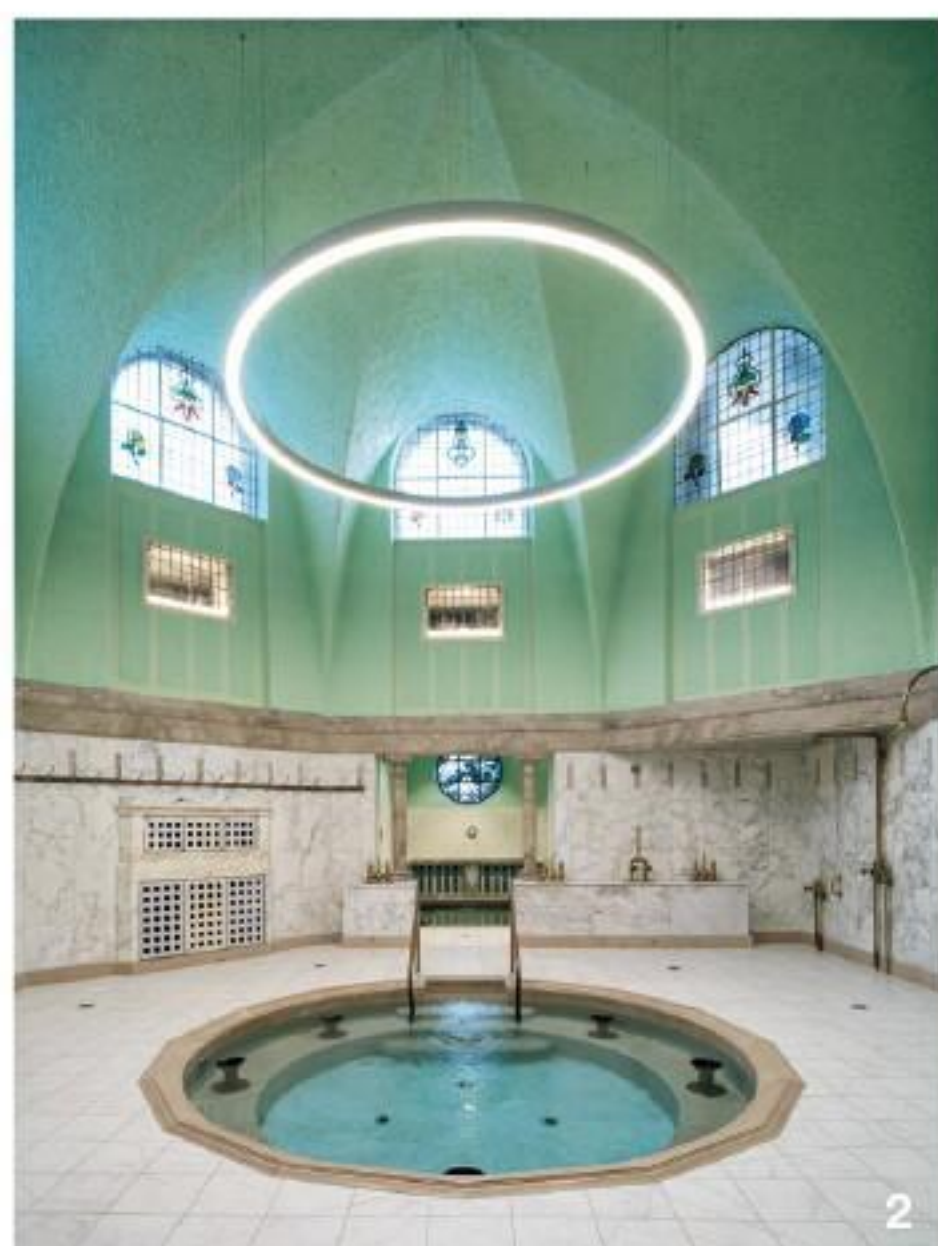
ブルターニュにフィーチャーしたレストランが誕生。

そば粉のガレットを日本で初めて紹介した〈ルブルターニュ〉が、仏・ブルターニュ地方の食文化の魅力を発信するレストランをオープン。石畳を抜けた奥にひっそりと佇む上質な空間は〈SIMPLICITY〉の緒方慎一郎が手がけた。自然派ワインや多種多様なシードルとともに、そば、りんごなどブルターニュをテーマにした料理を楽しみたい。敷地内のカフェ＆シードルバーは朝8時から利用可。

シードルと相性◎ カラフルで美味！

1 メイン：本日の鮮魚のそばガレット包み、シードル風味のブールブランソース3,200円。**2** アミューズ：そば粉のブリニ（コースの一部）。ブランダードにキャビアや鱒子をトッピング。**3** デザート：ガレットタタン1,450円。

内観。●〈レストラン ルブルターニュ／カフェ＆シードルバー〉東京都新宿区神楽坂3―3―6 ☎03・5229・3555。11時30分〜14時LO、17時30分〜22時LO。月曜・火曜休。

1 木製扉の脱衣室が周囲を囲む大プール。**2** 屋内プールの奥には北斎を模したステンドグラスなど、ジャポニスムも取り入れた折衷様式も見所。**3** 大理石をふんだんに使った設計当時の優雅な佇まいを見事に復元。●〈Bains Municipaux de Strasbourg〉10 Bd. de la Victoire 67000 Strasbourg☎(33)03・68・71・93・93。https://www.bainsmunicipauxdestrasbourg.fr

□ Strasbourg

S Municipal Baths Revive Elegant

photo_Cyrille Weiner　text_Chiyo Sagae

ストラスブールに蘇る、20世紀初頭の優雅な公共浴場。

20世紀初頭、当時ドイツ領だったストラスブールに誕生した複数の屋内プールとシャワーを備えた施設。当時の市営浴場としてドイツ人建築家フリッツ・ベブロが設計した名作が21世紀フランスに蘇った。大理石や陶器の荘厳な意匠や、真鍮のドアノブに至るまでを復刻し、現代的な機能を付与したのはシャティヨン・アーキテクツ。美空間でヨガやエステも楽しめる市民の憩いの場として再生を果たす。

K

□ *Kyoto*

The Hotel Inspired by Genji Story

text_Housekeeper

●〈Genji Kyoto〉京都府京都市下京区波止土濃町362―3☎075・365・3001。1室2名35,000円〜。https://genjikyoto.com/jp/home

『源氏物語』の世界を表現したラグジュアリーホテル。

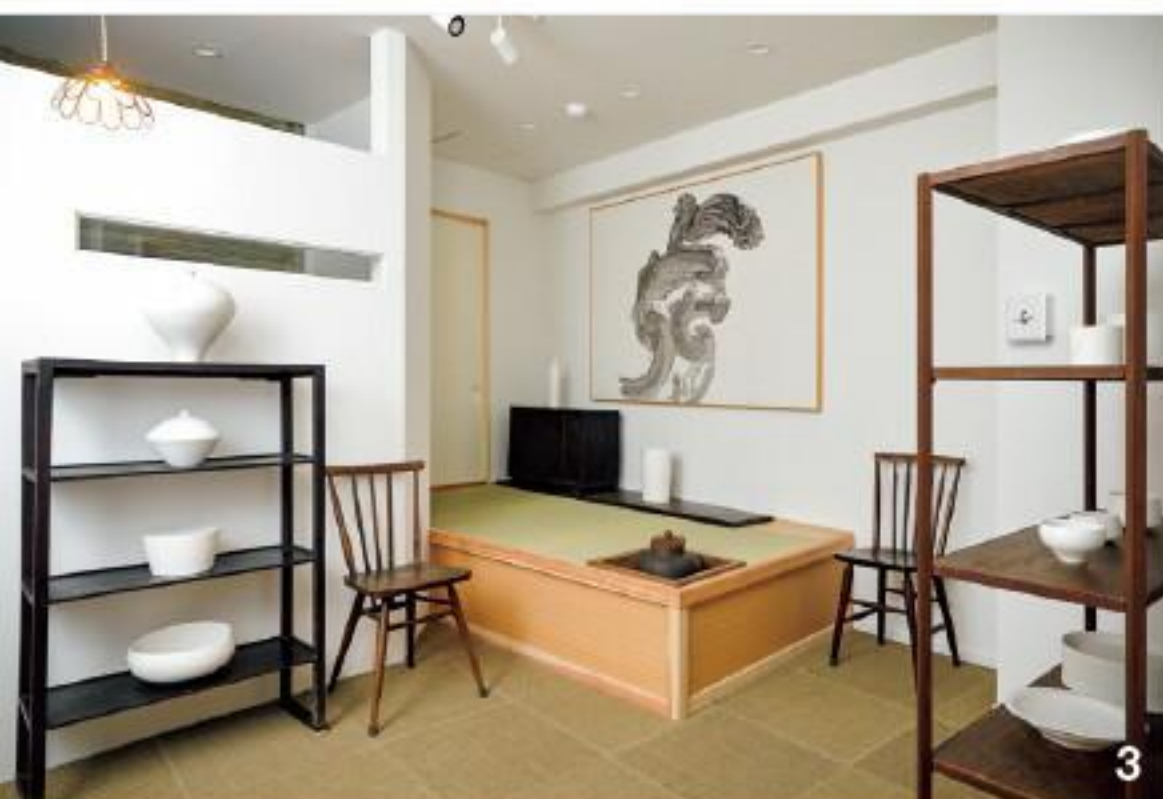
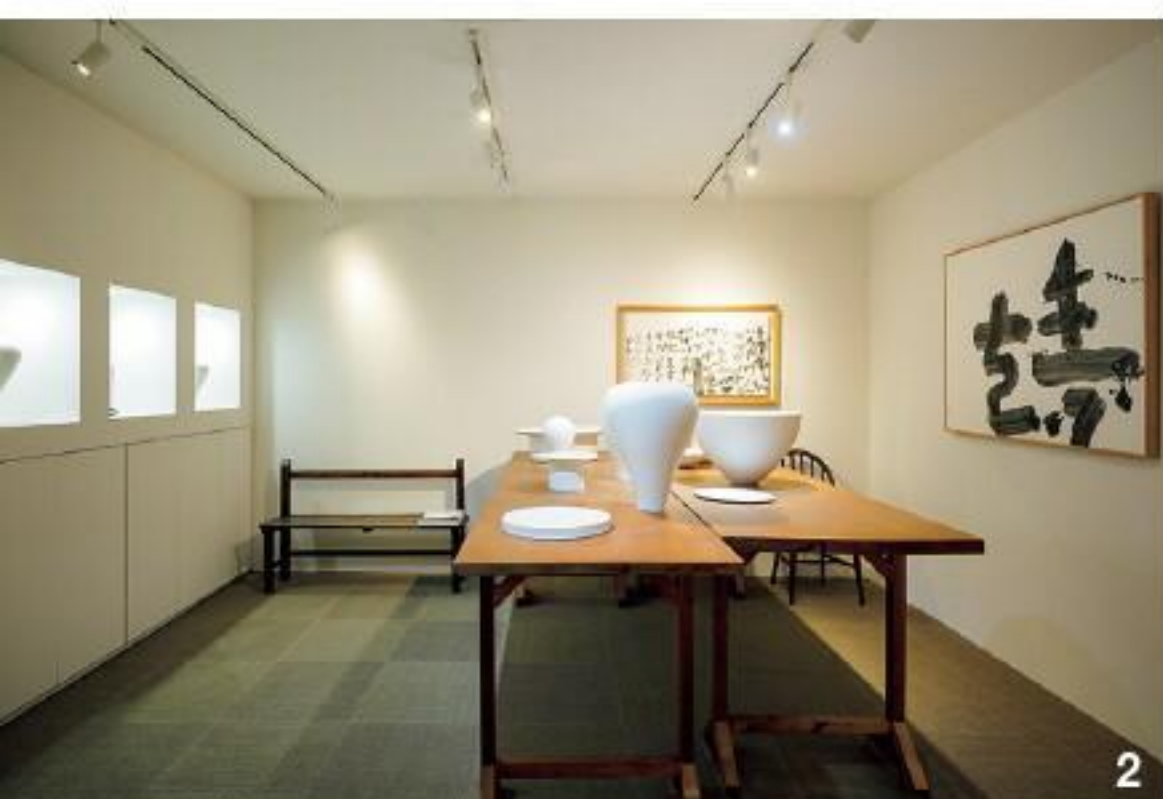
京都に誕生した〈Genji Kyoto〉の着想源は『源氏物語』。作中に出てくる建築様式を参照し、ロビー横と屋上、スイートルーム各室に庭を設け、自然と一体になる空間を実現した。インテリアを手がけたのはデザイナーのトミタ・ジュン。和のテイストと西洋の機能性が融合した家具や内装デザインで現代の京町家を作り上げた。

1 ホテルのそばを流れる鴨川。ロビー横の中庭や屋上の庭園からの眺めも楽しみの1つ。**2** ロビーの窓の上部には手漉き和紙をあしらっている。**3** トミタのデザインによる《Genjiチェア》。**4** 客室には畳の間を設け、ヴェルナー・パントンの《タタミチェア》を置く。

K

□ *Kyoto*

Cozy Gallery on Teramachi Dori

photo_Makoto Ito　text_Mako Yamato

〈うつわ菜の花〉が京都へ。名品を間近に眺める贅沢を。

店主・高橋台一が惚れ込んだ黒田泰蔵や井上有一らの作品を扱う小田原のギャラリー〈うつわ菜の花〉。次なる展開の場に選んだのは京都だった。「骨董通りであり生活感も感じられる寺町通は馴染みある場所。ここは昨年亡くなった黒田さんのために使おうと」と高橋。陶芸家の内田鋼一によるミニマルな内装にも注目だ。

1 美術家の望月通陽による暖簾。**2,3** 黒田の作品は定期的に展示予定。●〈ギャラリー京都寺町菜の花〉京都府京都市中京区寺町通丸太町下ル下御霊前町633☎075・708・7067。12時〜18時。水曜、展示替え期間休。

T

□ *Tokyo*

New Bakery for Sweets Lovers

text_Housekeeper

自家製粒あんと有塩バターがマッチ

〈菓子屋シノノメ〉の姉妹店、〈シノノメ製パン所〉が誕生。

蔵前の人気店〈菓子屋シノノメ〉が〈シノノメ製パン所〉を開業。ヴィエノワズリーを中心に約15種が並ぶ。クロワッサンは、グラスフェッドバターや北海道産とフランス産の粉を使用。あんバターサンドの小豆は北海道産の無農薬。シンプルな構成で素材の滋味が際立つものばかり。店内のヴィンテージ調のインテリアも必見だ。

1 床の花崗岩のタイルに合わせてインテリアをセレクト。ドアやカウンターなどはDIY。**2** クロワッサンと全粒粉クロワッサンの2種展開。各300円。**3** あんバターサンド380円。**4** ショーケース。●〈シノノメ製パン所〉東京都台東区蔵前4―35―2。12時〜18時。土曜〜火曜休。

数寄屋の名邸が現代的な空間に蘇りました。

片山正通が改修を手がけた〈翠門亭〉の石張りのエントランスから、靴は脱がずに同幅、同素材の階段でアプローチする。正面に床の間を設け、リアム・ギリックの作品を飾る。

JAPANESE MODERN

建築、インテリア、家具。和風モダンと暮らす。

和の要素を取り入れた空間には不思議な居心地の良さと憧れを感じます。それは日本人のDNAに深く刻まれてきた感覚なのかもしれません。Wonderwall®の片山正通がここ数年で最も力を入れてきたのも、築100年の数寄屋建築を現代的な空間へと再生するプロジェクトです。そこで、この春に完成したばかりの〈翠門亭〉などを実例とした、和風モダンな建築、インテリア、家具の基礎知識を特集します！

SUIMONTEI

photo_Masaki Ogawa
text_Yoshinao Yamada
illustration_Kenji Oguro

奈良｜高畑

翠門亭

片山正通が手がけた和風モダン、築100年の数寄屋建築改修プロジェクト。

古都・奈良の一角で忘れられかけていた築100年の数寄屋建築を、
地元で工務店を営む夫妻が再生を決めたのは7年前のこと。
片山正通とともに再生した現代数寄屋の詳細に迫ります。

Suimontei
by Masamichi Katayama / Wonderwall®
Takabatake, Nara

1923年竣工。設計：下嶋松之助。2022年改修。デザイン：片山正通（Wonderwall®）、施工：北条工務店。東大寺、そして興福寺や春日大社などの名だたる社寺を抱える奈良公園に隣接する奈良市高畑町の交差点に建つ。近鉄奈良駅から車で７分、徒歩15分。駅に隣接するならまち、猿沢池などの名勝を経て、奈良公園を散策しながら向かうのもいい。客室は１日１組限定で、カフェサロンは会員制。敷地内にギャラリー棟も設け、今後は展示も行う予定。６月上旬開業予定。●奈良県奈良市高畑町775。１泊150,000円〜（１室料金、朝食付き）。https://www.suimontei.jp

南に面したラウンジ。沓脱石（くつぬぎいし）を置くが、土足での使用を予定。建具はかつてのデザインを踏襲して新調し、透明感あるガラスで内外をつなぐ。その佇まいはどこか西洋的である。

HISTORY

【歴史】

洋の東西が混じり合う視点で空間を再生しました。

奈良の中心部にありながら、伝統的な町家が連なる春日山麓の高畑エリア。その一角に京都の数寄屋大工・下嶋松之助が手がけ、1923年に竣工した数寄屋住宅がある。長らく手つかずとなっていた建物がこのたび、一棟貸しのホテルに再生された。建物を購入し、その隅々まで生まれ変わらせたのは奈良で工務店を営む北条慎示・満李子夫妻だ。

宿の名を〈翠門亭〉という。その由来となったのは、明治期の奈良で活躍した実業家であり茶人の関藤次郎だ。関は江戸時代に同じく麻を扱った豪商の別邸と庭を整えたうえで、池泉回遊式庭園を作庭して〈依水園〉を完成させた人物。多岐にわたって奈良の文化発展に寄与した関を、人は翠門翁と呼んだ。この建物は関の息子が暮らした家であるが、夫妻は関の遺志を引き継ぐ心意気で名を拝借したという。

夫妻がプロジェクトのパートナーに選んだのは、インテリアデザイナーの片山正通だ。片山は、「なによりプロジェクトに関わりたいという衝動が先に立ちました」と振り返る。夫妻とともに訪れた建物は風雨にさらされ朽ちかけていたものの、「建物の骨格の良さに惹かれました。建物と会話を重ねてデザインをしたいという欲求に駆られたのです」と言葉を繋ぐ。夫妻が営む北条工務店は住宅を中心に幅広く設計施工を行っているが、別のプロジェクトで片山と協働する機会があった。そのプロジェクトは中止となってしまったが、そこで片山の仕事の姿勢に強い感銘を受けたと夫妻は言う。

「和風モダンの元祖とされる吉田五十八や村野藤吾の新興数寄屋は建設当時、非常にモダンな存在であったと思います。片山さんの空間もまたモダンです。その要素を〈翠門亭〉に取り込むことで、ただ古民家を再生するのではなく、建築や家具、アートなどの新しい提案も織り込みたい。伝統を継承するとともに、100年先に伝統と感じてもらえる新たな要素を片山さんのデザインに期待したのです」

片山は今回、細部にわたるグラフィックデザインに平林奈緒美、アートに〈TARO NASU〉、家具に〈GALLERY-SIGN〉の溝口至亮、選書に〈POST〉の中島佑介、選曲に松浦俊夫の協力を仰いだ。かつての下嶋のように、空間の細部に至るまで棟梁として腕をふるった片山。設計も工事を進めながら手探りで仕上げなどを決める変則的な工程をたどった。通常のプロジェクトであれば時間が限られ、早々に明快なコンセプトを立て、デザインを決める必要があるが、今回は躯体の補修に時間を要し、状況に応じて判断を改める必要があった。建物を通じて空間体験とともに生活の豊かさを提起する場にしたいという夫妻の思いもあり、片山はチームとともに時間をかけながら細部を探ったという。

「建物が持つ日本的な骨格に身をまかせつつ、そこに僕らが育ってきた現代、つまり東洋と西洋の要素が混ぜ合わさった視点を持ち込もうと考えたのです。キャリアをスタートした頃は西洋のデザインに憧れました。けれど近年は日本の文化や建築に惹かれるようになってきた。それは日本で生まれ育った僕がいろいろな文化に影響を受け、それらが概念的に混じり合って形に現れるタイミングを迎えているのかもしれません。このプロジェクトを進めるなかで吉田五十八の数寄屋を見ると、日本的でありながらやはり西洋からの影響も感じます。今回は私的な感性を持ち込んだデザインであり、素直に空間の良さを追求した空間とも言えます」（片山）

また今回のプロジェクトは、北条夫妻が施主でありながら施工者だという点も成り立ちをユニークなものにする。数寄屋造に造詣の深い工務店であり、彼らが片山の言葉や図面を受け、大工とともに既存部材の取捨選択、扱う木材の品種や加工を判断していった。

「今回のようなリノベーションでは、特に設計と施工が距離を縮めながら、互いにアイデアを出し合うことが重要です。数寄屋建築には特に明快なルールはありません。だからこそ過去と未来を往来する交差点のような存在になるのではないでしょうか。ゆえに過去にとらわれない自由な発想が必要だし、過去を尊重した施工技術やアイデアも大切です」と夫妻は答える。

設計施工の調和、それは吉田五十八が築いた新興数寄屋のあり方に通じる視点だ。片山、そして夫妻の複層的な視点が、〈翠門亭〉の数寄屋を現代的にアップデートしていった。

片山は図面とともに模型で細部の検討を重ねた。精緻な模型が空間のイメージを共有するのに活躍する。これをもとに改修された吹き抜けのあり方や居室との関係性などから、家具やアートの配置、構造的な実現性、素材使い、庭などの検証が進められた。建物は西に門、南に広々とした庭、東に坪庭を持ち、かつての蔵は改修してギャラリーを設けている。

片山正通

かたやままさみち　1966年生まれ。Wonderwall®代表、武蔵野美術大学教授。国内外で多岐にわたるプロジェクトを手がける。コンセプトを具現化する発想、伝統に敬意を払いつつ現代的要素を取り入れるバランス感覚が評価されている。

北条愼示・満李子

ほうじょうしんじ・まりこ　1945年創業の工務店4代目。ともに大学で建築デザインを学び、設計事務所での勤務を経て現職。個人住宅や店舗の設計施工を中心に、カフェやギャラリーの運営などを通じ、新しい工務店の形を提示する。

OVERALL VIEW

数寄屋建築に並ぶジャパニーズモダン家具と現代アート。

【居間】

イサム・ノグチ
Side Table

イサム・ノグチ
Akari Floor Lamp

剣持勇
Low Table

剣持勇
Sofa

天童木工
Sofa

【広縁】

松村勝男
Armchair

イサム・ノグチ
Akari Floor Lamp

イサム・ノグチ
Akari Floor Lamp

天童木工
Small Round Table

[2nd FLOOR]

【寝室+浴室】

剣持勇
Sofa

剣持勇
Rattan Dust Box

松村勝男
Rattan Armchair

乾三郎
Side Table

ホンマタカシ
Yoshino River

柳宗理
Stool

剣持勇
Rattan Stool

【食堂】

柳宗理
Chair

渡辺力
Riki Bench

坂倉準三
Cabinet

柳宗理
Table

長大作
Service Wagon

ホンマタカシ
Kofukuji Temple

【ラウンジ】

坂倉準三
Round Table

剣持勇
Lounge Chair

ミカ・タジマ
Anima 5

ミカ・タジマ
Art d'Ameublement
(Base Martin de Viviès)

ジョナサン・モンク
Sol Always Shines
(nine books from my library) II

ミカ・タジマ
Art d'Ameublement
(Bellingshausen Island)

前川國男
Armless Chair

前川國男
Armchair

【ギャラリー】

[1st FLOOR]

【玄関】

リアム・ギリック
Solidarity Channelled

柳宗理
Stool

【庭】

Time & Style
Stool

Time & Style
Table

WIDE PORCH

【広縁】

２階吹き抜けに面して、浮遊感のある広縁を設けた。東の坪庭を１階、２階と異なる視点で楽しめる。右の丸太梁は新設したもので、他の部材と色を近づけるため柿渋を塗った。

木造軸組工法ながら、片山のイメージする空間を実現するために吹き抜けでは構造的な難しさに挑戦した。広縁と吹き抜けの天井部は仕上げを変え、白漆喰の軒天で切り替えた。

白漆喰
壁と同じ白漆喰で大屋根と下屋の間を仕上げ、色の異なる木を明快に区切った。

丸太梁
新たに設置した補強材の丸太梁は柿渋で仕上げ、既存部材と表情を馴染ませた。

桟と野地板
既存の桟と垂木に対し、野地板のみを未着色で新調。色で新旧の対比を楽しむ。

水平性
窓とニッチの下端を揃えて水平性を強調し、すっきりとした印象を与えている。

手すり格子
手すり格子は既存部材を再利用し、往時の趣を残した落ち着きのある雰囲気に。

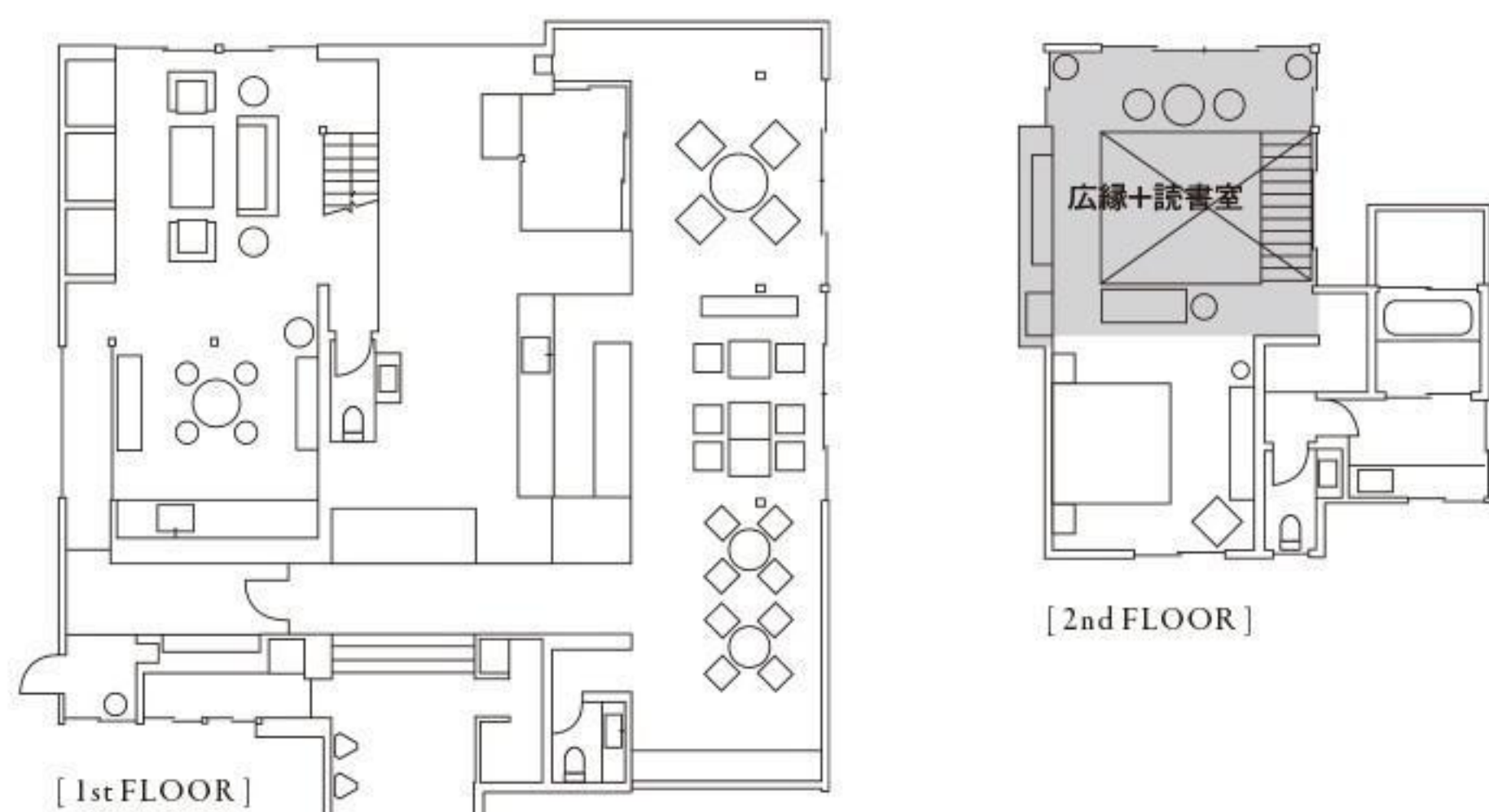
手すり
金属製の手すりは、自然な表情を求めて専用のハンマーで鍛造して仕上げた。

広縁+読書室

[1st FLOOR]

[2nd FLOOR]

【広縁】
WIDE PORCH

木造建築のダイナミックな構造、細やかな仕上げと好対照をなす浮遊感ある吹き抜けに面して現代的な広縁を設けた。1階とは異なる、高い視点から東の坪庭を楽しめる。スチールの手すり、ガラスの腰壁といった素材感のコントラストに、和洋を巧みに織り交ぜる片山の手腕が見られる。壁面に造作された本棚は元押入れで、その懐部分をうまく活用した。

天童木工
テーブル

剣持勇や坂倉準三と協業していた時代に製作された天童木工製のサイドテーブル。社内でデザインされたもので、数々の名作家具と合うニュートラルな佇まい。

北条工務店
壁面造作

吹き抜けに面した通路の壁面に造作された書棚。もともと押入れがあったため、その奥行きを活用。漆喰壁に棚板がミニマムに納まるよう、下地を調整して造作。

イサム・ノグチ
Akari

イサム・ノグチはAkariにおいて数多くのモデルを残しているが、こちらは初期モデル《K1》。和紙ではなく絹製の巾着状シェードで、赤い糸が特徴となる。

片山正通
手すり

スチール製の手すりは専用のハンマーで叩いて凹凸の表情を出したオリジナル。片山は表情の見本を指示するために3Dプリンターで製作した実寸模型を用意。

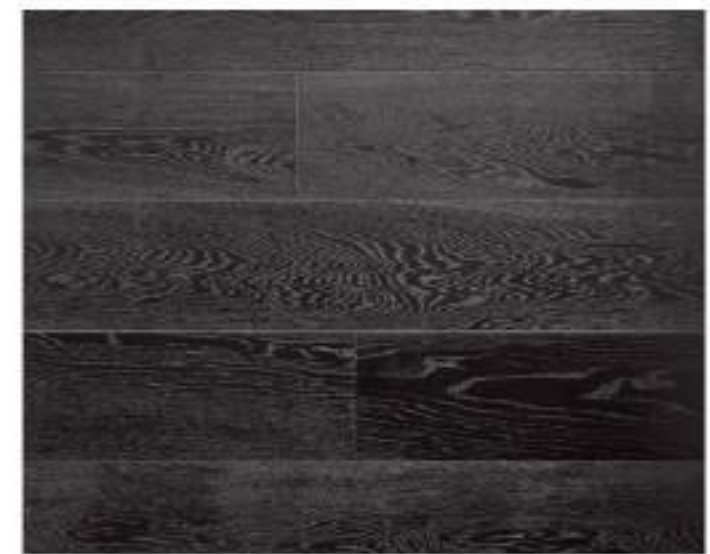
片山正通
収納扉

１階リビングの壁面収納扉は、職人が藤を編んで仕上げている。手仕事を感じさせる仕上げを随所に採用し、空間の細部に奥行きを与えている。

イサム・ノグチ
Akari

1950年代にデザインされた円筒形のモデル《32N》のスタンドタイプ。現在も製造が続くモデルだが、こちらはヴィンテージ。スタンド部分が現行品と異なる。

松村勝男
アームチェア

家具デザイナーの松村勝男が1965年に発表したウインザー様式のアームチェア。日本でいち早く曲げ木を実現した秋田木工で製作され、グッドデザイン賞を受賞。

スカンジナビアンフローリング
特注フローリング

浮造り加工のフローリング材は黒く染色したものを使用。和の柔らかさを引き締める素材として選択された。（スカンジナビアンリビング☎03・6840・2887）。

臨機応変に検証を重ねた吹き抜けの広縁。

　吹き抜けに面した２階の広縁は、プランニングの初期段階で決まったと片山はいう。もともと縁側のような空間があり、それを踏襲しながら、垂木や野地板を現し、吹き抜け上部の天井仕上げとは異なるため、両者の間に白い軒天を設けた。もともとあった低い天井を活かし、その先の庭に意識を向けさせる。一方で建材や仕上げの違いによってフレーミングされたような広縁は、他の居室から浮遊感を持って見える。

「僕はいつもデザインの作為を感じないニュートラルな形を探ります。誰もが行き着く一般解のようなものが理想で、そのために試行錯誤を繰り返す。２階は既存の間取りを大きく変えています。今回は解体して部材の構成がわかることも多く、実際には現状を模型で再現し細部を検討しながら、一つひとつ問題を解決していったのです」と、片山は言う。

　北条工務店で用意した実測図をもとに、片山はひとまず計画案を進めた。しかし長期にわたる腐食、蟻害によって工事途中に構造材の入れ替えも次々と発生し、当初の想定とは異なる箇所はそのたびにあらためて検証を重ねた。なお柱梁といった躯体の部材は多くを再活用。解体するたびに、空間構成と構造の取り合いを検証したという。たとえば本棚を埋め込んだ広縁に続く廊下の壁面は平滑だが、かつてここには押入れがあり、その懐を造作に活用した。こうした作業を振り返り、「粘土をこねるような作業だった」と片山は笑う。

「オリジナルの状態を再現したいという気持ちと、ホテルのために再構成したい気持ちとのせめぎ合いのなかで設計を進めました。建具などの部材もすべて残したかったけれど、物理的に難しいことも多かった。そこはなるべくオリジナルに忠実に作り直しています」（片山）

　一方で「実は北条夫妻との間に伝統と格式の継承という議論はなく、なにがプロジェクトにとって最も適切なのかという問いかけを繰り返した」と片山は振り返る。数寄屋の再現が目的ではなく、あくまで新たな役割であるホテルのために、最適な空間を探った。そのなかで片山は数寄屋という様式を踏襲しながら、現代的な回答を求めていく。

「方程式としての数寄屋ではなく、この家が持っていた歴史や文脈を僕らが引き受け、その預かった魂をどう返すか。その核を踏まえたうえで、数寄者として振る舞う。それが今回のプロジェクトで重要だったと感じています」（片山）

LIVING & DINING

【居間＋食堂】

濡れ縁で庭とつながる1階は、洋風な暮らしへと移行する時代の日本のリビングをイメージしたという。柱はかつて長押（なげし）や欄間などが差し込まれていた部分に埋木をしている。

同じく１階の食堂。手前のベンチは渡辺力、ダイニングセットは柳宗理、奥のキャビネットは坂倉準三、その上にはホンマタカシによる奈良を題材にした写真作品が飾られている。

埋木

柱に組み込まれていた鴨居や長押の跡に埋木を施し、
補修跡は意匠として表現。

間接照明

壁と天井の境目にスリットを
設けて軽さを出し、
照明が壁面の石材を照らす。

建具、欄間

建具や欄間は再製作。
格子のピッチや建具のアール、
面取りまでを再現している。

光

吹き抜け上部から
光が降り注ぎ、室内奥まで
自然光をしっかり取り込む。

床材

黒の床材は浮造りのオーク材。壁天井の白と
対照的にモダンさを表現している。

建具

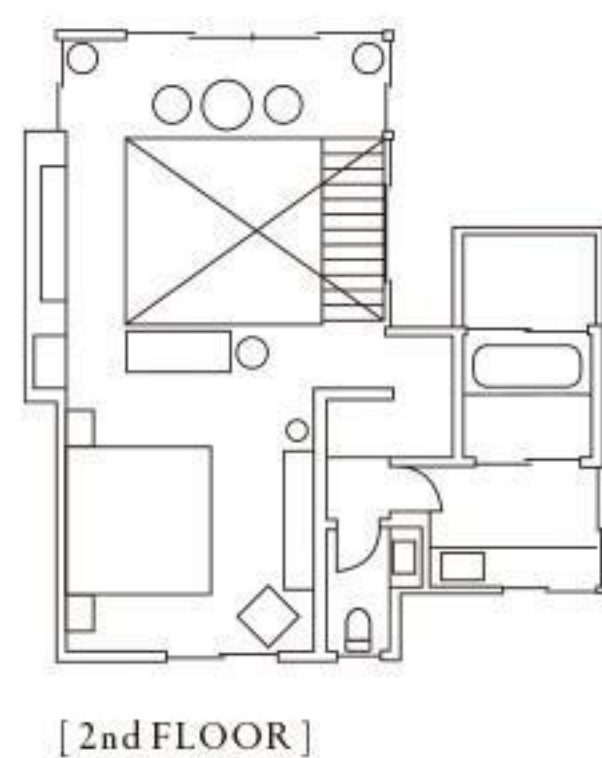
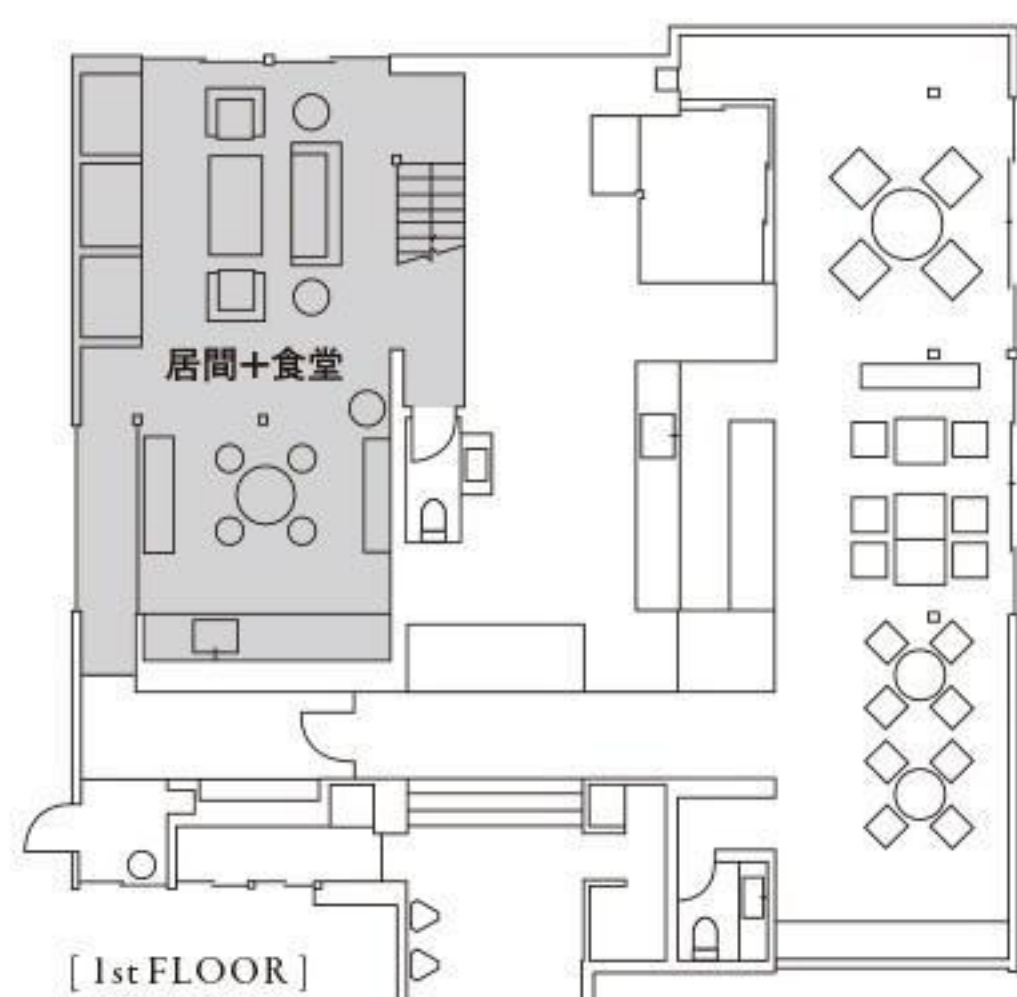
オリジナルの建具は籐の手編みによるもので、
新旧のコントラストを演出する。

階段

床材に合わせ、階段に黒いスチールを採用。
独特の質感を仕上げと塗装で表現。

居間＋食堂

[1st FLOOR]

[2nd FLOOR]

【居間＋食堂】

Living & Dining

客室は意識的に、東側に開口部を絞ったという片山。特にリビングは苔庭とのつながりを意識した。リビングのソファはミッドセンチュリー期の日本のソファを検討するも、当時はソファ自体が希少だったため入手に苦労した。最終的に、剣持勇のソファと天童木工のアームチェアを採用。現代的な印象の黒いフローリングとの対比がユニーク。

渡辺 力
リキ ベンチ

現在は〈カンディハウス〉が製造するが、〈翠門亭〉に設置されたのはかつて〈天童木工〉で製造されたヴィンテージ。カーブを描く木の座面が肌馴染みがよい。

イサム・ノグチ
サイドテーブル

イサム・ノグチが1954年に〈ノル〉から発表した《ロッキングスツール》のバリエーションとして展開した揺れないサイドテーブル。オリジナルのヴィンテージ。

剣持 勇
ソファ

後に〈天童木工〉の《チェントロ》シリーズに発展するソファ。軽やかな脚部のフレームに座面が載り、座り心地も抜群。ヴィンテージで、座面を張り替えている。

イサム・ノグチ
Akari

こちらも初期モデルの《75DL》。華奢な竹の支柱に楕円の和紙シェードが載る。「黒い床が宙に浮かぶようなシェードのフォルムを際立たせている」と片山は言う。

ホンマタカシ
Kofukuji Temple

タイトルの通り、奈良のシンボルともいえる国宝・興福寺五重塔を主題とするピンホール写真の特質そのままに天地逆のイメージで展示した。

坂倉準三
キャビネット

坂倉は自身が設計する建築のために数々の家具をデザインしており、こちらもそのひとつ。高さのある脚に引き違い戸の戸棚が載る。天袋を思わせる造形が特徴。

柳 宗理
曲木テーブル

右の曲木椅子と同シリーズの円形テーブル。小ぶりなサイズだが４脚がしっかり収まり、椅子同様に軽量。朝食やティータイムでの使用を想定する。

柳 宗理
曲木椅子

1967年に発表された、柳宗理による曲木椅子のヴィンテージ。軽量かつ脚部の絶妙な造形でスタッキングが可能。曲げ木の技術で知られる〈秋田木工〉が製作した。

家具とアートを愛でるリビングダイニング。

エントランスから続くリビングダイニングは広々とした空間を設け、そこにジャパニーズモダンの家具、現代作家のアート作品が並ぶ。

家具の選定は国内外のヴィンテージ家具に詳しい〈GALLERY-SIGN〉の溝口至亮に協力を仰いだ。もともと片山はインドで南アジアの文化と出会ったピエール・ジャンヌレの家具を採用したいと考えていた。すると溝口から日本のミッドセンチュリー期に生まれた家具を提案される。前川國男、坂倉準三、剣持勇、柳宗理といった、ヨーロッパやアメリカの文化をいち早く体感したうえでオリジナルの家具を製作した建築家やデザイナーたちの家具だ。

「計画はアジアの影響を受けた西洋の家具から、西洋の影響を受けた日本の家具に変わりました。自然とプロジェクトに引き寄せられたような出会いというのでしょうか。家具は空間にキャラクターを与える重要な存在ですが、名作と呼ばれるような著名な家具は空間に既視感を生み出すきっかけになってしまいます。今回の家具はなにかの書籍で見たことがあるかもしれないけれど、実際に目にするのは初めてというものがほとんど。日本がモダンデザインにシフトする時代の家具は新鮮で、どこか可愛らしくもあります」

片山正通の作家性に惹かれる北条夫妻だが、家具はヴィンテージをセレクトしたいという提案に、プロジェクトの背景と合うと共感したという。片山と北条夫妻は共同で家具やアートを選び、その感覚を共有していく。そのなかで片山が写真家、ホンマタカシを紹介。夫妻はホンマと意気投合し、奈良を題材とした作品制作を依頼することに。

「かつてここに住まわれていた方は茶の湯をたしなまれており、古い掛軸などもたくさん持っていらしたんです。それを踏襲することもできたのですが、やはり将来を見据えた提案を行いたいと、現代作家のコンセプチュアルなアート作品を置くことにしました」という満李子の言葉に、「概念を扱う現代作家の作品は、問いかけを持っています。歴史ある建物を未来につなげていくうえで重要な役割を果たすように考えていました」と片山は応える。

リビングは東に位置する坪庭に面する。南の日差しが差し込む開放的な庭と異なり、濡れ縁で苔庭と続く。西洋的な空間と窓向こうの東洋的な庭の好対照な連続が、〈翠門亭〉のコンセプトを見事に体現している。

BEDROOM& BATHROOM

【寝室＋浴室】

吹き抜けに面した寝室は天井をあらわしにせず、天井に設備類を収めた。ベッドは片山がデザインしたオリジナルで１階の壁面収納同様、ヘッドボードに籐編みを使用した。

大判の石を張った浴室は他と比べ現代的な要素が強い。窓の向こうには坪庭を設け、外部からの視線を遮る格子を設置。奈良格子に触発された片山が、独自にデザインしたものだ。

天井

手前の丸太梁は既存、奥の丸太梁は新調。
新旧の色を合わせて馴染ませた。

束

束柱は真壁仕様とし、過去の痕跡を残して
歴史や時間を感じる場所とした。

天井

寝室上部はフラットな天井で
空間に立体感を与え、
奥に設備関係を収めている。

風呂、庭

庭はモダンな風呂とは対照的に、
明治から大正にかけて流行した石や盆栽を配置している。

石

床、壁に大判の石を張り、
現代的な意匠で
ラグジュアリーな落ち着きに。

格子

台形状の格子を二重構造にし、
光と風は取り込みながら視線を遮っている。

幅木

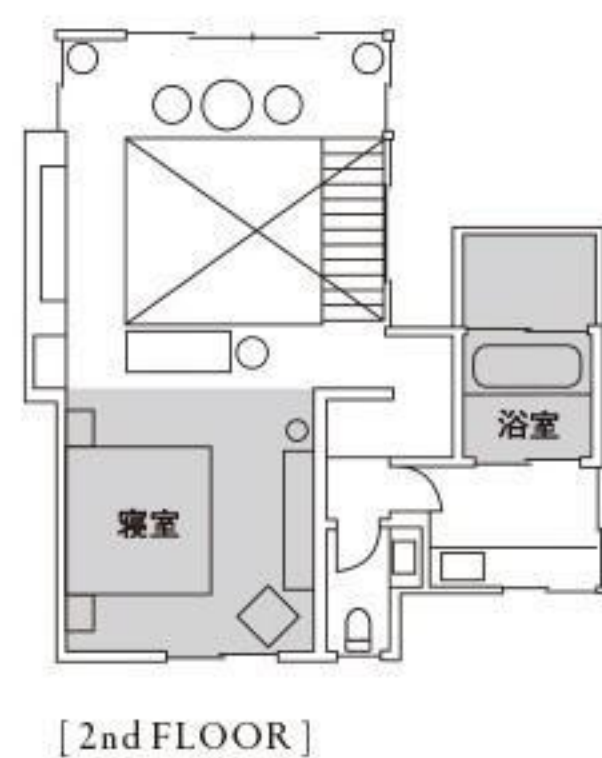
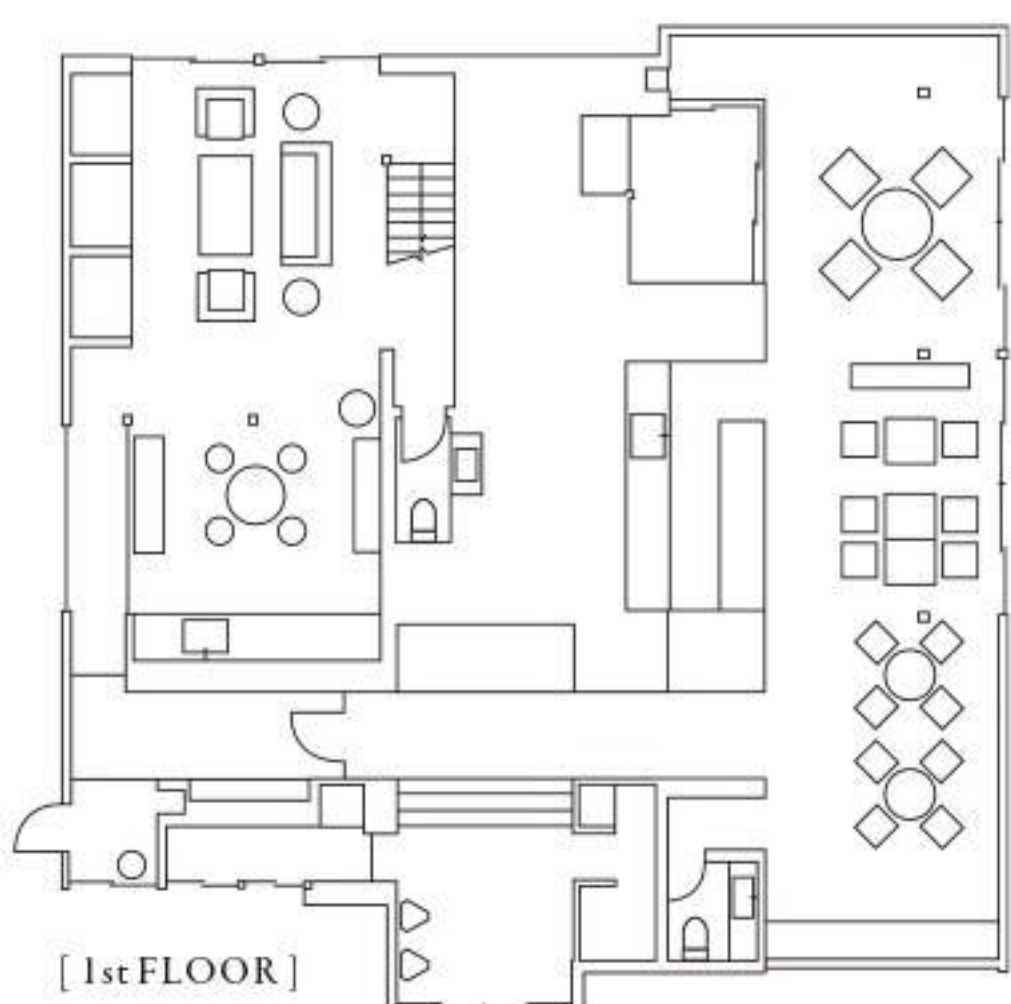
ミニマムな空間に機能性を考慮し、幅木を設置。
意匠性を考え素材は人造大理石を採用し、
漆喰壁とフラットに仕上げている。

水栓、バスタブ

水栓やバスタブにも現代的なデザインを採用し、
他の部屋とのギャップを表現。

[1st FLOOR]

寝室
浴室

[2nd FLOOR]

【寝室＋浴室】

BEDROOM & BATHROOM

同じ2階でも広縁と異なり、寝室は吹き抜けに面しながら天井の高さを抑えた、静謐な空間とした。ベッドリネンには久﨑康晴が手がける〈エシャペ〉を使う。また浴室は石張りの現代的な空間に。窓を開けると坪庭の向こうから風や光が差し込み、心地よい。前室の洗面室では以前の窓枠を再現しており、浴室のコンテンポラリーな空間との対比が楽しめる。

乾 三郎
サイドテーブル

〈天童木工〉の技術者であり、デザイナーとしても活躍した乾三郎によるサイドテーブル。柳宗理の《バタフライスツール》を開発する流れで製造されたもの。

エシャペ
ベッドリネン

ベッドリネンには、ファッションブランド〈ATON〉を手がける久﨑康晴によるライフスタイルブランド〈エシャペ〉を使う。特別に白を用意してもらった。

剣持 勇
ソファ

〈秋田木工〉のためにデザインされたソファで、現在は廃番。曲げ木による背もたれ、丸棒で構成され、木製椅子をソファにしたような佇まいで軽やかな印象。

剣持 勇
ダストボックス

ホテルのインテリア用に籐編みの家具をいくつもデザインした剣持勇によるダストボックス。小鼓を思わせる形状と細部までの細かな仕事は工芸品のようだ。

ファンティーニ
サーモスタットシャワー混合栓

コンテンポラリーな仕上げの浴室にはマットゴールドのシャワー混合栓を設置。他の部屋にないラグジュアリーな雰囲気に。829,800円（大洋金物☎06・6632・8777）

柳 宗理
紋次郎スツール

〈栃木県立美術館〉のためにデザインされたスツールをもとに、1974年に発売されたオリジナル。座面が三度笠に似ていることから《紋次郎スツール》と呼ばれた。

ホンマタカシ
Yoshino River

奈良を流れる吉野川を題材とするホンマの写真作品。ホンマとの対話から、夫妻は撮影のロケハンなどに協力。その作品は奈良の魅力をあらためて教えてくれる。

松村勝男
籐のアームチェア

現在まで製造が続く松村の代表作。無駄のない繊細なデザインで、使い込むほどにしなるように。こちらはヴィンテージで、時を重ねた飴色がまた美しい。

尊敬をもって和風の既成概念を打ち破った空間。

客を招くことも想定した１階のリビングダイニングに対し、プライベートな要素の強いベッドルームやバスルームは２階に配置。１組限定の宿泊施設でゆったりとしたプランニングが可能だったことから、大胆に吹き抜けを活かした。当初は現在の広縁まで吹き抜けにすることも検討したが、「拠り所となる場をいくつも設け、空間に多様な表情を与えようと考えた」と片山正通は語る。合わせて階段の位置をわずかに見直し、支持体の柱梁は組み替えた。またベッドルームは平天井とし、空間に緩急をつけている。

宿泊棟の床材には、黒く染色した浮造り加工のフローリングを使う。片山は設計時、自身が師と仰ぐアートディレクターの故・渡邊かをるから紹介されたアメリカの美術館の写真が記憶に蘇ったと振り返る。同じく和の空間や家具が持つ柔らかさを引き締めるため、階段や手すりには硬質なスチールを選んだ。和とコントラストをもたらすという意味で、これらや吹き抜けの開放感と透明感、硬質な素材感は「西洋的な要素」だと片山は言う。手すりの表情は3Dプリンターで制作した原寸模型で指示を出し、特注ハンマーで叩いて凹凸を表現。片山がデザインした唯一の家具であるベッドの籐張り仕上げはむしろ手技が感じられる、和の要素だ。これらを巧みに織り交ぜて、東西を融和させた。

また片山は分割されていた居室を大空間にするにあたって既存の窓を繊細に取捨選択し、採光のあるべき形を探った。階段から２階に上がる南側の壁面の窓は塞ぎ、広縁に面する３つの窓で先に広がる庭の印象を強めている。

「伝統的な和の建築は均等に窓を設け、陰影のない空間を好む傾向があります。けれど片山さんは開口部や間取りのバランスでドラマティックに光を操作します」と、北条慎示は指摘。

大判の石を張ったバスルームの窓向こうに坪庭を設け、格子で外部からの視線を遮った。これは鹿除けを目的に生まれた地域独特の奈良格子から影響を受け、片山が新たにデザインした格子だ。台形に面取りしたルーバーを二重に組み合わせ、プライバシーを確保しながら、風や光、外部の気配を感じられる仕上げ。伝統を受け継ぎながら、新しい提案をしたいという思いを細部に込めた。

「数寄屋もミニマリズムも概念に基づくデザインであって、手法を目的とすることに違和感を覚える。時に尊敬をもってルールを破る。それを怖れずに挑むことが大切でした」（片山）

LOUNGE & TEA ROOM

【カフェラウンジ+茶室】

天井の野地板はやり替えているものの、丸太材のほとんどは再活用。柱は傷んでいる箇所を埋木で補修して活用する。白壁と天井の小屋組とのコントラストが美しい。

三畳間の茶室。床柱には野趣溢れる皮付き丸太を使うが、他の納まりはコンテンポラリーな空間と合うミニマムなもの。白壁の幅木には人造大理石を使い、壁と平滑に仕上げた。

太鼓襖

建具の枠がない太鼓襖を採用し、
モダンにすっきりと見えるようにした。

壁と天井の境目

丸太梁などの有機的な形状に対し、
白く直線的なラインで新旧の対比を表現。

モールテックス

現代的な左官塗材
《モールテックス》を和室に使い、
伝統との対比を狙った。

下屋

板張りの天井を白く平滑に変更し、
既存の木部分を象徴的に見せるように調整。

床柱

赤松の皮付き床柱はかつて、
古田織部の思いつきで使われ始めたと言われる。

大壁と真壁の取り合い

本来の真壁、改修後に大壁となった壁の段差は、
志賀旧邸を参照して両者の接地点を
斜めに加工して収めている。

床板

既存建物の和室で使用されていた
松の一枚板を床板、
床の間天井に再利用した。

畳の縁

建物の前所有者が奈良晒の関係者であることから、
畳の縁には麻を採用した。

間接照明

アイストップとなる壁と床の境目に間接照明を設置し、
現代的な軽さを演出。

建具

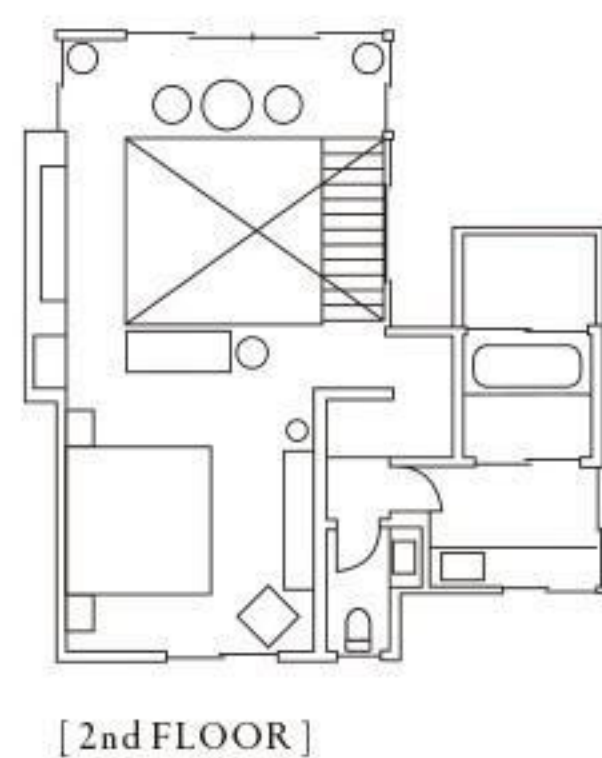
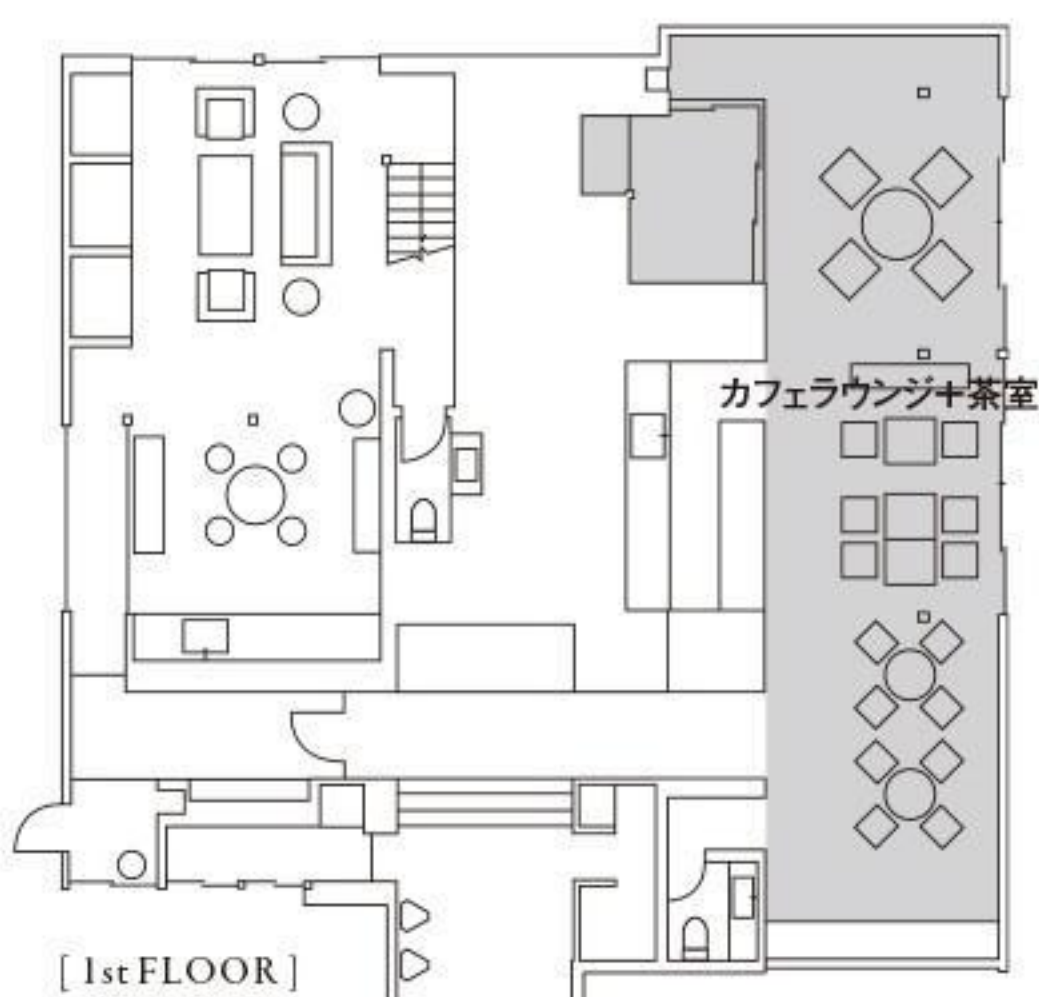
吉田五十八の考案と言われる引き込み建具を採用し、
現代数寄屋を表現した。

小上がり

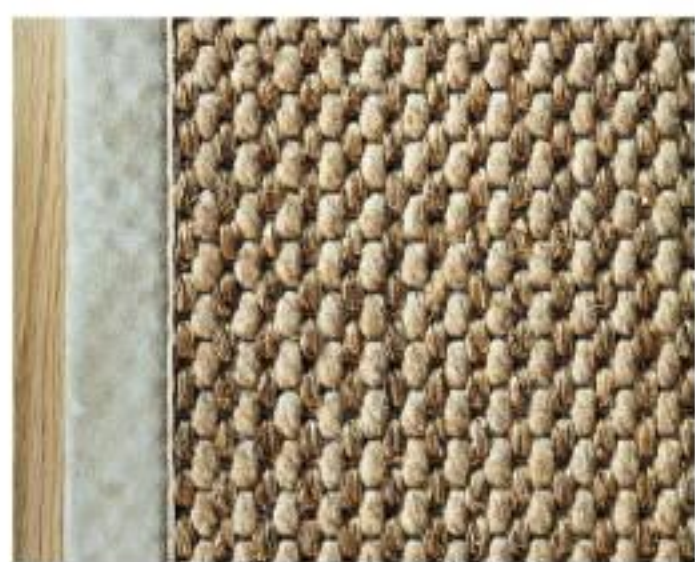
敷居と上がり框を一体に作り、
現代的でミニマルな和室の設えに挑戦している。

カフェラウンジ+茶室

[1st FLOOR]

[2nd FLOOR]

【カフェラウンジ+茶室】

LOUNGE & TEA ROOM

会員制のサロンとなるカフェラウンジには前川國男の椅子を中心に、剣持勇のラウンジチェア、坂倉準三のテーブルを置く。ミニマムな床と壁が新設された空間は、客室とは異なる洋の東西、新旧のコントラストを描く。大きなキッチンカウンターを備え、茶会などにも対応。茶室は炉が切られている。床の間にはジョナサン・モンクの作品を飾る。

スプリングヴァレー
モコ

縒りをかけていないサイザル麻とウールフェルトを織り上げたソフトタッチのラグを随所で採用した（スプリングヴァレー☎048・297・9100）。

ミカタジマ
Art d'Ameublement
(Base Martin de Viviès)

家具のアートと名づけられた作品はアクリルの支持体にスプレーで賦彩したペインティング。ペインティングという概念の幻影そのものを作品化した人気シリーズ。

original
幅木

床と壁の接地部をカバーする幅木は近年省略傾向にあるが、機能的にはあるとうれしい。空間に溶け込むように壁と平滑に人造大理石で設えている。

剣持 勇
ラウンジチェア

剣持がインテリアで参加した〈国立京都国際会館〉などで使われた回転式のラウンジチェア。身体をしっかりホールドするフォルムで張り地は新たに張り替えた。

ジョナサン・モンク
Sol Always Shines
(nine books from my library) II

現代美術の巨匠たちの作品を題材にすることで知られるモンク。ソル・ルウィットへのオマージュでもある本作品は、伝統と新しい創造のエネルギーの融合点を象徴。

北条工務店
畳縁

この家の以前の所有者は、麻にまつわる商家と関わりがあったことから、畳の縁には、そのオマージュとして、麻を採用している。

坂倉準三
テーブル

坂倉が1964年に設計した〈ホテル三愛〉などでも使われていた天童木工製の木目が美しいテーブル。製品としても販売され、ラウンジチェアなどと合わされた。

スカンジナビアンフローリング
特注フローリング

宿泊棟と同じ浮造り加工のフローリング材で、こちらはナチュラル。小屋組の濃色とコントラストをなす。（スカンジナビアンリビング☎03・6840・2887）。

新たな文化を生み出すサロン。

　南の広い庭に面するラウンジと茶室は会員制のサロンとなる。夫妻はここを関藤次郎のような文化を生み出す社交の空間にしたいと意気込む。前川國男、剣持勇、坂倉準三らの家具を置き、客室ともども書店〈POST〉の中島佑介が選書。昭和期に活躍した建築家の個人的な蔵書を基礎として、セレクトがなされた。

　白漆喰の壁を立ち上げた空間は、天井の木組みと新旧のコントラストを描く。計画全体でたびたび議論を重ねたのは、真壁（しんかべ）、大壁（おおかべ）の扱いだ。真壁と大壁は壁の納まりを指す言葉。柱の内側で壁を仕上げる真壁は日本の伝統工法で多く採用され、柱の外側で壁を仕上げる大壁は近年の住宅のほとんどで採用される。真壁は柱が露出し、大壁は柱が内部に収まるため見えなくなる。庭に面した窓まわりはもともと真壁だったが改修後は大壁となり、既存壁との段差を斜めに加工して収めた。これは下嶋松之助が手がけた同じ町内に遺る志賀直哉旧邸と同じ仕上げだ。

　ほかにも庭の三和土（たたき）など、仕上げに迷う部分は志賀旧邸を参照した。現在において合理的とは言いがたい真壁は、どこか様式化しているようにも感じるという北条愼示は、「ここでは工芸的な要素として、片山さんが緩急をつけながら採用していったように感じました」と言う。

　天井の丸太梁は多くを遺したが、柱の多くは劣化が激しく、新しい柱に差し替えた。ただし一部は、柱に組み込まれていた鴨居や長押（なげし）の跡に埋木を施して再利用した。補修跡もここでは意匠として立ち上がる。

　茶室は敷居と上がり框（かまち）を一体にし、敷居と鴨居でフレーミングされた茶室は、後退した立ち上がりとともに浮遊感を演出する。和室の入隅には柱を少しだけ見せる楊枝柱を採用するが、これも関と縁のある〈依水園〉の和室から引用したもの。畳の縁に麻を使い、同じく関の家業であった麻織物とのつながりを意識した。

　北条夫妻とは公私ともに時間を過ごし、もはや大切な友人であるという片山は「友人だからこそ、仕事には独特の緊張感があります」と笑う。一方でその対話は、奈良という土地、かつての家主であった関家、志賀直哉、下嶋松之助、さらに日本の名作家具、アート作品にも広がりを見せ、形をなしていった。

「それらを尊敬しながら、未来に向けて作った空間。だからこそ細部にこだわり、インテリアはそれを受け止める箱であればいいという思いがあったのかもしれません」

【埋木】

【暖簾】

【欄間＋大壁】

【手すり】

ESSENCE OF JAPANESE STYLE

【和のエッセンス】

【茶室】

【腕木】

【沓脱石】

【主庭】

1 門に掛ける暖簾に染め上げたのは関家の家紋をモチーフにした〈翠門亭〉のロゴマーク。グラフィックは平林奈緒美によるもの。2 奈良の民家では鹿避けを目的とし、表面を六角形に面取りした独自の「奈良格子」が見られる。これは、それを模した2階広縁の手すり格子で下嶋の時代から残る仕事のひとつ。3 柱はかつての建具との接地部に開けられた穴に埋木をした。梁は柿渋で染め、新旧の材を馴染ませている。4 欄間は既存の意匠を再現。真壁と大壁の取り合わせ部分は傾斜をつけて収めている。5 軒を支える腕木は新規に片山がデザインしたもの。絶妙なカーブを持つ形状は職人が数日がかりで仕上げたものだという。6 東に面した苔庭が主庭となる。手水鉢などは南の庭にあったものを移設した。7 隅柱には天井近くの一部のみで材木をわずかに見せる楊枝柱を採用する。8 ラウンジに面する南の庭との間には沓脱石を置く。石はもともとあったものを活用した。

7	5	3	1
8	6	4	2

DESIGNERS

photo_Masaki Ogawa
text_Yoshinao Yamada

ジャパニーズモダン家具のデザイナー名鑑 in 翠門亭。

片山正通が家具に関して協力を仰いだのは、その知識で広く活躍する〈GALLERY-SIGN〉の溝口至亮。なぜジャパニーズモダンを評価するのか、話を聞いた。

名作が多いミッドセンチュリー期の日本の家具。

ジャン・プルーヴェ、シャルロット・ペリアン、ピエール・ジャンヌレなど、フランスを中心にモダンデザインのオリジナル家具を扱う〈GALLERY-SIGN〉。そのディレクターである溝口至亮は一方で、柳宗理をはじめ、丹下健三、剣持勇ら、20世紀の日本をかたちづくった建築家やデザイナーの仕事も追いかけている。〈翠門亭〉を設計する片山正通から相談を受けた溝口は、そのコンセプトから自身が収集してきた日本の家具を提案した。

「実は、2000年代初頭からモダニズム期の日本の家具の収集を始めていた」と溝口は言う。その背景には、独立前に勤めていた会社で出会った柳宗理の存在がある。柳の足跡を辿っていくとペリアンやプルーヴェの存在とともに、坂倉準三の名が現れる。柳は坂倉のもとで研究生として働き、そこでペリアンと出会った。柳とたびたび話す機会を得た溝口は、柳を手がかりに日本のデザイン史を掘り下げ始めた。「仕事というよりも、文化継承の思いが先にありました」と当時を振り返る。

溝口が次いで興味を持ったのは剣持の存在だ。自死を選んだ背景から、当時は積極的に触れられることが少なかったという。

「それまでは剣持にノスタルジックな昭和的なイメージを持っていましたが、そうではなかったのです。昭和という時代だからこそこだわりが強く、上質である。一方で剣持が正当な評価を受けていないように感じたのも事実です」

剣持は渡米時に日本でも気候風土に即したモダンデザインの発展が必要だと痛感する。現地での助言をもとに「ジャパニーズモダン」なる言葉を用いると、予想外に流布していった。

溝口は、日本における1950年代のデザインがペリアンの大きな影響下にあるだろうという。しかし60年代に入ると、ものづくりが成熟をはじめ、技術の進化や材料の自由度もあり、がぜんオリジナリティが出てくる。

「剣持の造形にもペリアンの影響は見られますが、剣持自身はものづくりの芯にイームズの存在があると発言しています。図面で終わらせることなく職人とともにものを作る。今も昔も、この姿勢をものづくりの根幹に持つ人物が面白いものを作れるのではないでしょうか」

また当時の家具が、その多くは建築のプロジェクトのためにデザインされたものであることにも注目したいと溝口は指摘する。前川國男のもとには家具を担当する水之江忠臣という人物がいた。他の建築家やデザイナーにも家具の担当者がおり、彼らの個性に目を向けるのも面白いという。戦前から前川のもとで家具を担当した水之江は、1963年に独立。前川の晩期における建築は、また違う家具の魅力があると溝口は言う。その作品のひとつ〈福岡市美術館〉が2016年からリニューアル工事を行った際、前川がデザインしたオリジナル家具が放出された。たびたび指摘されることだが、建築に比べて家具は保存の意識が低い。散逸を怖れた溝口は可能な限りで回収し、前川事務所に連絡をした。

「それらの家具を無償で寄贈しますので、前川建築やどこかの公共施設で使っていただけないかとご連絡したのですが、むしろ次に継承して使ってもらえると嬉しいというお返事をいただいたのです。そこで〈翠門亭〉に、その一部を納めることにしたのです」

いまだ知られざる名作家具も多いと溝口は言う。歴史を追い、当時を知る人物への取材も続け、伝える姿勢は変わらない。さまざまな人物が互いに影響を与え、発展していったジャパニーズモダンの家具たち。その魅力を今に伝える〈翠門亭〉に期待を寄せる。

話を聞いた人

みぞぐちよしゆき 2005年、ジャン・プルーヴェ、シャルロット・ペリアン、柳宗理、丹下健三など、20世紀を代表する建築家やデザイナーのオリジナル家具を扱う〈GALLERY-SIGN〉を東京・恵比寿に設立。2015年、広島に支店を、2019年に東京・六本木にギャラリーをオープンさせた。

Kunio Mayekawa
前川國男

日本にモダニズムを持ち込んだ大物建築家。

ル・コルビュジエのもとで学んだ前川國男は、ピエール・ジャンヌレとシャルロット・ペリアンの合わせて３人で建築とともに家具をデザインする姿を目の当たりにしている。そんな前川にとって建築と家具をともにデザインすることは当然だったのだろう。処女作からすでに自ら家具をデザインした前川は、1960年代後半から設計した日本各地の公立美術館や博物館にも家具を数多く遺している。〈翠門亭〉で使われるのは、1979年に竣工した〈福岡市美術館〉のためにデザインされた椅子だ。リニューアル工事に際して放出されたが、これを価値あるものとして継承しようと溝口が奔走。その一部が、カフェラウンジに使われている。

1905年新潟県生まれ。東京帝国大学を卒業した夜に日本をたち、ル・コルビュジエのもとで学ぶ。帰国後は日本におけるモダニズム建築の旗手として活躍し、生涯を通じてその実現に尽力。

Armchair for Fukuoka Art Museum
福岡市美術館の椅子（1978）

直線的なフレームに成形合板による柔らかなカーブを持つ背板が取り付けられた椅子。館内では多用途に使用されていた。座面は往時の色に基づいて張り替えられている。製作を担当したのは天童木工。

Isamu Kenmochi

剣持 勇

日本におけるモダン家具のオリジン。

商工省（現・経済産業省）工芸指導所の技師としてキャリアをスタートした剣持は、来日したブルーノ・タウトに師事。戦前戦後を通じ、日本におけるデザインの普及に尽力した。1952年には日本人デザイナーとして初めてアメリカを視察。ここでチャールズ＆レイ・イームズと出会い、日本に最新のデザインを広く紹介する。独立後は家具とともに、丹下健三をはじめ建築家のインテリアデザインも多く担当した。そこで生まれた家具が製品化され、一般に普及する。〈翠門亭〉では、こうした建築のためにデザインされた家具が多い。曲げ木や成形合板、籐など、さまざまな技術や素材を駆使した剣持の多岐にわたるデザインが見られる。

1912年東京府生まれ。東京高等工芸学校（現・千葉大学工学部）卒業後、商工省工芸指導所の技師となる。独立後は家具、インテリア、インダストリアルデザインと多岐にわたって活躍。

Dust Box
くず籠(1964)

同じく籐を用いたくず籠は、大谷幸夫設計の〈国立京都国際会館〉のためにデザインされた什器の一つ。フラスコ形にラタンを編み、小口部分のみ仕上げを変えることでくず籠として機能性を高める。

Sofa
ソファ(1964)

日本でいち早く曲げ木技術を実現した秋田木工のためにデザインしたソファ。ウインザーチェアを思わせるが、背もたれのスポークに丸棒ではなく曲げ木を使い、メーカーの技術力を活かしたデザインに。

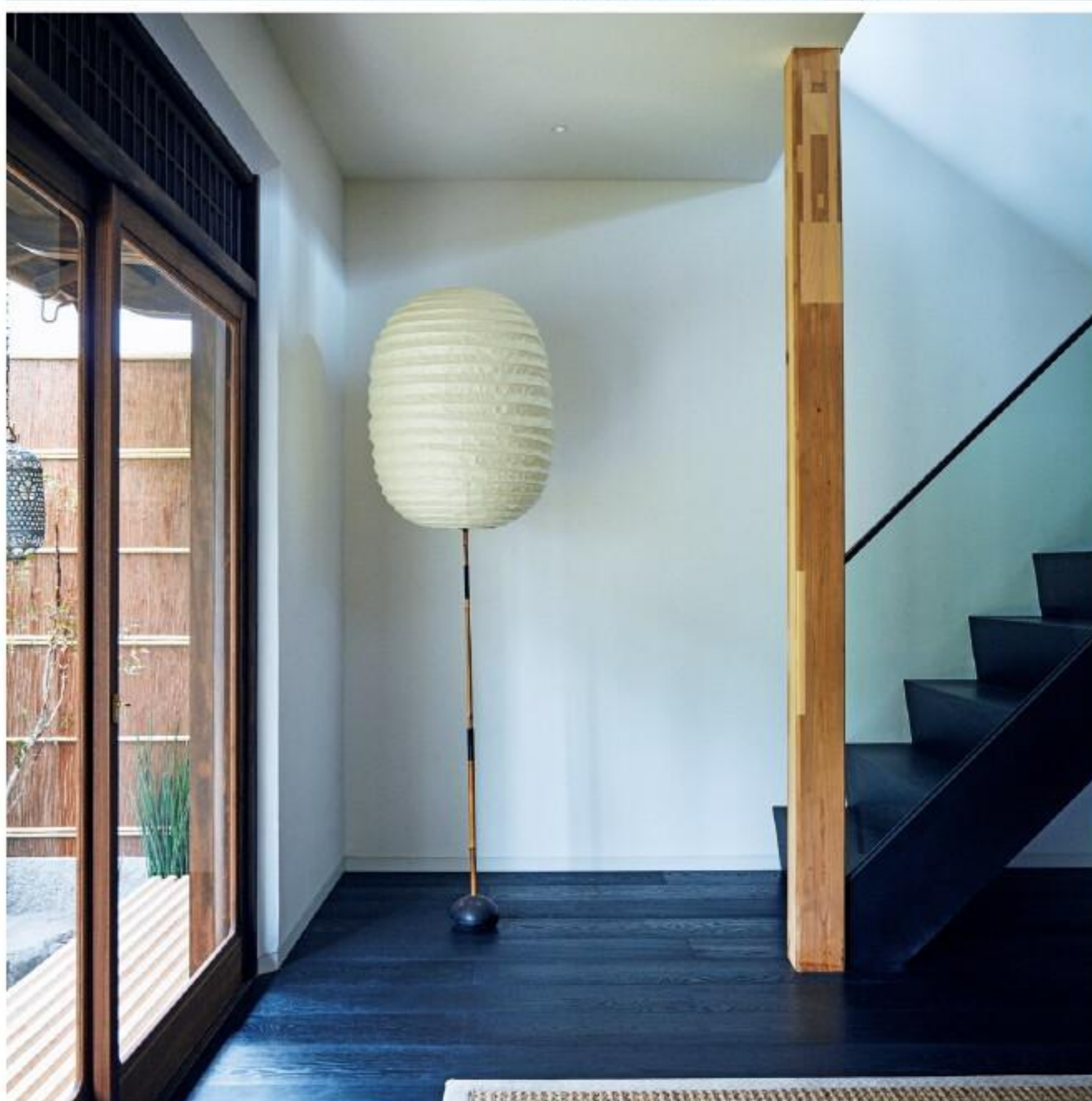
Easy Chair
ラウンジチェア(1970)

同じく〈国立京都国際会館〉のためにデザインされた天童木工のウレタンフォーム製ラウンジチェアを発展させたモデル。回転式のシートとアルミダイキャスト製脚部で、座面は天童木工にて張り替え。

Stool
スツール(1961)

1960年竣工の〈ホテルニュージャパン〉のために籐製家具をデザインした剣持は、その後も続けて家具をデザイン。このスツールは翌年発表された。籐張りのため中空となっており、軽くて頑丈。

3seat Sofa
3シーターソファ(1960s)

個人邸のためにデザインされたソファを原型に、その後も細部を変えながら製造が続けられ、後に製品化。木製フレームが座面を支える。こちらは1960年代に製作されたもの。天童木工製。

Side Table
サイドテーブル(1953)

古代アフリカの椅子にヒントを得たノグチは揺れるスツールを〈ノル〉から発表。それを発展させたテーブルがこちら。同時期に活躍した彫刻家、ハリー・ベルトイアの家具に敬意を表した造形ともいう。

Akari
32N+T(1969)

生涯を通じて200種類を超える《Akari》をデザインしたノグチ。海外での評価も高く、パリのギャラリー〈ステフ・シモン〉のためにオリジナルモデルもデザイン。こちらはスタンドタイプの《32N》。

Akari
75DL+BB3(1978)

ノグチは《Akari》を製品ではなく、作品であると言い、多くの人の手に届く光の彫刻だと考えた。こちらは現在も製造が続く《75DL》。支柱に細い竹を用い、より日本的な佇まいを持っている。

Akari
K1+T1(1980)

和紙で知られる《Akari》だが、一部のモデルでシェードに布を使う。こちらは巾着状になった絹製の《K1》。口を閉じる紐に象徴的な赤を用いる。和紙とは異なる、絹を通した光の表情が魅力だ。

Isamu Noguchi
イサム・ノグチ

©Vitra

日米の文化を繋ぎ、造形力で世界を魅了。

日本人の父、アメリカ人の母のもとに生まれた彫刻家、イサム・ノグチ。世界的に活躍した彼の生涯が日本と深い関わりを持つものであったことはもはや説明不要だろう。戦争に翻弄されたノグチは戦後、ジョージ・ネルソンの依頼から家具のデザインを始める。

1950年に再来日し、銀座三越で個展を開催。そこで丹下健三らと知り合った。翌年、再び来日したノグチは当時の岐阜市長の依頼で伝統工芸品の岐阜提灯をモチーフに《Akari》のデザインを始める。紙、竹や木といった自然素材を用いた照明器具は柔らかな光が特徴。モダンで彫刻的な佇まいと工芸的なアプローチが融和した傑作は今も世界で愛される。

1904年アメリカ・ロサンゼルス生まれ。生涯を通じて日米を往来し、彫刻や多岐にわたるデザインの分野で活躍。彫刻、ランドスケープ、そして家具や照明など、多くの名作を遺した。

Junzo Sakakura
坂倉準三

パリと日本を繋ぎ、モダン家具の礎を築いた。

前川國男に続いてル・コルビュジエに学んだ坂倉準三。在仏時からシャルロット・ペリアンと親しく、1940年には彼女を輸出工芸指導の装飾美術顧問として招聘するために尽力した。この時、ペリアンが日本各地を巡るのに同行したのが坂倉事務所の所員であった柳宗理だ。

坂倉も前川同様、建築と家具をともに考えた。その姿勢は前川以上で、事務所内に家具の工房、一時は別会社も設立した。やがて〈天童木工〉で自らの家具を実現しながら、同社にさまざまな技術革新をもたらした。家具をデザインするためにスタッフを置き、ジャン・プルーヴェに触発されて自らの家具を細部まで更新し続けた《小椅子》はつとに有名。

1901年岐阜県生まれ。東京帝国大学で美術史を学んだ後、渡仏して建築を学ぶ。ル・コルビュジエのもとで働き、帰国後に事務所設立。建築、都市計画から家具に至るまで幅広く活躍。

Round Table
ラウンドテーブル(1960s)

1964年に竣工した〈ホテル三愛(現・札幌パークホテル)〉のためにデザインした通称〝めがねイス〟とセットになることの多かったテーブル。正対称の木目が美しい。〈翠門亭〉のラウンジに置かれる。

Katsuo Matsumura

松村勝男

モダニズムと工芸を繋ぐ、知られざるデザイナー。

建築家、吉村順三のもとで家具を担当する所員としてキャリアをスタートした松村勝男の名は、他の建築家やデザイナーに比べ、知られていない。前川、坂倉、吉村の共同設計で知られる〈国際文化会館〉は、前川事務所の水之江忠臣、坂倉事務所の長大作が家具を担当し、松村は後年、館長室の設計に関わった。

吉村事務所を退所後、松屋銀座でグッドデザインコーナーの売り場を手がけ、1956年に渡辺力、渡辺優とともにQデザイナーズを設立。1958年に独立した。松村は、自らのデザインのルーツにシャルロット・ペリアンの存在を挙げた。機能的なモダニズムに工芸的な素朴さを織り交ぜた知られざる名人である。

1923年東京都生まれ。東京美術学校（現・東京藝術大学）付属文部省工芸技術講習所卒業後、吉村順三設計事務所に勤務。シンプルだが、素朴な可愛らしさを備える家具で知られる。

Rattan Armchair

ラタンアームチェア（1956）

雑誌『モダンリビング』の企画による日本版「ケーススタディハウス」のためにデザインされたアームチェア。山川ラタン（現・ワイ・エム・ケー長岡）によって製作され、現在まで製造が続く一脚。

Armchair

アームチェア（1965）

秋田木工のためにデザインされた、現在は廃番のウインザーチェア。アームと背もたれを兼ねた曲げ木によるフレームに華奢なスポークが並ぶ。座面を低く抑え、日本の生活を見据えた形状が特徴的。

Saburo Inui

乾 三郎

技術とデザインを結びつけた名工。

剣持が在籍した工芸指導所に勤めていた乾三郎は、その技術力を請われて天童木工に移籍。そこで新たな技術の開発や外部からのデザインを形作る役割を担う。一方で自らもデザインを手がけており、そのいずれもが秀逸。技術とデザインの両輪を備えた希有な存在だ。

Side Table
サイドテーブル(1950s)

柳の名作《バタフライスツール》の開発時期にデザインされたテーブル。この脚部の接合は、のちに乾の代表作《座卓》の天板と脚部の接合に応用される。

Sori Yanagi

柳 宗理

日本が世界に誇る名デザイナー。

戦後日本において工業デザインを確立した名デザイナー。家具はもちろん、規模の大小を問わぬ多岐にわたる作品で知られ、国内外の美術館に収蔵作も多い。メーカーの技術を見据え、さらなる可能性を引き出した作品で、今日まで日本の生活を支え続ける。

Elephant Stool
エレファント スツール(1954)

世界で初めて完全一体成形のスツールとして開発された名作。こちらは1956年にコトブキより発売されたFRP製のオリジナルで、1960年代の製造。

Daisaku Cho

長 大作

坂倉のもとで才能が花開いた名デザイナー。

1947年に坂倉準三建築研究所に入所した長大作は、坂倉のもとで多くの家具を担当し、のちに独立。坂倉逝去後に独立し、その後は建築を中心に活躍した。1990年代に再び家具のデザインを手がけるようになり、3本脚や三角形の家具という新機軸に晩年まで挑んだ。

Service Wagon
サービスワゴン(1972)

坂倉の死後、事務所に在籍していた長が個人でデザインを担当した天童木工製ワゴン。脚部がわずかに弧を描くフォルムと接合部のコマ入れ成形が特徴的。

Riki Watanabe

渡辺 力

モダンデザインの立役者。

剣持、柳らとともに戦後日本におけるモダンデザインを確立したデザイナー。渡辺もまた建築家と数多く協業し、なかでも清家清との協業で知られる。1970年代以降は時計を中心とするインダストリアルデザインの分野でも活躍。生活を見据えた幅広いデザインを提示した。

Riki Bench
リキベンチ(1960)

1960年に天童木工創立20周年を記念して開催された『第1回天童木工展』で発表された木製ベンチ。発表後、公共空間で数多く使用される製品となった。

MASTERPIECES CATALOG

今も生活を彩る、ジャパニーズモダンの現行家具カタログ。

Riki Watanabe
渡辺 力

Riki Bench
リキベンチ（1960）

1960年に第１回天童木工展のためにデザインされ、多くの公共施設で使用された。現在は渡辺自身がリデザインした製品を〈カンディハウス〉が製造販売する。300,300円〜（カンディハウス☎0166･47･9967）。

Torii Stool
トリイスツール（1957）

雑誌『モダンリビング』が企画した「ケーススタディハウス」家具版の試みから誕生し、1957年ミラノトリエンナーレでグランプリ受賞。その造形は今も色あせぬ魅力を持つ。97,900円（ワイ・エム・ケー長岡）。

Riki Windsor Armchair
リキ ウインザー アームチェアー（1983）

イギリスの伝統的なウインザー様式を日本人の体格や住環境に合わせてリデザイン。部材の太さに強弱をつけ、強度を高める部材の組み方を採用するなど、円熟期の仕事が見られる。121,000円〜（カンディハウス）。

Isamu Noguchi
イサム・ノグチ

Coffee Table
コーヒー テーブル（1944）

ノグチが最初に作ったインテリアアイテム。個人邸のためにデザインされたが、ジョージ・ネルソンの依頼で後に〈ハーマンミラー〉から発売。現在は〈ヴィトラ〉が製造。275,000円（ヴィトラ☎0120･924･725）。

Dining Table
ダイニング テーブル（1957）

〈翠門亭〉で使われるサイドテーブルを後に発展させたダイニングテーブル。放射状のスチールワイヤーが彫刻的で美しい。こちらも現在の製造は〈ヴィトラ〉に移っている。501,600円〜（ヴィトラ）。

Akari Floor Stand
アカリ フロアスタンド（1969）

ノグチの石彫にも見られる柱をねじったような《30N＋ST2》。二灯式で現在はLED電球を光源とし、時代に即したアップデートがされている。シェード35,200円、スタンド57,200円（オゼキ☎058･263･0111）。

Isamu Kenmochi
剣持 勇

Dust box, Stool
ダストボックス、スツール（1961/1966）

剣持は自身が設計を担当する空間のために複数の籐家具をデザイン。ダストボックスは〈国立京都国際会館〉用に作られた。スツール48,400円、ダストボックス31,900円（ワイ・エム・ケー長岡☎0258･89･7466）。

Centro
チェントロ（1985）

剣持が1956年に個人邸のためにデザインしたソファをもとに、後に製品化された。オリジナルのクッションの構造が見直されている。１人掛けから３人掛けまで用意。228,800円〜（天童木工☎0120･01･3121）。

Stool No.202
スツールNo.202（1958）

1958年に〈松屋銀座〉で開催された『アパート生活展』のためにデザインされ、曲げ木の特性を活かしたスタッキング可能な形状で人気を集める。写真は籐編み仕様。27,500円（IDC OTSUKA☎03･5530･5555）。

発表当時から途絶えることなく、そして一度は途絶えながら復刻するなど、
昭和期に活躍したジャパニーズモダンの家具は現在まで数多く作られています。
ここでは〈翠門亭〉に使われる家具を含め、室内を彩った家具および関連作の現行品を紹介。

Junzo Sakakura
坂倉準三

Arm Chair
アームチェア（1964）

〈天童木工〉が得意とするコマ入れ成形を用いたフレームの形状からアントラー（鹿の角）と名づけられた。これはフレーム内に木片を挟み込む技術で坂倉と同社の椅子開発で生まれたもの。58,300円〜（天童木工）。

Katsuo Matsumura
松村勝男

Easy Chair
イージーチェア（1970）

ロの字形の肘掛けが特徴のアームチェア。脚部に直線の材を使うことで、畳に置いても傷をつけない畳み摺と呼ばれる脚部を実現している。旅館などでも好まれ、和の空間によく馴染む。106,700円〜（天童木工）。

Sori Yanagi
柳 宗理

Elephant Stool
エレファント スツール（1954）

世界初の完全一体成型のプラスチックスツールとして開発され、1956年に〈コトブキ〉よりFRP素材で発売された。誕生から半世紀を迎えた2004年、〈ヴィトラ〉がポリプロピレン素材で復刻。15,400円（ヴィトラ）。

Tadaomi Mizunoe
水之江忠臣

Chair
椅子（1954）

前川國男の右腕であった水之江忠臣が〈神奈川県立図書館〉のためにデザインした椅子で、のちに製品化。〈翠門亭〉の椅子は別の所員による設計だが、細部に共通するデザインが見られる。36,300円（天童木工）。

Matsumura Chair
松村チェア（1972）

脂の多さから加工に不向きだった唐松材を脱脂乾燥技術で改良した時期に、それを使ってデザインした椅子。2009年、〈飛騨産業〉は同社が得意とする杉の圧縮技術で復刻生産を始めた。58,300円（飛騨産業）。

Stool
スツール（1974）

座面が、当時放送されていたテレビドラマの主人公が被っていた笠に似ていたことから「紋次郎」の愛称で呼ばれた。現在は〈飛騨産業〉が高度な技術を用いて製造する。69,300円（飛騨産業☎0577・32・1001）。

Saburo Inui
乾 三郎

Ply chair
プライチェア（1960）

技術者として建築家たちの思いを形にしながら、自らもデザイナーとして名作を残した乾による椅子。海外への輸出を見据え、２枚の成形合板を組み合わせる分解式家具としてデザイン。104,500円〜（天童木工）。

Arm Chair
アームチェア（1956）

渡辺力らと設立した〈Qデザイナーズ〉時代にデザインした椅子を原型に発展させた。ラタンの素材特性を活かし、使い込むほどにほどよいしなりで座る人の身体を支える。155,100円（ワイ・エム・ケー長岡）。

Mirror
曲木鏡（1975）

日本でいち早く曲げ木技術に取り組んだ〈秋田木工〉の技術で、わずか一つの継ぎ目のみで自然に流れるような曲線を描く鏡。生活に溶け込む美しさに柳の造形力を感じる。23,100円〜（柳ショップ☎03・3359・9721）。

INTRODUCTION

illustration_Yoshifumi Takeda
text_Mari Matsubara

藤森照信先生に聞く、「和風モダン」の前と後。

寝殿造、書院造、数寄屋造、吉田五十八らの新興数寄屋など日本の住宅様式は、長い歴史の中で変遷を遂げてきました。歴史を遡りながら、和風モダン住宅のルーツを探ります。

「和風モダン」へつながる日本の住宅様式を知ろう。

──「和風モダン」についてお話を伺う前に、そこに至るまでの日本の住宅様式の変遷を、歴史を追って知っておきたいのですが。

藤森　基本的に庶民がどういう暮らしをしていたかについては遺構も確かな記録も残っていません。ひとまず貴族など為政者や富裕層の住まいについてのみお話しすると、まず平安時代には「寝殿造」があり、その後、室町時代に武家のための住まいである「書院造」が成立する。そして桃山時代、特に千利休以後に草庵茶室が完成すると、茶室の影響を受けた「数寄屋造」が生まれます。ちなみに当時は「茶室」という言葉は存在せず、「座敷」とか「囲い」とか「数寄屋」と呼んでいたのです。書院と茶室がミックスしていき、どんどん書院の決まり事を省略していった先に「数寄屋造」が成立した、と言われています。様式を大きく分ければこの３つになるのですが、ある瞬間から突然、様式がはっきり切り替わるなんてことはなく、それぞれの特徴が入り混じっているのが普通で、現存する遺構の様式をどう捉えるか、いまだに議論が分かれます。

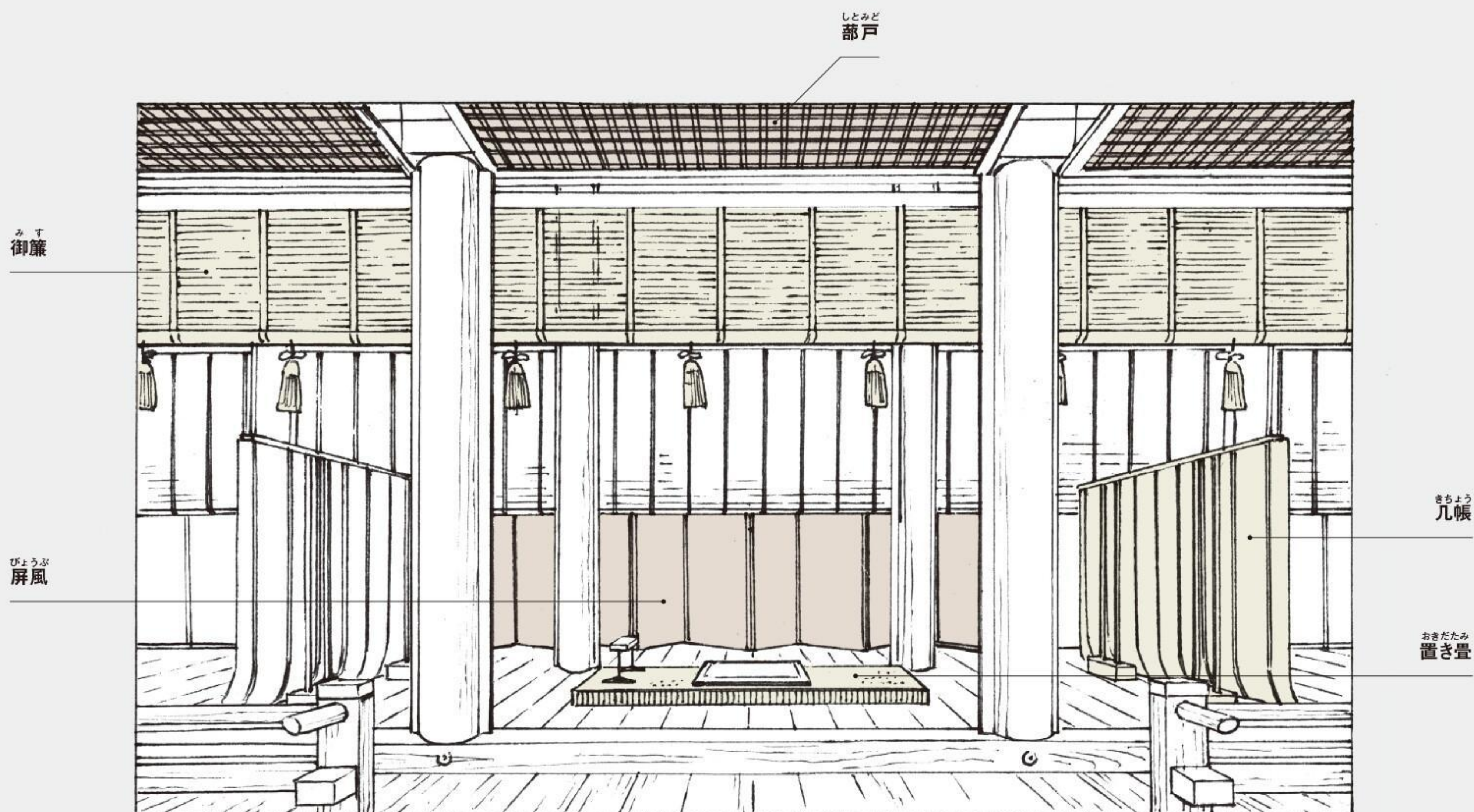
──３つの建築様式の特徴を簡単に教えていただけますか？

藤森　寝殿造の遺構の代表例は京都御所紫宸殿でしょう。屋根に覆われている下に天井はなく、間仕切りの建具もないワンルームみたいな部屋です。床は板張りで、貴人が座る場所にのみ畳を敷きました。間仕切りとして屏風や几帳を置き、目的に応じて空間をしつらえました。書院造の特徴としては、畳が全面に敷かれるようになり、床の間を設けて、掛軸や香炉や花を飾るようになります。また「付書院」という明かり窓付きの書き物机や、文具や美術品などを飾る「違棚」が作られました。襖や障子などの建具が登場し、これで空間を仕切りました。天井は基本的には竿縁天井ですが、書院造の中でも格式が上がると「格天井」という天井面に角材で格子を組む様式がとられます。現存する例としては西本願寺黒書院などが挙げられます。一説には銀閣慈照寺の東求堂同仁斎が、付書院や違棚を採用した現存最古の例だと言われますが、書院造は300年ぐらいかかって徐々に醸成されたものなので、長い間にだいぶ様相が変わってもいるのです。

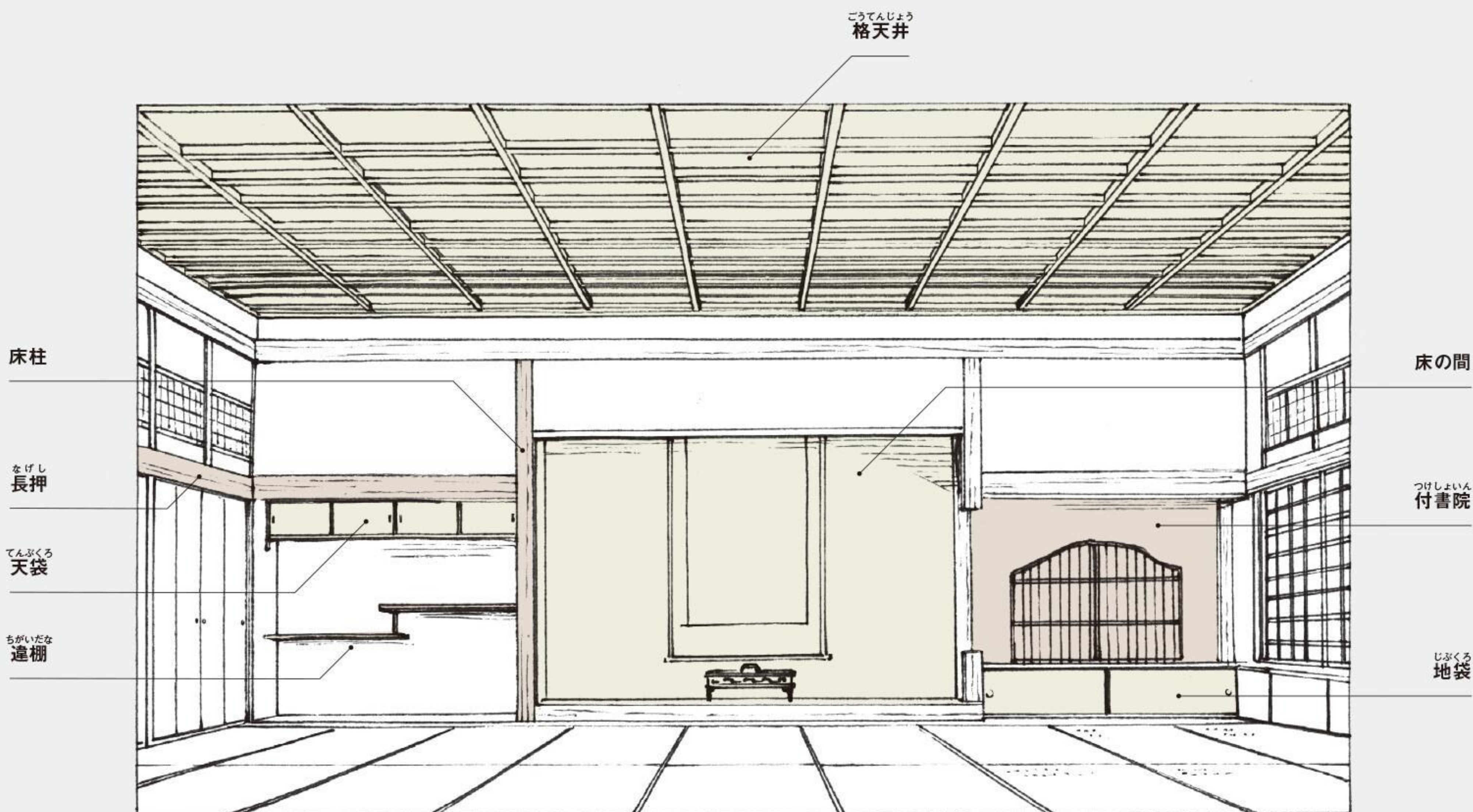
　書院造には決まり事がたくさんあって、たとえば壁は「張付壁」という紙を張った壁で、そこに障壁画が描かれていましたし、壁には長押が回っていました。そうした約束事をすべて取り払って好き勝手に作った、茶を飲むためのカジュアルな空間が今でいうところの茶室なんです。壁は土壁で、天井は竿縁天井だったり簾天井だったり、屋根組をそのまま見せたり、いろいろです。床の間はあるけれど、違棚も付書院も長押も省略してしまった。それから材木の使い方も、書院造では檜の角柱や漆塗りの床框など、格式のある材を使うのに対し、茶室では皮付き丸太など、未製材の自然な風情をそのまま取り入れたりしました。

──茶を飲むための専用空間が、住居の一様式になるのはなぜですか？

藤森　茶室はいくらなんでも狭すぎるので、もう少し空間を広げて、炉の上に天井から鎖を吊して鍋をかけ、煮炊きをして飲食を共にできたらいい、ということで「鎖の間」という空間が誕生します。これを書院などとつなげてより広い空間にしたのが数寄屋造の始まりだと言われています。これは茶室研究の碩学だった故・中村昌生氏の説です。江戸時代以降、ある程度の生活水準の住宅には書院・数寄屋・茶室の３つが備わっていました。この中で茶室は茶をたしなむ人だけが必要としましたが、１軒の家の中に書院造と数寄屋造が共存していることは多かったのです。法事や結婚式など家族の大事な集まりや、客との会談などは格式のある書院造の部屋でやり、もう少し気心の知れた人同士で遊ぶときは、数寄屋造の部屋で気兼ねなく楽しんだわけです。

蔀戸
御簾
几帳
屛風
置き畳

【寝殿造】

平安時代以降の貴族の住まいの形式を「寝殿造」という。池のある庭に面して中心に母屋「寝殿」があり、その他の小さな建物と渡り廊下でコの字形につながっている。開口部は「蔀戸」という建具を上に跳ね上げて開閉し、「御簾」で光や風を避けた。天井はなく、間仕切りがない板張りの空間で、貴人が座る部分だけに畳を置いた。「屛風」や「几帳」など可動式の間仕切りを立てて場所をしつらえた。

格天井
床柱
床の間
長押
付書院
天袋
違棚
地袋

【書院造】

室町時代以降成立した、武家のための住まいの形式が「書院造」。畳が部屋全体に敷かれるようになり、「床の間」が設けられ、その脇に明かり窓のある書き物机「付書院」や、座敷飾りを飾るための「違棚」が作られるようになる。「天袋」や「地袋」といった作りつけ収納も備わる。天井は高く、格式が高い場合は格子状に材を組んだ「格天井」となる。襖や障子が登場し、鴨居の上に「長押」を回す。

数寄屋の近代化に取り組んだ「和風モダン」の先駆者たち。

——ところで「和風モダン」という言葉はいつから使われるようになったのですか？

藤森　和風という言葉を使いだしたのは昭和に入ってからだと思います。それ以前は一般住宅が和風であることはごく当たり前だったから、わざわざ言う必要もなかったのです。大正期までの伝統的な住宅に問題があったわけではなく、改変する必要もなかった。ところが、昭和に入ると近代ヨーロッパのモダニズムの思想と美学が流入し、建築家たちは数寄屋の近代化を推し進めたいと考えました。アールヌーボー以降のモダンデザインやバウハウス、ル・コルビュジエなどの作品に触れたとき、それらが日本家屋の伝統的な様相と近接していることに気づくのです。たとえば19世紀以前のヨーロッパの家は石造りで開口部が極端に小さかったのが、コンクリートや鉄骨の導入によって非常に開放的になったわけですよ。日本の家は昔から襖を開けたら何もない空間が抜けているような造りですから、これはヨーロッパの新しい主張とわりと合致しているなと。そこに気づいた最初の建築家が〈聴竹居〉の設計で有名な藤井厚二、少し遅れて吉田五十八でした。

——二人の違いはどんなところですか？

藤森　藤井はモダニズムの考えと美意識によって数寄屋を近代化しようとした。それが〈聴竹居〉に表れています。対して吉田は伝統的な数寄屋で育ち、長唄を趣味とする粋人だったから伝統の側からアプローチしました。日本人のDNAに備わっている感覚的なものを大事にし、大工棟梁の手技を残し、だらっと寝そべってお酒でも飲みたくなるような空間を作った。だから料亭や旅館の注文も多かった。二人の差は微妙で感覚的なものだから説明は難しいのですが。

——吉田五十八が行った数寄屋の近代化とは、ずばりどんなことですか？

藤森　吉田はル・コルビュジエを意識していたから、ル・コルビュジエの「近代建築の五原則」を真似て、「近代数寄屋住宅と明朗性」という論文を図解入りで書いています（p.69下）。最も重要な点が、従来の書院造や数寄屋造にあった煩雑で過剰な線、つまり長押や竿縁や廻り縁、吊り束（づか）などを極力なくすこと。床の間の奥にあった隅柱は土壁で塗り込めて見えなくし、一部の柱を壁の中に塗り込めることによって「大壁真壁」にする。広い面で構成されたシンプルで明朗な空間を心がけました。そのために金物を積極的に使った。たとえば細い柱同士を突き合わせる時に、中にホゾを切ることができないなら、平気でボルトを使う。それからアルミやステンレスなど新建材もどんどん活用する。今日のようにビルの中に伝統的な数寄屋建築を入れられるようになったのは、金物も新建材も積極的に取り入れた吉田のおかげですよ。もし吉田がいなければ、和風旅館や料亭は今ごろ絶滅していたかもしれません。

——吉田のほかにも数寄屋の近代化に向き合った建築家がいますね？

藤森　藤井厚二と同じ系統にA・レーモンド、前川國男、吉村順三などがいますが、この人たちはヨーロッパのモダニズムを意識した木造モダニズムの実践者です。堀口捨己は茶室研究から出発して数寄屋の近代化を目指した。村野藤吾をどう位置づけるべきかいつも迷うのですが、和風をやった、というよりもディテールの処理のうまさが傑出しています。吉田は日本家屋の明朗化を宣言し、新建材の発達や防火規制法など時代の要請にも対応しながらひとつのスタイルを作り上げた。それが「近代数寄屋」とか「新興数寄屋」とか「吉田流」と呼ばれて広く普及したところが特徴的だったと思います。

話を聞いた人

ふじもりてるのぶ　建築史家、建築家。1946年生まれ。東京大学名誉教授、工学院大学特任教授、東京都江戸東京博物館館長。作品に〈高過庵〉、〈ラ コリーナ近江八幡〉（日本芸術院賞）など。著書に『日本の近代建築』（岩波新書）、『茶室学講義』（角川ソフィア文庫）ほか多数。

モダン数寄屋を代表する建築家

Koji Fujii
藤井厚二

モダニズムを数学的に捉え自邸で実験を繰り返した。

1888年生まれ。東京帝国大学工科大学建築学科卒業。竹中工務店を経て欧米諸国を巡遊。帰国後京都・大山崎に広大な土地を買い、住宅設計の実験を繰り返し1928年自邸〈聴竹居〉が完成。1938年没。

photo_Yuji Ono

〈聴竹居〉1928年、京都市。

Isoya Yoshida
吉田五十八

粋な文化に精通しながら感覚に訴える数寄屋を実現。

1894年東京生まれ。〈太田胃散〉創業者の父が58歳の時に生まれたことからの命名。東京美術学校（現・東京藝術大学）卒業。作品に〈大和文華館〉〈吉屋信子邸〉（現・吉屋信子記念館）など。1974年没。

photo_Yuji Ono

〈北村邸〉（現・四君子苑内）1963年、京都市。

Sutemi Horiguchi
堀口捨己

八勝館に見られる桂離宮へのオマージュ。

1895年生まれ。東京帝国大学建築学科卒業、同大学院修了。著書『利休の茶室』で日本建築学会論文賞（1950年）。作品に〈八勝館・御幸の間〉〈旧一条恵観山荘移築〉（現・止観亭）、〈如庵移築〉など。1984年没。

photo_Yuji Ono

〈八勝館・御幸の間〉1950年、名古屋市。

Togo Murano
村野藤吾

ホテルや官庁も手がけながら到達した融通無碍の和風。

1891年生まれ。早稲田大学建築学科卒業。数寄屋について、家主であり数寄者だった泉岡宗助に学ぶ。作品に〈佳水園〉（現・ウェスティン都ホテル京都和風別館）、〈なだ万山茶花荘〉など。1984年没。

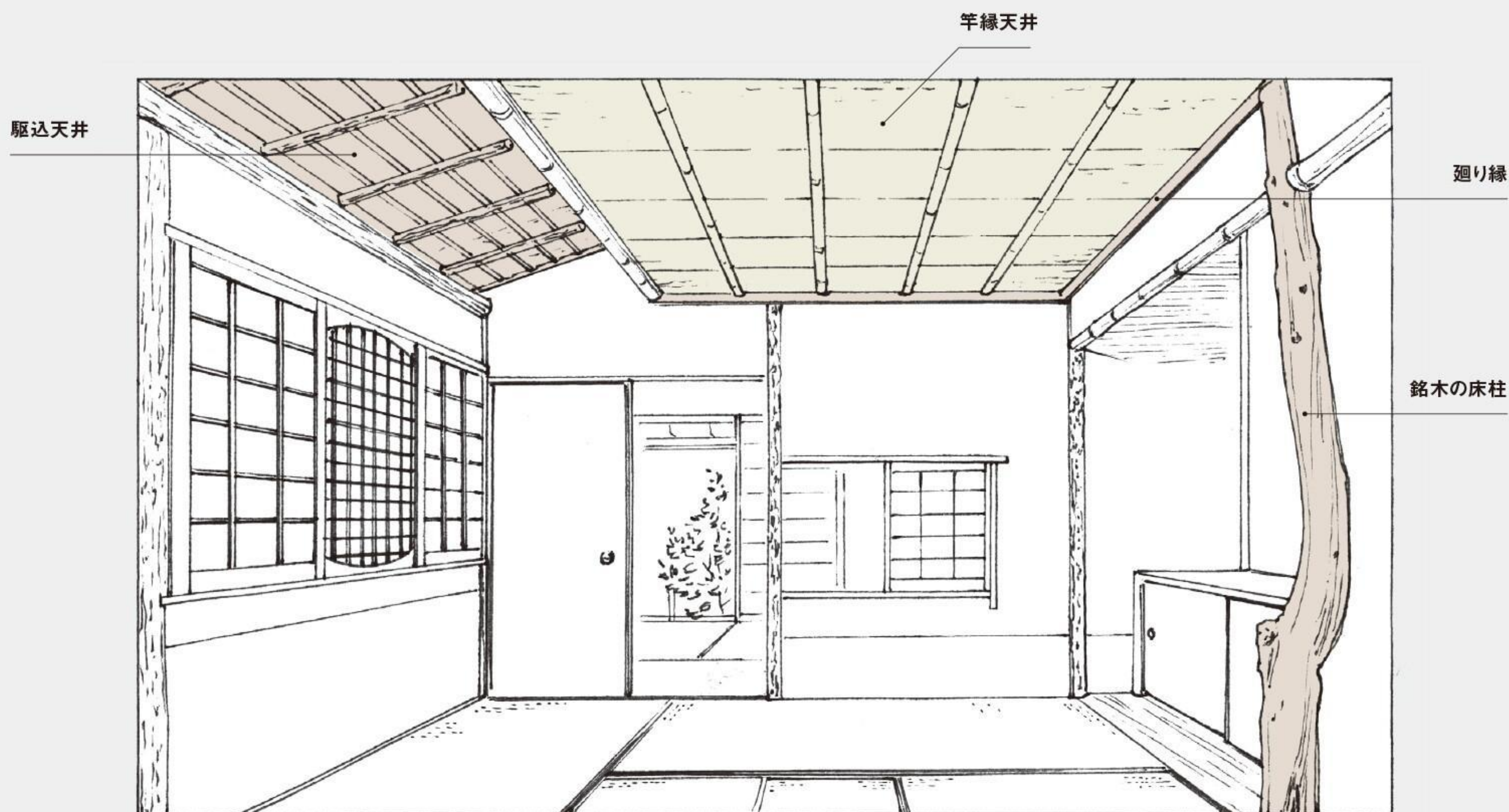
photo_Yuna Yagi

〈佳水園〉。1959年、京都市。

竿縁天井

駆込天井

廻り縁

銘木の床柱

【伝統数寄屋】

数寄屋とはもともと「茶室」を意味していたが、近世以降、数寄屋に影響を受けた数寄屋風書院造が登場。書院的な決まり事（付書院、違棚など）から徐々に離れて「数寄屋」に至る。「好き勝手に作る」という意味も含み、皮付き丸太や銘木を床柱に使う。また天井も竿縁天井や屋根組を見せる駆込天井などを採用した。棟梁による口伝の「木割」にしたがって、柱の間隔や建具の大きさが決まっていた。

目透張り天井（めすかしばりてんじょう）

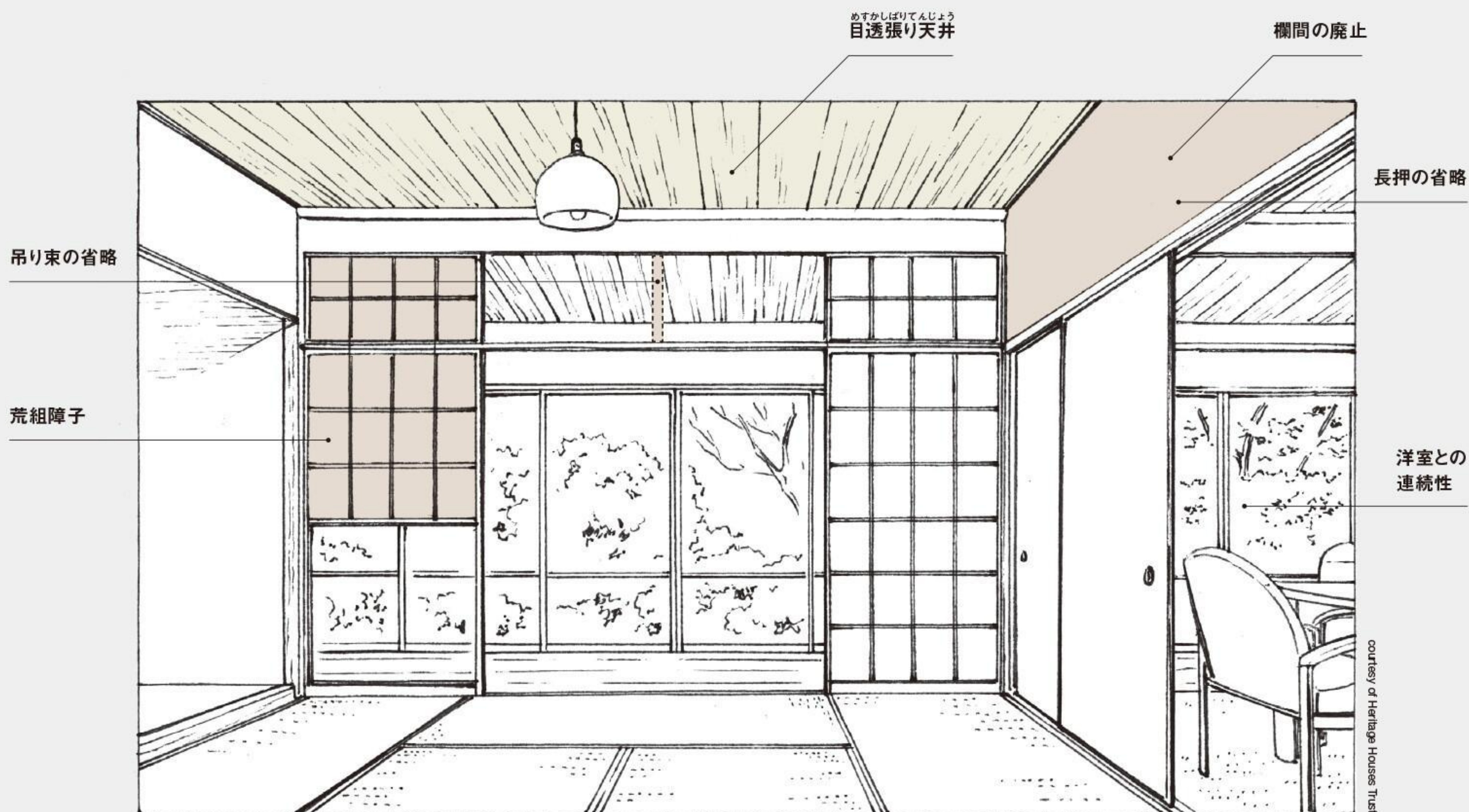
欄間の廃止

長押の省略

吊り束の省略

荒組障子

洋室との連続性

courtesy of Heritage Houses Trust

【新興数寄屋】

吉田五十八は従来の数寄屋建築に縦横の線が多すぎることを嫌った。そこで竿縁天井をやめて幅広の薄板を張る「目透張り天井」に、桟の本数を少なくした「荒組障子」を考案した。欄間をやめ、欄間や鴨居がたわむのを防ぐ「吊り束」という部材を省略し、金物で補強した。長押もなくして、壁面がなるべく広い面になるよう工夫した。隣に洋室を設けることもあった。(吉田五十八設計〈O邸〉*現存せず)

THE FORMER KISHI RESIDENCE IN HIGASHIYAMA

photo_Futoshi Osako
text_Mari Matsubara

静岡｜御殿場

東山旧岸邸

日本建築の明朗化を追求した 吉田五十八流数寄屋の集大成。

吉田五十八が晩年手がけた、政治家・岸信介の御殿場の自邸が、
現在も竣工当時に近い形で修復され残っています。
ディテールに宿る工夫の数々を解き明かします。

1_照明の埋め込み

2_簡略化した自由な床の間

3_地袋に空調を仕込む

The Former Kishi Residence
in Higashiyama（1969）
by Isoya Yoshida
Gotemba, Shizuoka

1969年竣工。設計：吉田五十八。吉田五十八が没する5年前に手がけた晩年の作。1階和室。**1** 照明を埋め込んで出っ張りをなくし、天井の面をフラットにした。**2** 床柱に銘木を使う従来の数寄屋の価値観から脱却し、簡素で目立たなくした。**3** 裏に温水暖房のラジエーターを隠した地袋を金属製にした。**4** 線が多い竿縁天井をやめて、突板の目透張り天井に。**5** 欄間がたるまないよう上から吊る部材「吊り束」と、装飾的な欄間を省略し、余計な線をなくした。**6** グリッドの大きな荒組障子で空間をすっきりと見せる。**7** 下半分をすり上げる雪見障子で取り込む光を調整。●静岡県御殿場市東山1082-1☎0550-83-0747。10時～18時（10月～3月は～17時。入館は閉館の30分前まで）。火曜休。入館料300円。

吉田五十八が行った数寄屋建築の改革とは？

吉田流数寄屋の集大成〈岸信介邸（現・東山旧岸邸）〉の着目点について、藤森照信との共著『五十八さんの数寄屋』で詳細な解説をしている数寄屋建築家の田野倉徹也氏に話を聞いた。「吉田五十八は芸大の出身で、日本画家と交流があり画室の設計をよく頼まれました。柱と柱の間に引き違い障子を入れるしかなかった従来の和室では大きな開口が得られず、画家が必要とする採光に限界があった。そこで吉田は雨戸・窓ガラス・障子すべてを全開にできる引き込み式とし、障子の下半分を上げられる雪見障子を積極的に取り入れました。〈旧岸邸〉では、当時普及し始めたアルミサッシで引き込み戸に挑戦しています。また、幅広の板が反らないよう裏側で細工が必要な〝目透張り天井〟を、突板（材を薄板に削いでベニヤに貼ったもの）で作ることを積極的に行った。そこには竿縁天井に出る余計なラインを省き、すっきり見せるという美的理由もありました。障子に使われる和紙は昔サイズが小さかったので、それに対応して桟の本数も多かったのですが、大判和紙が普及すると、吉田は桟を減らしてグリッドの大きい〝荒組障子〟を作らせました。桟の交点が減るので職人の手間が少なくてすみます。また法律改正で柱は防火被覆が原則になると、従来の〝真壁〟では６尺間隔で存在していた柱の上にボードをかぶせ、左官で塗り込める〝大壁〟構造を室内にも取り入れるようになった。こうして吉田の取り組みは〝新興数寄屋〟と呼ばれて話題となりました。難易度の高い職人仕事を簡略化し予算軽減にもなったので、ハウスメーカーが続々と真似するようになり、広く普及したのです。つまり吉田五十八は〝和風建築の作り方をつくった人〟。大工、左官、経師、建具屋と職種が分かれ、口伝の伝統工法に囚われ、建築家が口を挟む余地のなかった数寄屋建築を、職人と同等の知識を持つ吉田だからこそ近代に見合うよう改変できた。生前に〝吉田流〟という自身のスタイルを確立し、それが今や和風空間の一つのスタンダードとなったのです」

話を聞いた人

たのくらてつや　数寄屋建築家。1978年生まれ。東京大学大学院を修了、鹿島建設を経て独立。作品に漫画『数寄です！』に登場する〈山下和美邸〉ほか〈岩惣洗心亭〉〈にっぽん文楽組立舞台〉など。洋館建築で名高い東京・世田谷の「旧尾崎邸保存プロジェクト」に参画中。

4_目透張り天井

5_吊り束の省略

6_荒組障子

7_雪見障子

1_柿葺きの代わりにスレート屋根材

2_中庭を採用し屋根を分割

3_地面との高低差があまりない玄関

正面玄関。**1** 柿葺きでは檜や槙の薄板を使うが、吉田はアメリカで開発された「カラーベスト」というセメントと珪砂に繊維を混ぜた屋根材を採用。**2** 中庭を作り大屋根を分割することで屋根を低く抑えた。**3** 玄関前のポーチは高さ20㎝と低く、内外の境を曖昧に。

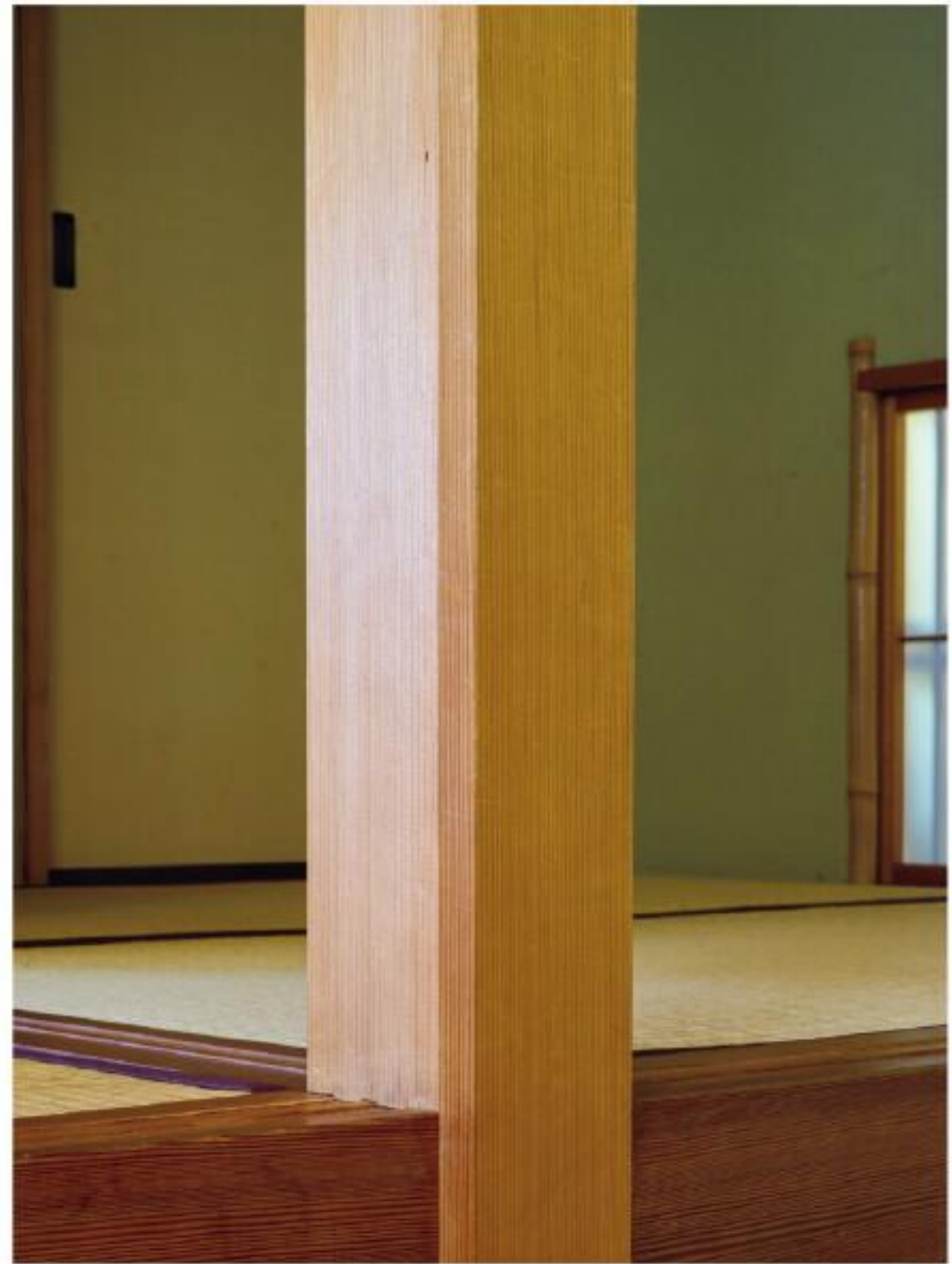
5_照明を自らデザイン

4_塩化ビニール製の天井

6_大開口で庭と一体化

7_洋間にも床の間

1階居間。**4** 葦簀張(よしずばり)のように見せかけた塩化ビニールの天井。**5** 吉田は積極的に照明をデザインした。**6** 雪見障子だけ残し、雨戸・網戸・ガラス戸は引き込み戸にして全開できる。庭とのつながりを重視した。**7** 椅子とテーブルの空間にも床の間的空間をしつらえた。

5 3 1
6 4 2

1 2階和室の「八方柾目」の柱。四方に柾目を持つ無垢材は1本の丸太からわずかしか取れない。吉田は芯材に柾目板を張り、さらに角取りした面にも柾目の木を埋め木した（下左に詳細図）。2 葦簀風の塩ビの建材が張られている。吉田は新建材の使用に寛容だった。3 伝統的な日本家屋で家相学上忌み嫌われていた中庭を作り、室内に光を取り入れた。アルミのルーバーが簾がわり。4 戸袋を設けず、外壁と内壁の間にすべての建具を格納する引き込み戸。構造とは無関係の梁に照明を仕込み天井にバウンスさせる。5 丸太の鴨居も、高度な仕事を職人に頼めたからこそ。6 空調機を地袋に隠し、金属メッシュの襖風吹き出し口としている。

数寄屋近代化を目指した吉田五十八の工夫。

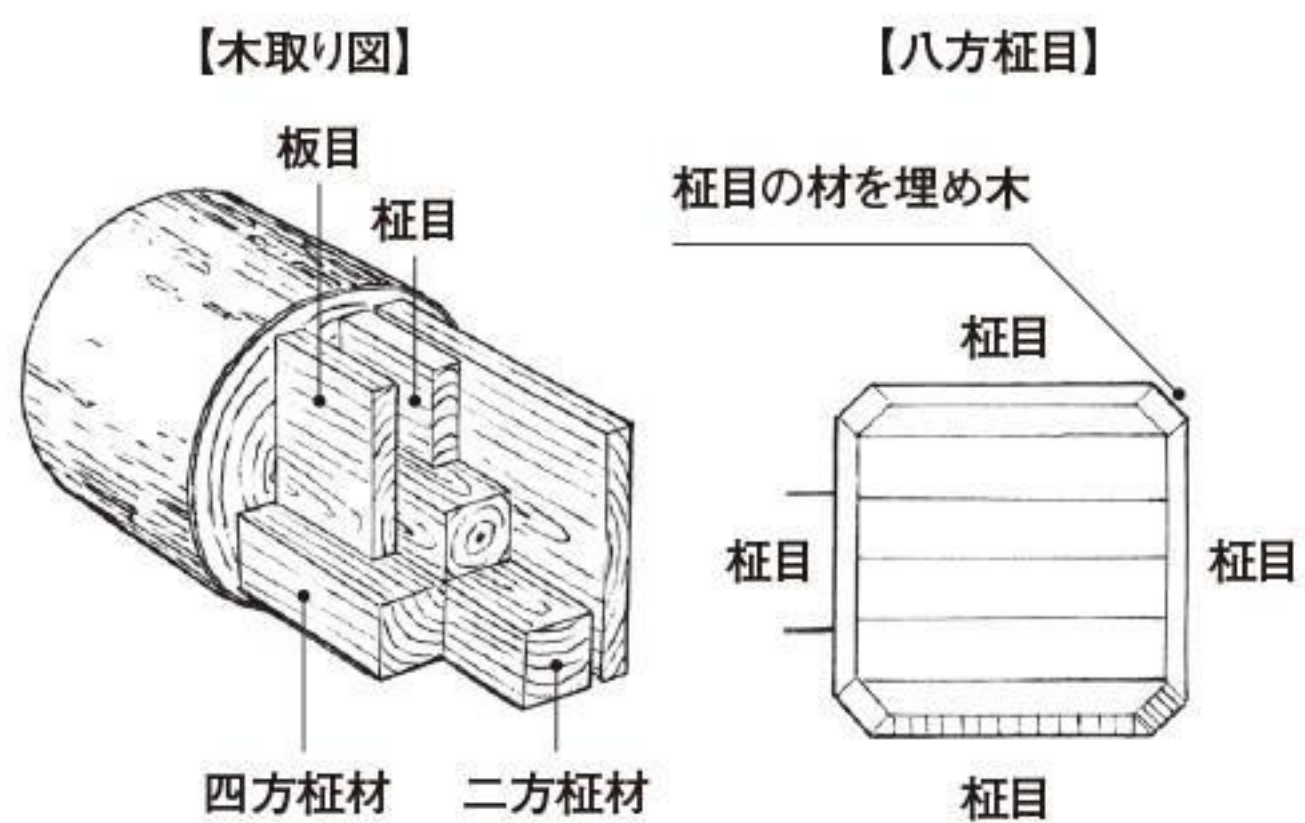
板目が嫌いで柾目を好んだ吉田考案「八方柾目」。

丸太を挽いた時、波形や筍状の模様が現れる木目を「板目」といい、真っ直ぐな平行線の木目の材を「柾目」という。4面が柾目の材を「四方柾」というが取れる量が少ない。吉田は板目の曲線が見た目にうるさいと考え、均質な柾目を好んだ。芯材に柾目の板を張り、さらに角の面にも柾目の木を埋め込み「八方柾目」にした。

【木取り図】

板目
柾目
四方柾材
二方柾材

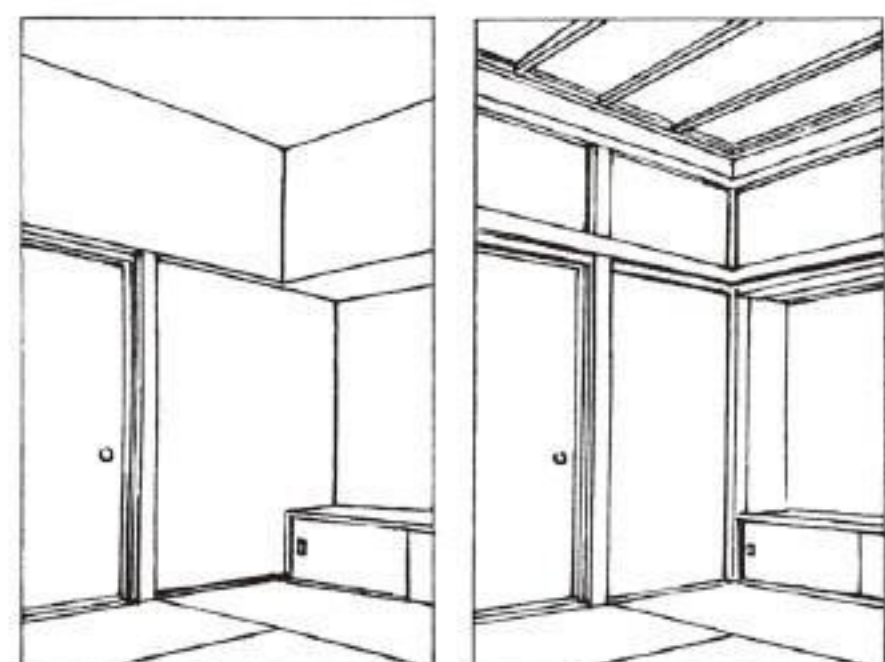
【八方柾目】

柾目の材を埋め木
柾目
柾目
柾目
柾目

吉田五十八が図解した数寄屋のビフォー&アフター。

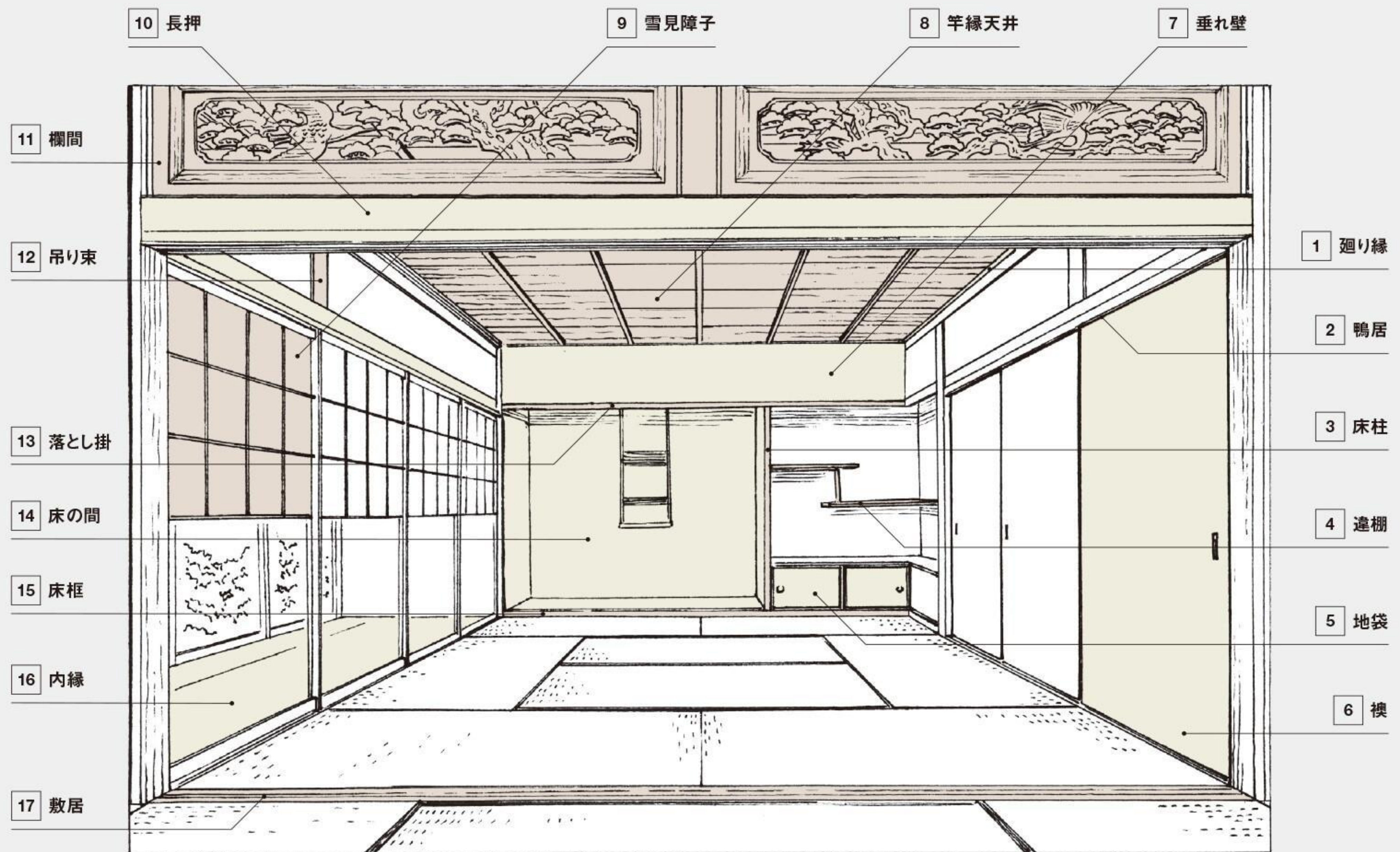
吉田は「近代数寄屋住宅と明朗性」という論文で、その要点を図解している。従来の住宅には竿縁天井、廻り縁、長押、吊り束、鴨居、床の間の隅柱などの線が非常に多かった。吉田はそれらを次々と省略。天井と壁を同材にしたり、決まった間隔で柱がある従来の「真壁」を、一部の柱を塗り隠して広い面を見せる「大壁真壁」にした。

【吉田流数寄屋】

【吉田流以前】

BASIC TERMS OF JAPANESE-STYLE HOUSE

これだけは覚えておきたい和風住宅の基礎用語。

10 長押
9 雪見障子
8 竿縁天井
7 垂れ壁
11 欄間
12 吊り束
13 落とし掛
14 床の間
15 床框
16 内縁
17 敷居
1 廻り縁
2 鴨居
3 床柱
4 違棚
5 地袋
6 襖

【室内】

10 長押

鴨居の上の壁面などに取り付けられた、柱と柱の間をつなぐ横材のこと。もともとは構造材だが、のちに装飾的にも取り付けた。

11 欄間

障子や襖の鴨居または長押と、天井との間に設けた開口部。採光や通風の目的の他、透かし彫りなどで装飾性を付加することも。

12 吊り束

欄間や鴨居の部材が自重によってたわんで下へ下がることを防止するために、天井から吊る短い部材のこと。

7 垂れ壁

天井から垂れ下がり、床まで届かない壁のこと。床の間には欠かせないもので、掛軸の見え方を左右するトリミング機能もある。

8 竿縁天井

天井形式のひとつで、竿縁と呼ばれる竹や丸太の細い横木を渡した上に薄板をのせたもの。天井裏で吊ってたわむのを防ぐ。

9 雪見障子

障子の下半分にガラスを入れ、幅いっぱいの小障子を付けたもの。小障子を上げ下げすることで採光を調節し景色を切り取る。

4 違棚

２枚の棚板を左右段違いに取り付けた棚。書院造に取り入れられ、以降床の間の脇に設けられる。香炉や花器などを飾る。

5 地袋

違棚の下などに付けた小さい袋戸棚。引き違いの小襖が付く場合が多く、収納の機能を果たす他、装飾的な意味合いもある。

6 襖

部屋を出入りするための建具の一種で、木製の骨組みに両面から和紙や布を重ね貼りしたもの。現代では板に和紙貼りのものも。

1 廻り縁

天井と壁が接する部分に取り付けられた細い棒状の化粧部材。細竹や角材の他、皮付きの自然の木材が使われることもある。

2 鴨居

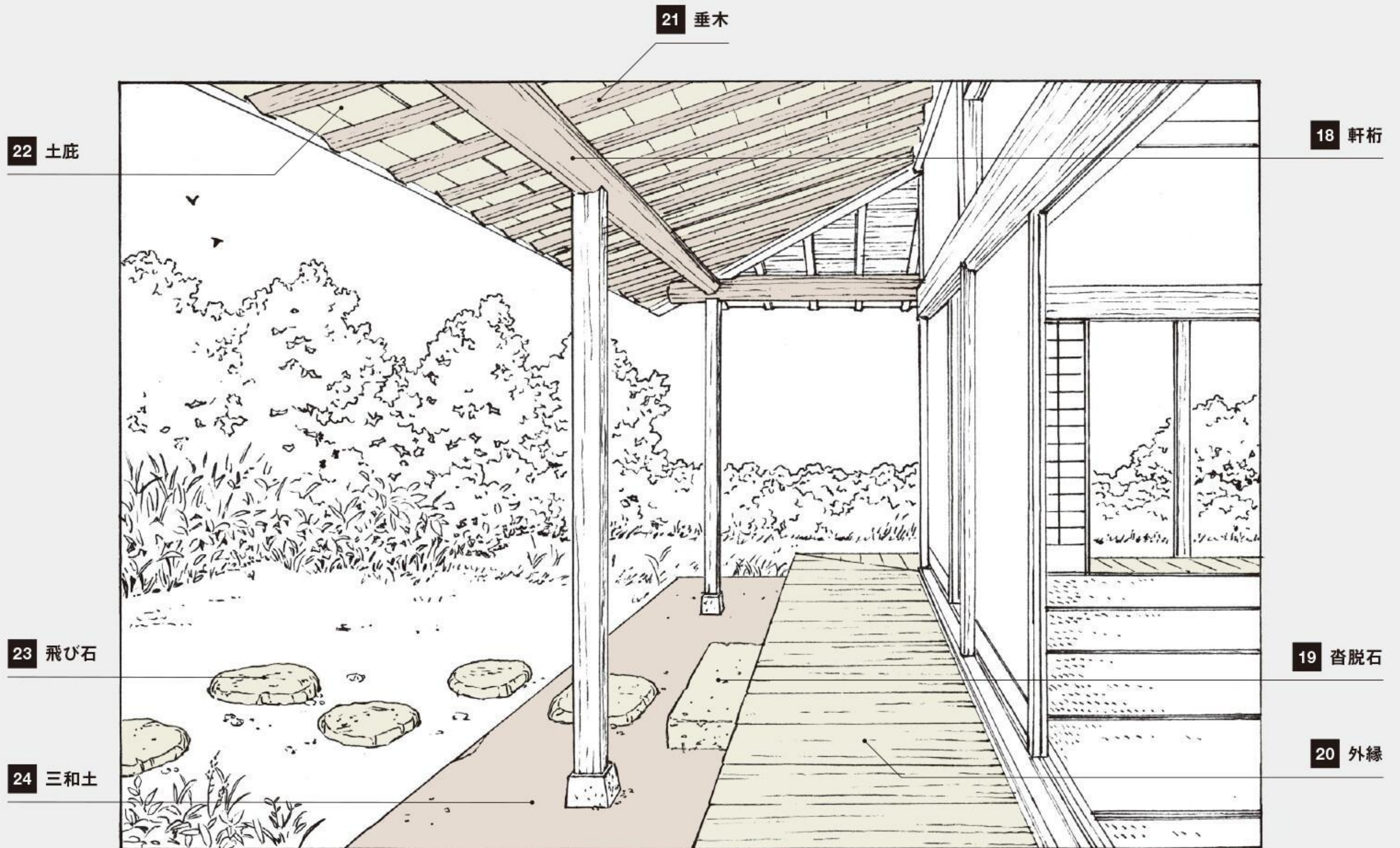
障子や襖をはめ込むために、上部に取り付けられた横木のこと。建具を引き動かすための溝がつけられている。

3 床柱

床の間の前側にある２本の柱のうち主役となる柱で、部屋の格に合わせた見どころのある材が用いられる。もう一方は相手柱。

illustration_Yoshifumi Takeda　text_Mari Matsubara

日本建築や和風の住まいを訪れて説明を受けても、
肝心の用語がわからない！ そんな経験が誰しもあるはず。
ここでは最低限覚えておくと便利な用語をまとめました。

21 垂木
22 土庇
18 軒桁
23 飛び石
19 沓脱石
24 三和土
20 外縁

【室外】

22 土庇（どびさし）

建物の外側へ大きく張り出した庇のことで、下が土間になっている。外縁よりもさらに内外が曖昧になった空間を演出する。

23 飛び石（とびいし）

茶室への通路である露地や庭園に置かれた歩行のための石。扁平な石を、歩を進めやすい間隔に、作為が見えないよう配置する。

24 三和土（たたき）

土間床の仕上げの一種。花崗岩・安山岩などが風化した土にニガリなどを混ぜ、水を加えて練り固め床に塗り、叩き締める。

19 沓脱石（くつぬぎいし）

玄関や縁側などで、履き物を脱ぐために置かれた石。段差のある内外をつなぐ踏み台でもある。上面が平らな石が選ばれる。

20 外縁（そとえん）

雨戸やガラス戸の外側に設けられた縁側のことを外縁という。雨ざらしとなるため、別名濡れ縁（ぬれえん）とも呼ぶ。

21 垂木（たるき）

屋根の流れに沿って、屋根のてっぺんにある棟木から軒先までをつなぐ部材。垂木の勾配が屋根の勾配を決定する。

16 内縁（うちえん）

部屋の外周部にある廊下や出入り口として利用される板敷きの空間を縁側といい、雨戸やガラス戸の内側にある場合、内縁という。

17 敷居（しきい）

障子や襖をはめ込むために、下部に取り付けられた横木のこと。建具を滑らせるレールの役割とともに空間を仕切る意味もある。

18 軒桁（のきげた）

建物の長手方向の外周の柱の上部をつなぐ水平材。屋根を支えて庇へ下りてくる垂木の荷重を、長い材を使って支える。

13 落とし掛（おとしがけ）

床の間の前面の垂れ壁を支えるための横木のこと。この材の中央裏面に釘を打って、釣り舟花入を掛けることもある。

14 床の間（とこのま）

一般的に和室の床を一段高くし、書画や花、香炉などを置くために設けたアルコーブ状の空間。室町時代の僧房の押板が起源。

15 床框（とこがまち）

床板または床畳の前端に取り付けられた木材のこと。床框がなく、手前の畳と段差をつけない場合を「踏み込み床」という。

参考文献：『大辞林』（三省堂）、『世界で一番やさしい茶室設計』（エクスナレッジ）

JAPANESE MODERN STYLE

和風モダンの家と暮らす。

和風建築の美を継承しながら、現代の数寄者がモダンに改修。ジャパニーズモダンの家具の設え、瓦敷きに置かれた檜風呂、繊細な障子張りなど、細部まで美しい和空間を取材しました。

STYLE1

湯室のある家

設計:魚谷繁礼建築研究所／魚谷繁礼

小山薫堂（放送作家）

昭和初期に建てられた伝統的和風建築の残すべき部分を
見極めながら、理想的なリノベーションを成功させた小山邸。
入浴しながら宴会できる部屋まで作ってしまいました。

photo_Masaki Ogawa
text_Mari Matsubara

こやまくんどう 1964年熊本県生まれ。放送作家、脚本家。京都芸術大学副学長。2008年、映画『おくりびと』の脚本で日本アカデミー賞最優秀脚本賞受賞。執筆活動のほか、熊本県や京都市の地方創生企画にも参画。2012年より料亭〈下鴨茶寮〉代表取締役社長に就任。

築90余年の屋敷をリノベーションした小山薫堂。15畳の座敷はほぼ元のまま残し、障子や襖をやり変えただけ。あえてイームズのラウンジチェアを置き和洋の取り合わせを楽しむ。

湯浴みを介した交流〝湯道〟を実践する場。

元の持ち主である経済学者が書庫として使っていた離れはカビが生えるなど傷んだ状態だったので、柱や梁を残して全面改装し、小山が提唱するお風呂を介したコミュニケーション〝湯道〟のための空間「湯室」にした。瓦敷きの空間奥に檜の浴槽を据え、目隠しに現代アーティスト高橋信雅の４枚組の作品をつなげた屏風を広げ、手前のスペースで音楽を聴いたり、お酒や食べ物を持ち込んで宴会をしたり。縦桟の引き戸はフルオープンにでき、全長８mの開口部からは川のある景色が見える。

JAPANESE-STYLE ROOM

伝統和建築の意匠美と現代性との融合。

右上／障子紙は和紙作家の堀木エリ子による、七色の糸を漉(す)き込んだ和紙。この家の最初の持ち主が馬主だったそうで、長押(なげし)には馬モチーフの釘隠しが。右下／現代美術作家の伊藤学美の写真作品を飾った床の間。その上部の壁には昔の消防ポンプが埋め込まれ、火除けの意味があるとか。大きな天井板をナグリ加工した竿縁が押さえる。左上／寄木の床や欄干の透かしなどに昔の大工の腕が冴え渡る。左下／立花英久の彫刻を置いた棚は、壁の裏の居間にあるテレビの配線やDVDデッキを格納している。

上／瓦敷きの玄関、下駄箱や上り框などは数寄屋大工〈三角屋〉が手がけた。奥に見えるのはアクリル板に和紙を重ねた堀木エリ子の作品で、裏からの透過光で模様が変化する。中／キッチン（左）とダイニングを特注の折れ戸で仕切ることも可能。天井に採光窓を設けて室内を明るく。下／元の天井を剥がし、杉板張りにしたリビングダイニング。長押や土壁は元のまま。小山の発案による信三郎帆布のシェードが下がる。

伝統建築を引き継ぎ、〝湯道〟を楽しむ家。

　京都市北部の閑静な住宅街、1930年に建てられた母屋と離れからなる庭付きの屋敷を持ち主が手放すことになった時、更地にしてマンションにするのではなく、木造建築と庭の良さを引き継いでくれる人を探していたという。その思いに応えたのが小山薫堂だった。

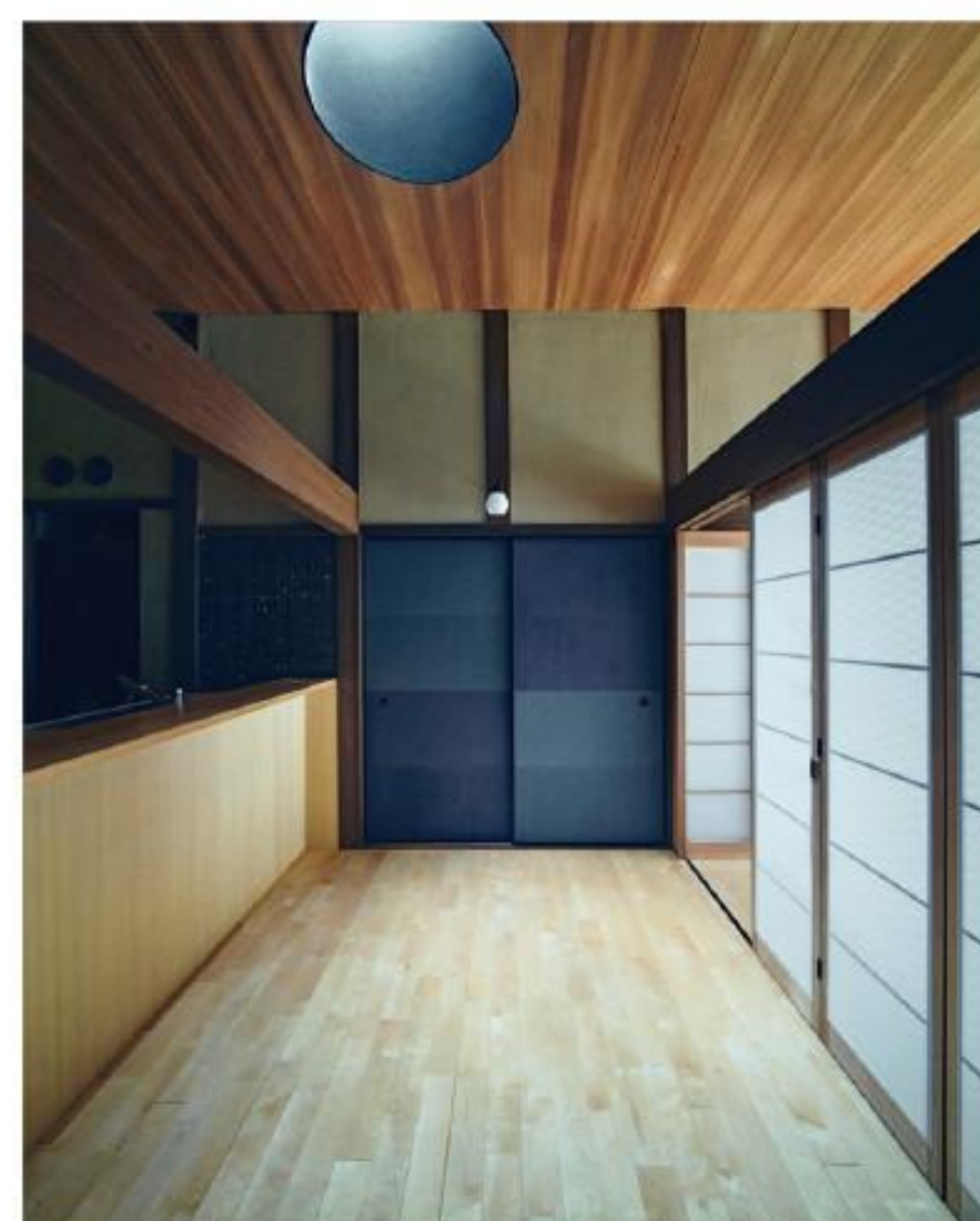
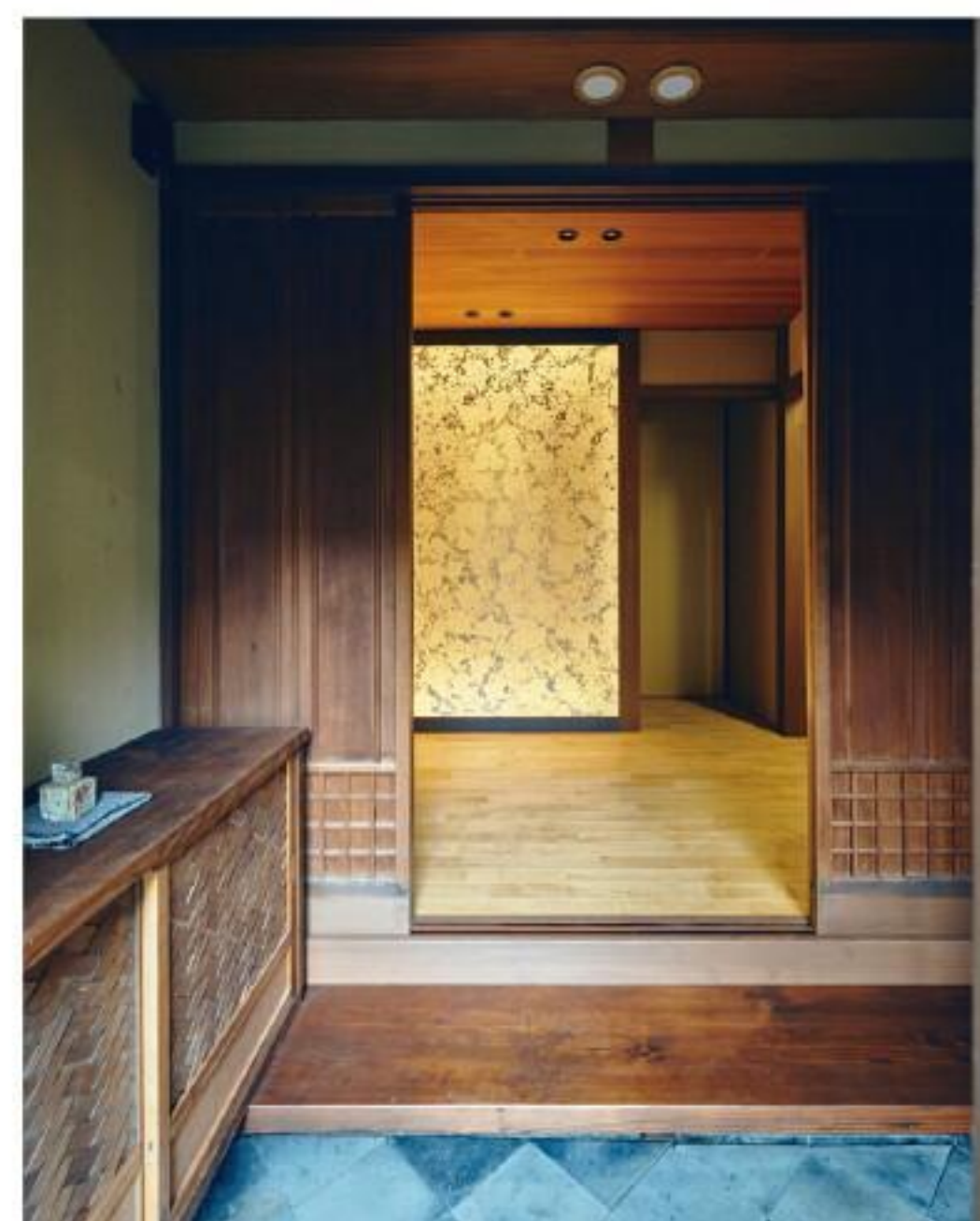
「以前、お宅にお邪魔したこともある建築家の魚谷繁礼さんにリノベーションをお願いしました。母屋の東側にある15畳の座敷は障子や襖をやり変える程度にして、構造や建具はほぼオリジナルのまま残し、その手前のスペースを全面的に改修してキッチンとリビングダイニングにしました。それと、庭を流れる小川を挟んで反対側に書庫があったのですが、かなり傷んでいました。ここをどうしようかなと考えたときに思いついたのが『湯室』です」

　小山は2015年から茶道ならぬ〝湯道〟を提唱し、普及につとめている。

「〝湯道〟は現代に生きる日本人が日常の習慣として疑わない〝入浴〟という行為を、感謝や幸せに気づく装置にしたいという思いで始めました。お風呂って、リラックスしたり清潔になるという効果があるのはもちろんですが、日本には昔から温泉文化が根づいているように、人と交流したり自分の感性を磨いたり、心を満たす場所としての価値があるというのが僕の考え。それをこの家で具現化しました」

　元書庫の建物をスケルトンにし、江戸期の敷瓦を敷いて奥に檜の浴槽を据え、コンクリート壁で仕切ったシャワー室も備えた。手前の空いたスペースにテーブルや椅子を持ち込み、飲食を楽しむのだとか。縦桟の引き戸を全開にするとすぐ目の前に川が流れ、開放感いっぱいだ。「湯室」での小さな宴会に続きゲストをもてなすメイン会場が、補修するにとどめた座敷だ。天井が高く、庭に対して２方向に開かれた畳敷きの広間を寄木張りの広縁が取り囲み、縁側欄干の一辺には透かし彫りがほどこされているという、立派な造りだ。

「昔の大工棟梁の仕事や釘隠しなどの意匠は極力残しながら、障子を和紙デザイナーの堀木エリ子さんに、襖紙を〈染司よしおか〉にお願いしたり、床の間に現代アートを置いたり。職人さんの仕事が好きですし、若手の芸術家を応援したいという気持ちもあります。僕の実家は元料亭だった建物で、それこそどっぷりと和風の環境で育ったために、反動で洋のスタイルに憧れる時期もありました。でも最近は、特に土壁の心地よさに惹かれるようになり、木や畳の魅力にあらためて気づき、和風建築に関心を寄せています。洋風な住宅の20畳のリビングってそれほど広さを感じないものですが、座敷で15畳もあると実に広々していますよ。家具をあまり置かないし、屏風などで仕切って空間をいかようにも変えられる自由度がある。障子を外せば縁側と繋がり大空間が生まれます。和風建築にはそういう融通無碍な魅力がありますね」

　全面改修したキッチンとリビングダイニングの天井は、隣接する座敷の雰囲気と自然に繋がるよう杉板張りにし、トップライトを設けることで、日本家屋の弱点である内空間の暗さに光を取り込んだ。こぢんまりとしたこの「ハレ」と「ケ」の間の空間を抜け、その奥の「ハレ」の場である座敷へと徐々に外に向かって開いていくシークエンスを心がけた、と設計者の魚谷は語る。和風建築の良さを引き継ぎながら現代的な機能も満たし、なおかつ友人を招いて〝湯道〟を楽しむ、画期的なゲストハウスなのだ。

MAIN HOUSE & TEAROOM

伝統建築の継承と、現代数寄屋の挑戦。

上／庭から見た母屋。約８mの開口部を持つ躯体に瓦屋根がかかった堂々たる構え。初夏には天然の蛍が舞うという庭の中を、敷地の外へそそぐ小川が流れる。川を挟んで右側に見えるのが「湯室」で、既存の建物の構造のみ残し、瓦を葺き替え、焼杉板張りの外壁にした。下／「湯室」の横に後から新築した茶室（右）を母屋の座敷から見る。数寄屋大工の〈三角屋〉が茶室設計と庭の整備を担い、古い石橋の橋脚を茶室の庇を支える柱の礎石代わりとするなど、細部にこだわりが。

STYLE2

篠山の家

改修設計:高橋真之、堤庸策

小菅庸喜／上林絵里奈（archipelago店主）

「日本の家は風土とともに育つ」と話す夫妻が
兵庫・丹波篠山に建つ築80年ほどの木造民家をリノベーション。
この土地のおおらかな景色に寄り添うように暮らしている。

photo_Futoshi Osako text_Masae Wako
editor_Tami Okano

こすげのぶゆき／かんばやしえりな 埼玉県出身の小菅さんと大阪府出身の上林さん。2人の子ども、保護猫のモンクと暮らす。2015年に丹波篠山市へ移住、2016年には作家ものの器や洋服を扱う〈アーキペラゴ〉オープン。今春から店舗隣接地に〈素滋食堂〉も開店。

1940年代後半に建てられた農家の住居と思しき木造家屋を改修。軒下の黒漆喰壁や瓦屋根、縁側のある和室は昔のまま。元々隣についていた洋館風の応接室は窓を替えて子ども室に。

CONTRAST

新旧の空間を明快に分けるリノベーション。

玄関を入ってすぐ、通り土間から裏庭までまっすぐに抜けるこの光景が、〈篠山の家〉のハイライト。左手、小上がりの和室や柱梁は元のまま。奥は改修したダイニング。〝新旧〟を融合させるのではなく、明快に分けてコントラストをつけることで自分たちらしい心地よさを生んだ。右手、穏やかな白の漆喰壁は、地域の土を混ぜた灰中（はいなか）塗り。アールをつけたのは、「人を穏やかに迎え入れる形、かつ光が柔らかく回る印象にしたかったから」と小菅さん。ここ以外は日本家屋らしい直線を残している。

築80年の躯体を生かした和室や屋根裏書斎。

延床面積約120㎡のうち半分はほとんど手を入れず、元の躯体や床・壁を生かしている。右上／小上がり奥の和室の床の間。装飾格子が美しい建具も銘木の床柱も昔のまま。右下／土間から小上がりを見る。レベル差は約50㎝。愛猫モンクが歩いている手前が３畳、奥が６畳。この左手に縁側も。左上／２階、力強い梁や下塗りのままの荒壁に囲まれた屋根裏をライブラリーに。左下／１階、天井を支える小屋梁と軒桁（のきげた）に使われたのは立派な丸太。それが外部に現れて印象的な意匠にもなっている。

上／土間とダイニングの間に造作した鉄枠の引き戸。断熱用にペアガラスを嵌め、既存の建具とピッチを揃えた格子のデザインにした。中／リビングから１段高い小上がりを見る。下／ダイニングから見たリビング。床は３種類の幅のナラ材を乱尺張り。ランダムに走る縦線が視線を外へと誘う。ガラス２枚分に絞った開口の外は観月台にもなる木製デッキ。

風土に寄り添い、古い家の記憶を受け継ぐ。

「その地域の風土や人々の暮らし方、あるいは土地に宿る記憶みたいなものが、家の形や佇まいにも緩やかに反映されている。それが日本的ということなのだと思います」

〝和の家〞の魅力を尋ねたところ、セレクトショップ〈アーキペラゴ〉の小菅庸喜さんからは、こんな答えが返ってきた。兵庫県の丹波篠山市に暮らして今春で７年。妻の上林絵里奈さんとともに始めた店ももうすぐ丸６年になる。

落葉広葉樹の雑木林のそばにささやかな家を持ち、つつましく静かに暮らしたい。二人がそう考えたのは12年前。日本各地を探し歩いて見つけたのは、自然の中に建つ日本家屋だ。1940年代後半に建てられたと思われる、瓦屋根の木造２階建て。横には小さな洋館も付いていた。

「家の中はたくさんの建具で細かく仕切られていたのですが、建具を開けて開けてまた開けて……と進んでいったら、南側の通り土間から北にある隣家の裏庭まで、気持ちいいくらいまっすぐに視界が抜けた。ふと西側を見ると窓の外には多紀連山と田んぼが広がっている。一瞬で心を持っていかれました」と小菅さん。

東西南北を貫くこの十字の抜けを軸にリノベーションすれば、それだけで十分贅沢な家になる。二人ともすぐにそう確信した。「農家の住居にしては小さめだけれど、自分たちの生活スケールにはちょうどいい」と感じた１階の床面積は約120㎡。その半分にあたる和室や縁側にはほとんど手を入れず、もう半分を白漆喰の壁やフローリングの空間にアップデート。リビングやキッチン、ダイニングなど、日常の生活スペースとした。手がけたのは旧知のインテリアデザイナー高橋真之と建築家の堤庸策だ。

「古い梁や土壁を残した元のままの空間と、モダンに改修した空間。両者を融合させるのではなく、新旧の空間をくっきり分けました。そのほうが気持ちいいし住みやすいから。一方、細部のデザインでは新旧の融合や継承を図っています。通り土間とダイニングの間に作った鉄枠の引き戸には、既存建具と同じ格子の意匠を採用。建具同士、格子のピッチも揃えました」

と高橋。そんな新旧の建具があちらこちらに配されているのも、この家の特徴だ。元々建具の多い造りだったこともあり、開け閉めの塩梅によって、見える景色が変わってくる。床のレベルもまちまちで、土間、ダイニング、リビング、小上がりと１段ずつ高くなるのが面白い。

「改修前の家に寝袋持参で泊まり込み、夜の暗さや明け方の光、日本家屋特有の陰影を観察した」と話す高橋は、時間の推移や居場所の変化によって、空間の表情がどう変わるのかという〝この家のポテンシャル〞を、とことんすくい取ろうと試みた。背景にあったのは、小菅さんと上林さんが持つ、「この土地、この家だから、このデザイン」という感覚だ。

例えばダイニングに座ると、リビングの窓の向こうにのどかな里山が見える。窓は壁一面の大きな開口ではなく、ガラス２幅分に絞り込んだもの。広々した景色をあえて切り取るようなスケール感が心地いい、と小菅さんは言う。

「実は元の窓も、下半分が摺りガラス、つまり景色を絞り込むものでした。想像ですけど、往時の住み手か大工さんが、〝ここから眺めるなら、山だけを切り取るのがいい〞と思ったんじゃないかな。僕らが望んだのも〝この場所だから〞を積み重ねるリノベーション。土地の風土や、かつて誰かが家に注いだ愛着を、僕たちなりに解釈しながら受け継ぎたいんです」

日常生活の場は左官塗りの白壁でモダンにアップデート。

上／建物の北側、通り土間の奥が、重点的にリノベーションをした生活スペース。右がシェーカーテーブルと〈スターネット〉オリジナルの照明を合わせたダイニングキッチン。１段上がった空間がリビング。壁は白漆喰、床は濃淡２種のフローリングを張り分けた。壁には京都・黒谷の和紙職人ハタノワタルが光をテーマに制作した作品。下／小上がりの和室から見る。土間の右奥、沓脱石（くつぬぎいし）のある黒い舞良戸（まいらど）の向こうが洋館。現在は子ども室になっている。正面が角にアールをつけた漆喰壁。

STYLE3

YUWAKU CASE STUDY HOUSE

設計:(JELL-architects)／北出健展(JELL-architects)

久保下 陽 (TANAKA クリエイティブディレクター)

築100年の北陸のアズマダチの古民家に
モダンデザインの名作の数々が並ぶ。
目指したのは、伝統とモダンの融合でした。

photo_Masaki Ogawa
text_Hisashi Ikai

くぼしたあきら 1982年生まれ。ユニクロに入社後、上海、ニューヨークに赴任し、デザインディレクションを務める。2020年独立。現在は、ニューヨークのブランド〈TANAKA〉のクリエイティブディレクションほか、国内外でさまざまな企画を担当している。

土間を通って、最初に現れる「チャノマ」。元はフローリングと畳の２つの部屋に分かれていたが、壁を抜いて１つに。奥に見えるベンガラ塗りの建具や柱を印象的に見せている。

ありのままの姿を生かしつつ、より開放的に。

建具を外し、空間のレイアウトを変えられるのも日本家屋の特長。板戸を外した大空間に並ぶのは、イサム・ノグチの照明〈Akari〉ペンダントロング《JP》、剣持勇のラタン製のソファ＆スツール、そして長大作が坂倉準三建築研究所時代にデザインした《トライアングルテーブル》など。フロアは、畳床を剥(は)がした際に現れた、幅広の板張り床の素朴な表情をそのまま生かしている。西側は開口からの採光を十分に確保しつつも、隣地からの視界を意識して、全面を障子に。

隅々にちりばめた、イサム・ノグチの精神。

「インテリアデザインに興味を持つきっかけになったイサム・ノグチで、この家を満たしたい」。そんな思いから、照明〈Akari〉を各居室に配置。右上／鶯(うぐいす)色の土壁が美しい２階客間には、スタンド《25N》とペンダント《45A》をセットで。右下／表情豊かなスタンド《UF3-Q》が出迎える１階の縁側。左上／迫力のある衝立の横に鎮座するのは、初めて購入したスタンド《BB3-33S》。左下／１階座敷では、北欧のヴィンテージ家具に直径１mを超える大型ペンダント《125F》を合わせた。

上／1950年代のノルのヴィンテージを中心にアメリカンデザインで揃えた「US ROOM」。ブルーグレーの壁の上部は土壁をあらわしで見せた。中／屋根裏を生かした2階リビングにはフロスの照明《ロメオムーン》とソファ《マレンコ》で印象的な空間に。下／書院の障子や欄間の組子を丁寧に修復。仏間は現代的な唐紙で扉をつけて、収納スペースに転用。

北陸の伝統様式に設えられたモダニズムの家具。

金沢の中心地から南東に車でおよそ30分。山間の道を少し入った先にある湯涌温泉は、素朴な街並みながら開湯1,300年という歴史を誇る北陸の名泉だ。この地に100年以上経つ古民家を、ファッションブランド〈TANAKA〉のクリエイティブディレクターを務める久保下陽が購入したのは2017年のこと。

「ずっとアパレルの仕事に従事するなかで、そろそろ衣食住全般に意識を及ぼしたい。そんな矢先に出会ったのがこのタフな古民家でした」

切妻屋根の正面に格子状に束(つか)と貫(ぬき)を見せるアズマダチや、ベンガラの拭き漆で仕上げた柱や天井など、地域特有の様式が生きる見事な建屋ながら、住み手がなく長年放置されていたこの家。初めて見た時、今では絶対に建てられない伝統様式の家を守れるのは自分しかいないと直感し、購入を即決した。

建屋こそ美しいものの、過去の度重なる改修により内部は細かく仕切られており、内部に光があまり届かない薄暗い空間。そのまま暮らすにはあまりにも使い勝手が悪く、居心地もよくない。そこで、金沢で町家再生などを多数手がける建築家の北出健展(きたでたけのぶ)に相談。大々的なリノベーション計画がスタートした。

「最初に思い描いたのは、日本の伝統とモダニズムを融合しながら谷口吉郎が設計した〈ホテルホークラ〉でした。北出さんからのアドバイスを受け、間取りからではなく空間のコンセプトから考えていくことにしました」

彼らが取り組んだのは、民家をオリジナルの状態に戻しつつ、現代的に過ごせる快適な仕様に適宜変更すること。風格のある柱や梁が生きるように、天井板や内壁を撤去。土間や茶の間の大空間を実現した一方で、その先には、畳張り＋床の間の座敷と薪ストーブのあるラウンジという対照的な2つの居室を設けた。一方、屋根裏のスペースは、立派な梁を間近に感じつつ、高台からの眺望が楽しめるリラックスしたリビングへと改変。外壁の一部をガラスに変えて室内の明るさを保つとともに、アズマダチの格子を印象的に見せている。

「この家を眺めていると、昔は本当に良い素材を使っていたことがわかります。ヴィンテージの洋服同様に、古くとも視点を変えれば新しい価値が見えてくる。そう考え始めると、この家の魅力の原点を探り、見つけることがどんどん楽しくなっていきました」

減築であらわになった柱や床を磨き直しては効果的に適用。壊した土壁も一度土の状態に戻しては、その土で施主が自ら新しい壁の左官に挑戦するなど、家から出た廃材を無駄にせず、可能な限り再利用を試みた。

圧巻なのは、生まれ変わった和の空間にレイアウトされた、数々のモダン家具の名品だ。

「学生時代にイサム・ノグチのツノ型のスタンドランプ《BB3-33S》を購入したことをきっかけに、その後徐々に買い足し。日本では人形町にあるオゼキのショールームを訪れていますが、仕事でアメリカに行くと、ヴィンテージショップを巡って自分で買い付けすることもあります」

改装で生まれた特徴的な居室を生かし、日本、アメリカ、ヨーロッパと地域ごとに家具を配置。まるでデザインミュージアムの展示室のような空間を実現している。

「日本建築特有の建具で緩く空間を間仕切ることで、伝統や様式美にこだわりすぎず、和洋の別を超えた自由で、現代的なしつらえになる。それが僕なりの今の暮らし方だと思います」

AZUMADACHI

アズマダチのなかに溶け込む現代性。

上／北陸に多く見られる「アズマダチ」は、雪深い風土に対応する堅牢性の高い屋根と格子状の妻壁が印象的な建築様式。その風格を損なうことなく、正面の外壁をタイル張りにして現代性を付加した。下／玄関は、既存の床を剥がしてモルタル仕上げの土間に。アキッレ・カスティリオーニの円柱型照明《スチロス》を等間隔に配置し、空間を華やかに演出した。以前牛を飼っていたという奥のうまや跡を、古い暖簾や屋根裏から出てきた臼などを飾るディスプレイスペースとして使っている。

JAPANESE MODERN HOUSE

建築家が手がけた和風モダン住宅。

自然との調和こそ和のデザインと捉えた現代版数寄屋や、職人技を駆使して再生した築100年の町家など、建築家が手がけた、和風モダンな5軒の住宅を紹介します。

JAPANESE MODERN HOUSE

磐座の家

AREA　京都府京都市

ARCHITECT1

中村拓志

庭という宇宙を愛でながら、自然とともに生きる現代数寄屋。

村野藤吾の〈佳水園〉の改修とともに、
設計が進められた中村拓志の数寄屋住宅。
着目したのは庭とのつながりでした。

photo_Futoshi Osako　text_Yoshinao Yamada
editor_Tami Okano

自然を愛でるリビングダイニング。

玄関ホールを抜けると、リビングとダイニングに鎮座する根付き磨き丸太の大黒柱が目に飛び込み、その先に見事な庭が広がる。柱はもちろん、桁や垂木にも杉の丸太材を使う。

なかむらひろし　1974年生まれ。99年明治大学大学院で建築学修士を修了後、隈研吾建築都市設計事務所を経て2002年NAP建築設計事務所設立。自然現象や人々のふるまい、心の動きに寄り添う「建築・自然・身体」の有機的関係の構築を信条としている。

片流れ天井の広がりある空間。

ダイニングは片流れの勾配天井で広がりある空間に。天井高の最頂部は3.8m。野地板は赤杉を使用。テーブルはタモ材。椅子は中村がデザインした《タケノコチェア》。

素材の肌触りで自然を体感する。

網代天井と洗い出しの床仕上げによる玄関。ドアハンドルはもともと手すりでの使用を考えていた皮付きの部材を転用したもの。住まいの随所で、素材の肌触りを体感できる。

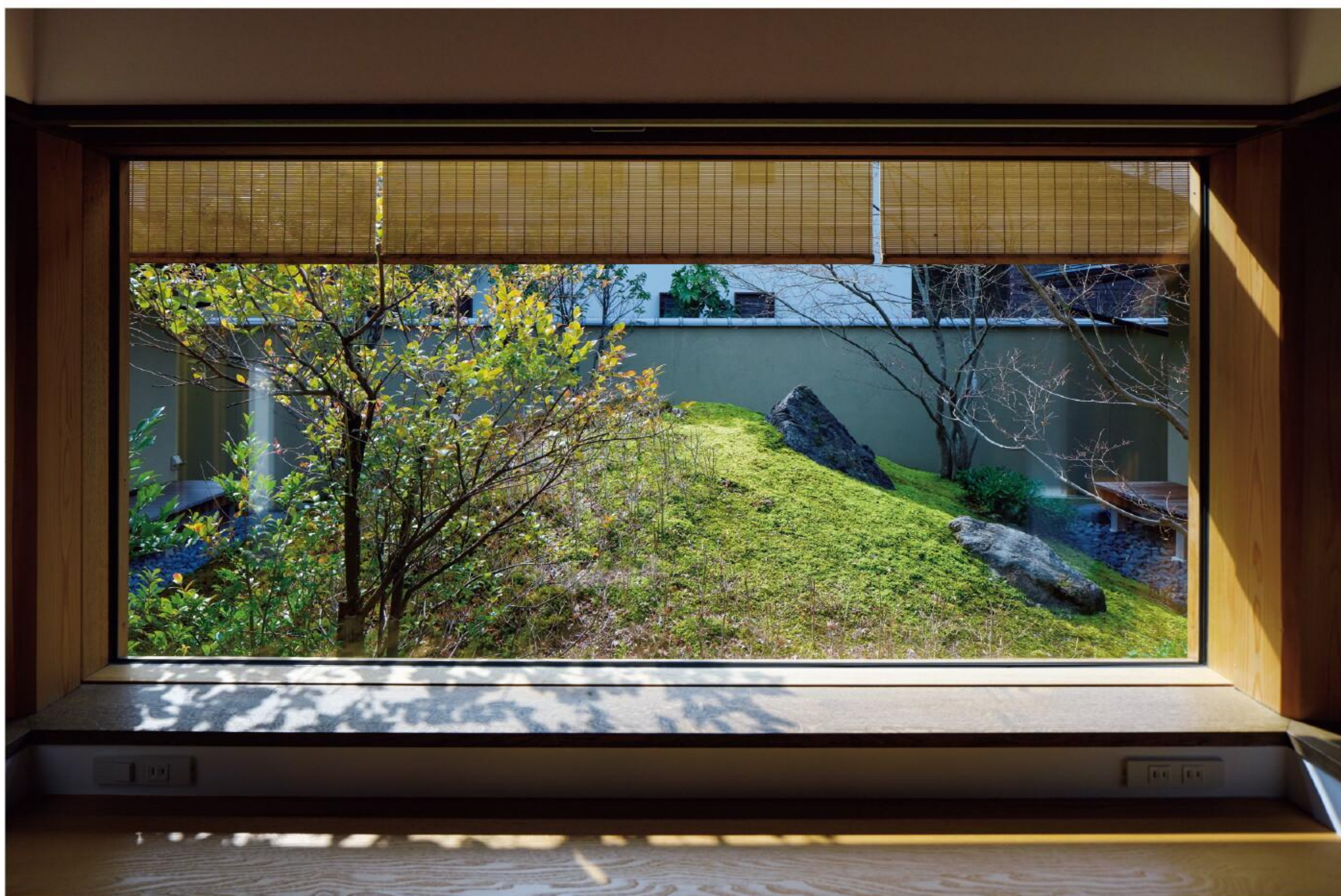
客間にもなるオーソドックスな和室。

リビングダイニングから続く階段でアプローチする2階客間。床の間の脇にオリジナルの照明を設置した書院を設けた。床柱は赤杉、床框にもやはり北山杉の丸太材を使う。

赤杉の縦格子で京町家の趣を。

民家が密集する地域のため、中庭で各居室の眺望や採光を得る構成を採用した。ファサードには華奢な赤杉で縦格子のルーバーを構成し、プライバシーと採光を確保している。

細かな部材にも目を向ける。

ダイニングよりリビングを見る。ソファはオリジナルの造作家具。壁はひだしスサ入りの京錆土を使用した切り返しの左官壁。床は鉄媒染加工でエイジングしたオーク材を使う。

中庭を介して、リビングダイニングとプライベートな寝室や書斎の棟がコの字形につながる。両者をつなぐ廊下は書庫を兼ねて壁面の片側が本棚となっており、庭に面して机を備え、書斎としても活用される。ダイニングから望む庭とはまた別の角度から、季節とともに移ろう築山の姿を楽しめる。

先人の自然観に学び、再解釈を試みた洛北の家。

京都洛北。中心部の喧噪とは異なり古都の日常が感じられるエリアに、建築家の中村拓志が手がけた住宅がある。中村はこの住宅の計画と同時期に、村野藤吾の傑作と名高い数寄屋建築〈佳水園〉の改修を進めた。両者を実現するうえで注力したのは、建築と庭の関係だ。

中村は〈磐座(いわくら)の家〉で、日本庭園における自然崇拝や山岳信仰のかたちに注目した。見立てによって自然の風景を再現する日本庭園では、道教や仏教を背景に理想郷となる山を石組みで表現する。道教において不老不死の仙人が住むとされる蓬莱山、仏教において世界の中心とされる須弥山がそれに当たるが、中村はここで洛北に近い比叡山の姿を再現した。古くから山岳信仰の対象として、祀られてきた存在である。

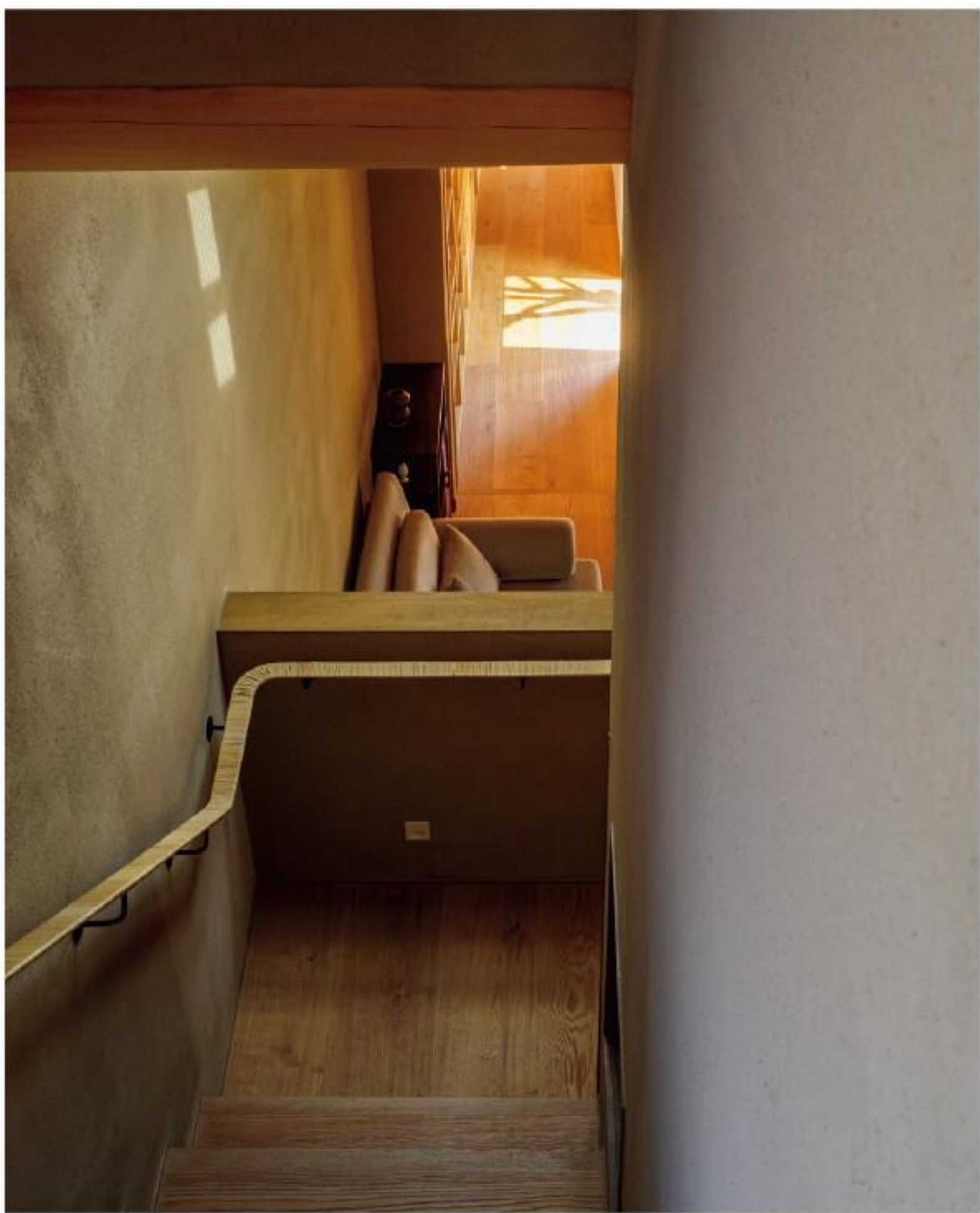
玄関を抜けた先に広がるリビングダイニングに面して窓を設け、その先に庭が広がる。基礎工事の掘削土を用いて築山を設け、中心に磐座となる巨石を置いた。この巨石が比叡山を模す。岩肌を山肌に、イロハモミジの枝葉を雲に、葉の小さなドウダンツツジやスギ苔を林に見立てた縮景を、中村は「自身を小さな存在と捉え、浮遊する感覚で眺めてほしい」と言う。

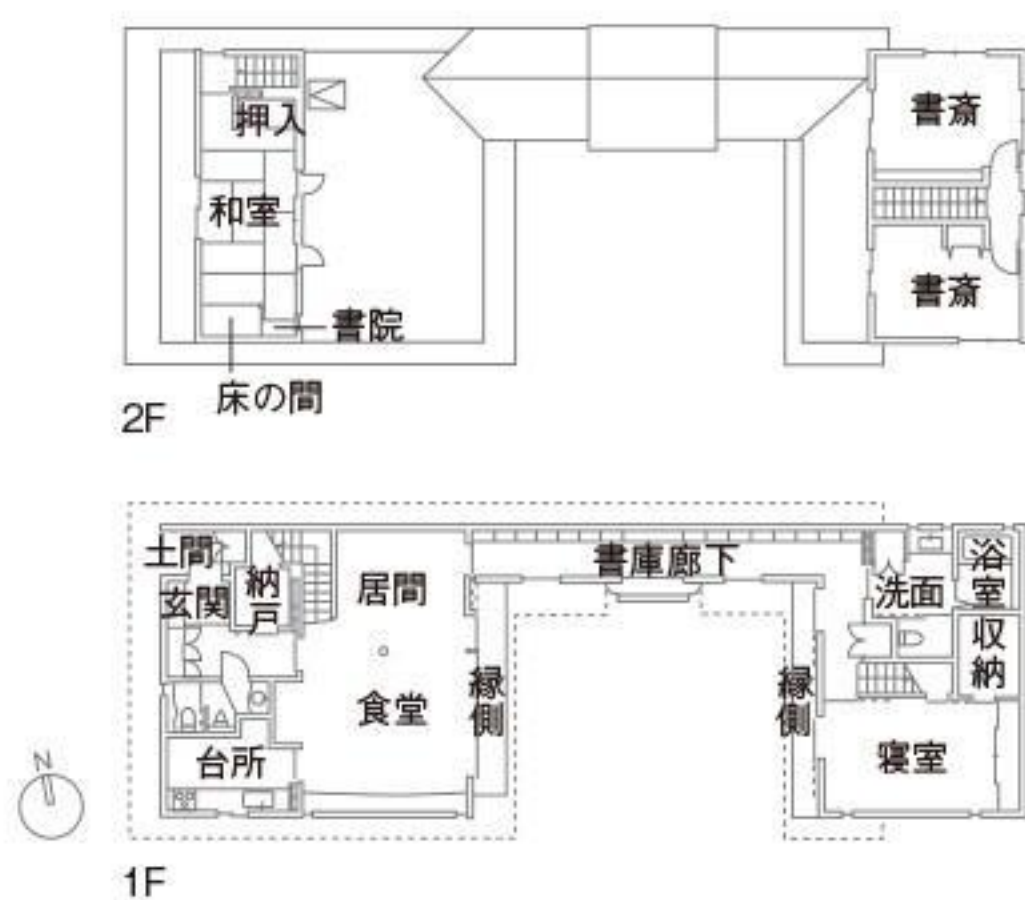
「軒を低く抑えることで、自ずと窓からの視線も低く抑えられます。庭は伏し目がち、つまり見下ろすように作るのがよいと言われています。日本における庭の歴史は、祈りの場として始まりました。人は死後の安住の地を求め、それを庭に現してきたのです。山は魂が赴く場として考えられ、ここはその世界を再現しています」

中村の想いは庭に限らない。リビングダイニングに鎮座する大黒柱に使うのは、北山杉の磨き丸太だ。室町時代から作り始められた北山杉は、何十年もかけて育てた木の表情を活かしながら、樹皮を剝(む)き、磨いて完成させる伝統的な材だ。〈磐座の家〉では足元の根まで残し、自然の造形をそのまま取り込んだ。中村は近年、さまざまな物件で枝や根など、自然の造形を活かした木材を積極的に使う。そこにあるのは自然、そして自身の作為を超えた存在への尊敬だ。

一方、日本の様式美や人々の行動心理にも目を向ける。大黒柱はリビングダイニングの中心ではなく、芯をわずかに左にずらして立てた。西洋的なシンメトリーではなく、左右非対称の配置を心がけたのは、右手に鎮座する磐座に視線が集まるようにとの配慮だ。部屋に入った時の人の視線は左から右に移動するという習性を巧みに活かした設計である。

「古くから伝わる和の技法としての、心の安定を導くデザインに手がかりを得ました。新しいものを見つけようと気負うのではなく、庭園や日本建築の核を掘り起こす。先人の自然観に学びながら、どのように再解釈するか。僕はそこに向き合ってきました。僕の建築は、場所性をかたちにするものと言えるでしょう。自然との調和というと哲学的な印象を受けますが、それはまさにいま向き合うべき感性だと思うのです」

和とはなにか。中村はそこに自然への想いを見出す。だからこそこの家は、どこか祈りの気持ちにも通ずる荘厳さを醸し出している。

House of the Sacred Rock

●所在地／京都府京都市●家族構成／夫婦●構造／木造●規模／地上２階●設計期間／2017年９月～2018年10月●施工期間／2018年11月～2019年10月●敷地面積／303㎡●建築面積／121㎡●延床面積／175㎡

手仕事を感じる素材を取り込む。

１階リビングの壁面に設えられた収納棚。引き違い戸に籐張りのシートを使うなど、細部に手業を感じる部材を使用する。居室の壁はいずれも左官仕上げになっている。

採光を確保する天窓の存在。

リビングから２階和室へ続く階段。スチール製の手すりにはラタンを巻き付けている。階段上部の勾配天井に天窓を設けており、リビングには上部からの採光も確保している。

2つの窓から2つの比叡山を愛でる。

２階和室は高窓から比叡山、地窓から比叡山を模した庭と、異なる視点から２つの比叡山を楽しめるようにした。障子には、手すきの障子紙を用いた石垣張りを採用している。

土地の歴史を随所に表現する。

同じく２階和室の襖には、「月」の漢字を引用した引き手と京唐紙を用いる。襖で描くのは、かつてこの地に広がっていたすすき野からぽっかりと月が出た風景だという。

ARCHITECT2

森田一弥

和の素材と技術をちりばめた築100年の町家の改修。

清水焼の産地として知られる京都・泉涌寺道。朽ちかけていた町家を、元左官職人でもある建築家が住居兼ギャラリーへと再生しました。

photo_Futoshi Osako　text_Katsura Hiratsuka
editor_Tami Okano

天井と床を抜き、広がりを生み出す。

建物は表通りに面した母屋と、路地でつながる離れの２棟に分かれ、母屋はギャラリーも兼ねる。土間は淡路産の平瓦敷き。天井と床を抜くことで空間に広がりを生み出した。

もりたかずや　1971年生まれ。京都大学で建築を学び、左官職人として京都の文化財修復に５年間従事したあと、設計事務所を設立。スペインでの留学経験などを経て、現在は京都市北部の集落、静原の古民家を拠点に活動。京都府立大学でも教鞭をとる。

JAPANESE MODERN HOUSE

泉涌寺道の町家

AREA 京都府京都市

柱、壁、取っ手など、随所に光る職人技術。

大工技術が冴える柱の根継ぎなど、各所に職人技を導入。土壁は竹小舞下地荒壁仕上げで、竹の編み目が表面に波打つ。正面扉には杉皮を張り、陶器の取っ手を取り付けている。

手前が母屋（ギャラリー棟）で、奥に離れ（宿泊棟）がある。中の様子が透けて見えるよう、繊細な格子が設けられている。周辺は伝統的な陶工の街で、街並みに合わせて改修後も屋根は瓦を選択。瓦は熱伝導率が低く音も拾いにくいため、天井を外したことによる熱や雨音の響きやすさもカバーしている。

長く使っていくことでにじみ出る、和の魅力。

京都の古刹・泉涌寺。界隈はかつて清水焼の産地として登り窯が並び、現在も陶芸を生業とする人々が暮らしている。

ここは泉涌寺の参道に面した町家２棟を改修した、住居兼ギャラリーだ。縦横に通した路地庭を挟んで、母屋と離れ、２つの棟が並ぶ。施主は台湾を拠点にする建築家、李静敏氏で、日本滞在時の別荘として計画された。日本文化に造詣が深く、古い物を愛し、ギャラリーを兼ねた母屋には、海外からの来客も多いという。

改修にあたり、森田一弥とスタッフとして共同設計した吉川青が意識したのは「建物そのものから、日本の技術や素材を感じさせる」ことだ。森田は左官職人の経験を持ち、素材の性質を生かした空間づくりを得意とする。ここでは〝陶工の街〞という地域の営みが感じられるよう、土間の敷瓦をはじめ随所に焼き物をちりばめた。台所内壁のタイルや扉の取っ手、洗面鉢などは敷地近くに工房を構える吉川の父と姉の作陶で、手作業の成形や施釉ならではの繊細なゆらぎが美しい。

今でこそ美しく蘇った町家だが、改修前は、すぐにでも朽ち果てそうだった。母屋は大きく傾き、離れは屋根が落ちかけていた。そこで母屋では構造補強と傾きの修正のために「根継ぎ」を行った。根継ぎとは、柱の腐った部分を取り除き、新しい材料で継ぎ足すこと。「大工さんが〝腕の見せどころ〞と力を注いでくれた（吉川）」部分で、新しい材料はあえて塗装せず、新旧の違いを際立たせた。木架構の柔軟さが生かされた改修だ。

また、母屋の壁は「竹小舞下地荒壁仕上げ」とした。「荒壁ー中塗りー（漆喰などの）仕上げ」と層に分けて仕上げていく土壁を、あえて下塗り段階でとどめた手法だ。光が当たると、竹小舞特有の細い竹の編み目の凹凸がわずかに表面に現れ、繊細な表情を見せる。技術を要するこの左官工事は、森田とたびたび協働してきた久住有生左官が手がけた。

キッチンの横に、三畳の茶室がある。ここは、茶藝に親しむオーナーの要望で生まれたスペースだ。キッチンを水屋代わりに使え、建具を外せば小上がりにもできる。日本の茶道と台湾の茶藝。茶という共通項はあるものの、地域や文化風習が異なるので、森田と吉川は形式ばらず、カジュアルに使える茶室を提案した。壁には和紙職人のハタノワタルの和紙を選んだ。

家具やギャラリーの照明は、オーナーが選定している。北欧の名作家具、日本の古道具など、さまざまな国や時代のものが混ざり合いながら調和している。

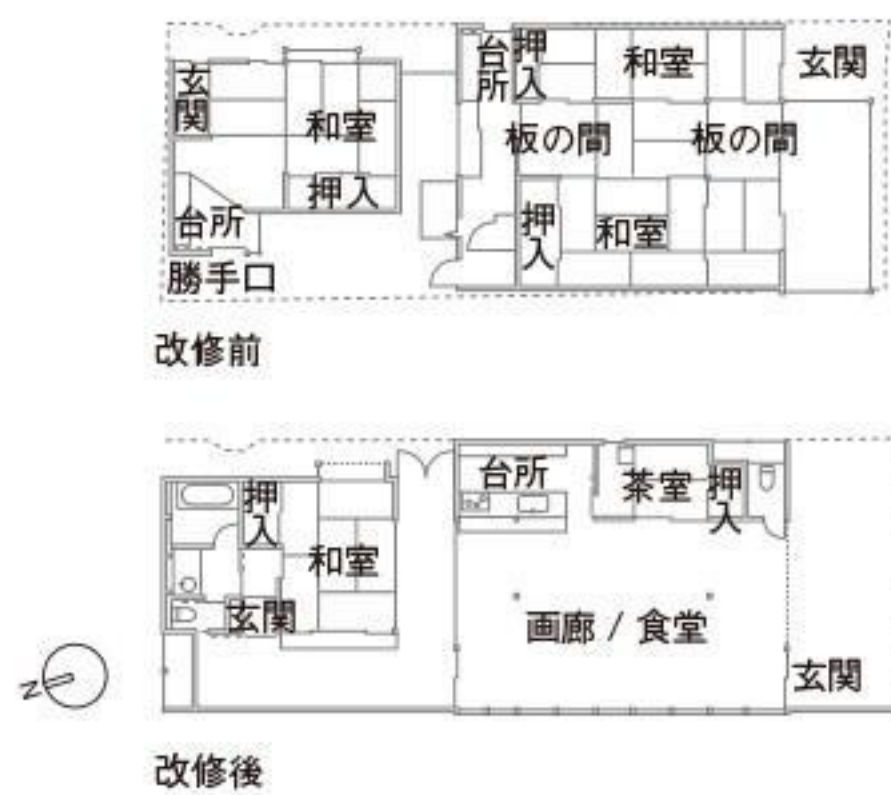
この家にあるものの共通項は、経年変化する素材の魅力だろう。時を経て、より空間になじんでいくものばかりが用いられている。

「焼き物も、土壁も、和紙も土から生まれたもので、時間が経つほど美しくなる。形式としての和ではなく、長く使っていくことでにじみ出る和の魅力を伝えたい」と森田。素材への深い理解に基づく設計で、土着の材料が融通無碍に統合されている。

House in Sennyuji-michi

●所在地／京都府京都市●主要用途／別荘＋ギャラリー●構造／木造●規模／地上１階●設計期間／2017年10月〜2018年４月●施工期間／2018年５月〜2019年２月●敷地面積／148.62㎡●建築面積／84.13㎡●延床面積／84.13㎡

改修前

改修後

素材を体感できる、落ち着いた離れ。

床面積６坪程度の小ぶりな町家を改修した離れは、玄関と六畳の和室、水まわりがコンパクトにおさまる。玄関の床を凹凸のある名栗仕上げとするなど、素材の魅力を体感できる。

空間にニュアンスを生む、陶板タイル。

正面の壁は特注の陶板タイル。工芸品ならではの味わいがある。キッチンはビルトインのオーブンなどを備えた対面式。機能的で使いやすい。天井は杉板。経年変化が楽しみだ。

街並みを引き込むような路地庭。

２棟間の路地をふさいでいた浴室を撤去し、路地が連なる周辺環境を引き込むように路地庭を設けた。切り石と自然石を組み合わせ、視線が抜けるよう背の低い植栽を配している。

形式にこだわらない、和紙張りの茶室。

母屋の食堂に面した、三畳間の茶室。写真左手の扉の向こうが台所で、水屋のように使える。壁と天井の和紙は和紙職人ハタノワタル作。光が柔らかく拡散する親密な空間。

ARCHITECT3

奥野 崇

祖父の建てた古民家を、家族で楽しむ現代の住まいへ。

祖父が建てた農家住宅を現代的にリノベーションし、家族が日々を心地よく過ごす家にアップデート。奥座敷が、日常を楽しむ場に生まれ変わりました。

photo_Kenichi Suzuki　text_Yoshinao Yamada
editor_Akio Mitomi

座敷と縁側を一体化したリビングへ。

奥座敷と縁側を一体化し琉球畳を敷いたリビングは、子どもたちが遊べる場を願ったもの。デイベッドの設置が決まっていたため、そこはフローリングに切り替えている。

おくのたかし　1982年生まれ。数寄屋建築の美しさにふれたことをきっかけに、茶道を習い始める。2012年に奥野崇建築設計事務所を設立。代表作は〈五つ庭の平屋の家〉〈土間サロンのある家〉〈真言宗光林寺 位牌堂〉など。茶室空間も複数の設計実績がある。

JAPANESE MODERN HOUSE

城南の家

AREA 愛媛県松山市

土間は広々とした玄関の三和土に。雨の日は子どもの遊び場となり、多機能に使える。玄関戸真正面には上がり框を備えた玄関ホールがあるが、もっぱら日常使いされるのは右横にあるダイニングルームへのアプローチ。土間から東側に広がる納屋などは新規の断熱工事を省略し、土壁の耐震力のみを向上させた。

保存ではなく、家族が楽しむ家として再生する。

日本の気候風土や生活様式のなかで、室町時代に「書院造」、安土桃山時代に茶室をもとにした「数寄屋造」が住まいのかたちとして発展していく。さらに現代日本における住宅を考えるうえで欠かせないもうひとつの存在が、江戸時代に発展した「町家・民家」だ。いわゆる庶民が暮らす住まいで、現在も伝統的様式や技法を用いた住宅はこれに含まれる。松山市郊外に建つ農家住宅を改装した〈城南の家〉は、いまのライフスタイルを見据えてアップデートされた新しい民家だ。

農作業用の納屋や土間を備えた広い住まいに暮らすのは、若い夫婦と子ども2人。もともと妻の祖父が1953年に建てたもので、妻の母が生まれ育った家を遺したいと強く望んだことから改修が決まった。改修を担当した建築家、奥野崇は「農家住宅は働くための家です。ですから保存よりも、ここで新たに暮らす家族がいかに楽しく使えるかを重視しました」と語る。

改修にあたり、まず目を向けたのは耐震や断熱などの性能改善だ。建物の基礎を見直し、床や柱の歪みとともに修繕。建築面積が大きいため、断熱性能を向上させるエリアは居住空間に限定した。玄関の役割を果たす土間、納屋や物置は断熱を追加せず、耐震性能に欠ける土壁の耐力補強工事を行った。これにより解体作業を軽減し、ゴミの少量化、工期短縮も図った。

間取りは大きく変化しているが、階段の架け替えを除いて既存の構造をほぼそのまま活かした。間取りにおける最大の変化は、多くの時間を過ごすリビングとダイニングを南に置いたこと。民家において床の間を置く奥座敷は、ハレ、つまり非日常的な祭り行事や冠婚葬祭の儀式などに使われ、家の最もいい部分に配置されていた。一方、妻の祖父も含め人々の生活の中心となる居室は北側に据えられた。しかし現代においては心地よい空間こそ、日常的に使う場としたい。奥座敷は日当たりのよいリビングとなり、庭や畑とつながる。

夫妻の強い希望で、かつての縁側部分まで畳を敷き込んだ。「新たな空間はあえて和を意識させないものとしました」と奥野は語る。オープンキッチンとフローリングのダイニングルームは現代的な空間で、空間を仕切る建具は透明性の高い素材で構成した。しかし妻が「柱の木目などで、ふと子ども時代の記憶が蘇ることも」と言うように、柱や梁、そして祖父の時代から残る仏間がふいに往時を思わせる。

隣接する妻の実家が子育てを手伝ってくれ、庭は植木職人である夫の祖父がメンテナンスに訪れる。「大きな家ですから、家族の協力があってこそ維持ができている」と夫妻は言う。犬走に置かれた縁台は、かつて農作業時の休憩に使われたものだ。犬走に面した食堂の窓際には、ベンチにも子どもの勉強机にもなる板が渡される。いまここに家族や親戚が集い、子どもたちが遊ぶ。ライフスタイルが大きく変わり、住まいのあり方も大きく変わった。しかし人が集って団らんを楽しむ風景は、何一つ変わることなく続いている。

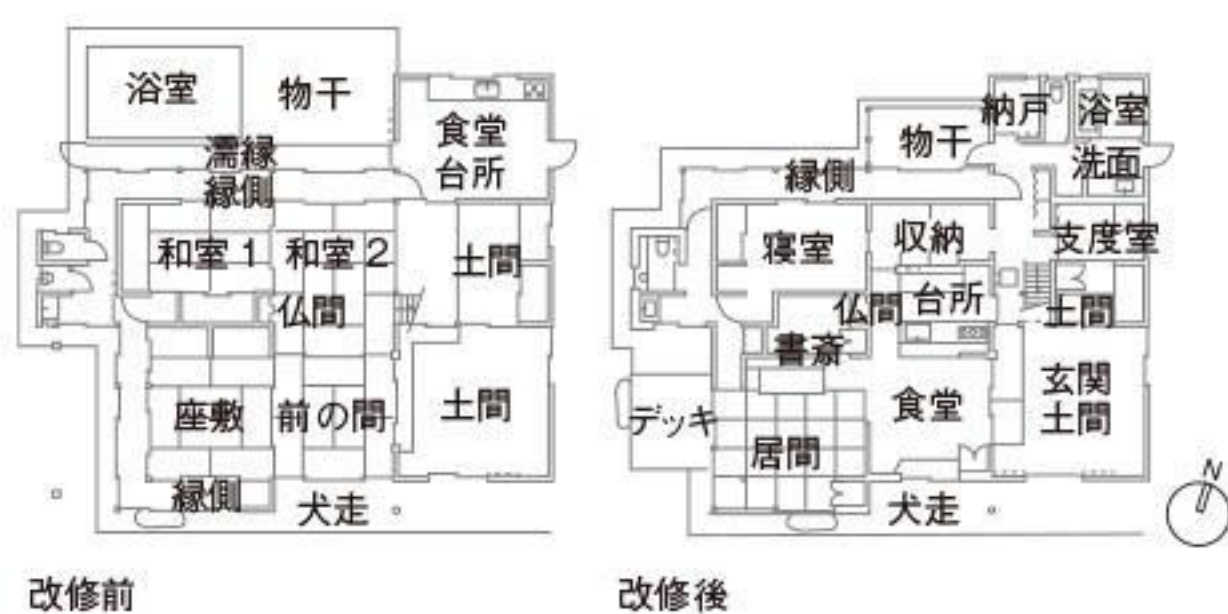
HOUSE IN JONAN

●所在地／愛媛県松山市●家族構成／夫婦＋子ども２人●構造／木造●規模／地上２階●設計期間／2017年４月〜2018年１月●施工期間／2018年２月〜７月●敷地面積／891.52㎡●建築面積／200.33㎡●延床面積／191.69㎡

浴室 物干 濡縁 縁側 食堂 台所 和室１ 和室２ 仏間 土間 座敷 前の間 土間 縁側 犬走

改修前

納戸 浴室 物干 洗面 縁側 寝室 収納 支度室 仏間 台所 土間 書斎 玄関 土間 デッキ 食堂 居間 犬走

改修後

既存の柱を使い、透明度の高い空間に。

かつて縁側だった入隅部分。直交する２枚の窓ははめ殺しにし、それを設置するために既存柱に新規の柱を接合させている。欄間部分まで窓をはめ込み、明るい空間を実現した。

リビングと外部をつなぐデッキ。

入母屋の屋根に葺かれた瓦は10年ほど前に補修工事されていたため、そのままとした。庭に面して、居間から続くデッキを設置。リビングから庭や畑をつなぐ新たな場所に。

半透明の建具が空間をゆるくつなぐ。

土間から式台と階段でダイニングに続くアプローチ。リビングやダイニングの間をポリカーボネート製の建具でゆるやかに仕切る。中空部の一部に木製棒を入れ、透明性を抑えた。

キッチンの脇に仏間を受け継ぐ。

ダイニングに面したオープンキッチンの脇には祖父の時代から継承した仏間を残した。キッチンをはじめ、家事を行う部屋は回遊性を高め、家事動線をコンパクトにしている。

ARCHITECT4

横内敏人

和の「創造的精神」で設計した庭とつながる平屋の住まい。

日本の住宅に古くから用いられてきた素材や手法をアレンジし、現代の技術と融合させたモダンな平屋。特に天井や開口部に、合理的な工夫が詰まっています。

photo_Futoshi Osako　text_Katsura Hiratsuka
editor_Tami Okano

屋根の形を受けた伸びやかな居間。

家の中心となる居間は、庭へと大きく開く。天井の仕上げは葦(ヨシ)材。ソファやダイニングのＹチェアなどは施主の選定で、照明は横内が好んで使うフロスのグローボール。

よこうちとしひと　1954年生まれ。78年東京芸術大学美術学部建築科卒業。80年マサチューセッツ工科大学建築学科修士課程修了。前川國男建築設計事務所などを経て87年独立。91年横内敏人建築設計事務所設立。自然と呼応する住環境を提案している。

JAPANESE MODERN HOUSE

東大阪の家

AREA 大阪府東大阪市

応接コーナーのある玄関。

広い玄関土間にコロニアルチェアと造作家具を配置。天井の仕上げは葦だが居間とは設えを変えている。写真左手、腰掛けの杉の磨き丸太は施主の妻が祖母から受け継いだもの。

南側外観。160坪余りの大きな敷地だからこそ実現できた、ほぼ平屋の建物だ。周辺は工場が混在する市街地のため、プライベートな庭が楽しめるようＬ字の棟で囲んだ。居間の木製建具を開くと、庭と居間が一体となる。敷地は、施主の母が手入れしていた元果樹園で、当時の樹木が一部残されている。

落ち着いた空間の背後に隠された試行錯誤。

東に生駒山脈を望む、大阪郊外の市街地。交通量の多い通りから少し奥まった場所にある、ほぼ平屋の住宅だ。敷地面積は160坪余り。庭との一体感、屋根の形があらわれた伸びやかな室内空間。日本家屋のスタンダードとして親しまれてきた「平屋の魅力」を存分に味わえる住まいとなっている。

設計は建築家の横内敏人が京都で主宰する、横内敏人建築設計事務所。設計実績は200件以上で美しさと機能を兼ね備えた住宅は、日本全国、２世代にわたってのファンも多い。本作の場合、施主の妻の実家も横内の設計だという。

支持される理由は、吟味した材料を用い、家全体のプロポーションから窓の鍵のおさまりまで、徹底して追求した設計の妙にあるだろう。この家の場合、建物の形は、単純なＬ字形。南面する棟には居間、食堂、台所を配し、庭に向けて大きな開口部を設けている。もう一方の棟には、寝室や水回りなどのプライベートな要素を収め、生駒山を望む控えめな窓を開いた。玄関は動線の要となるＬ字形の交点に配置。合理的なプランだ。

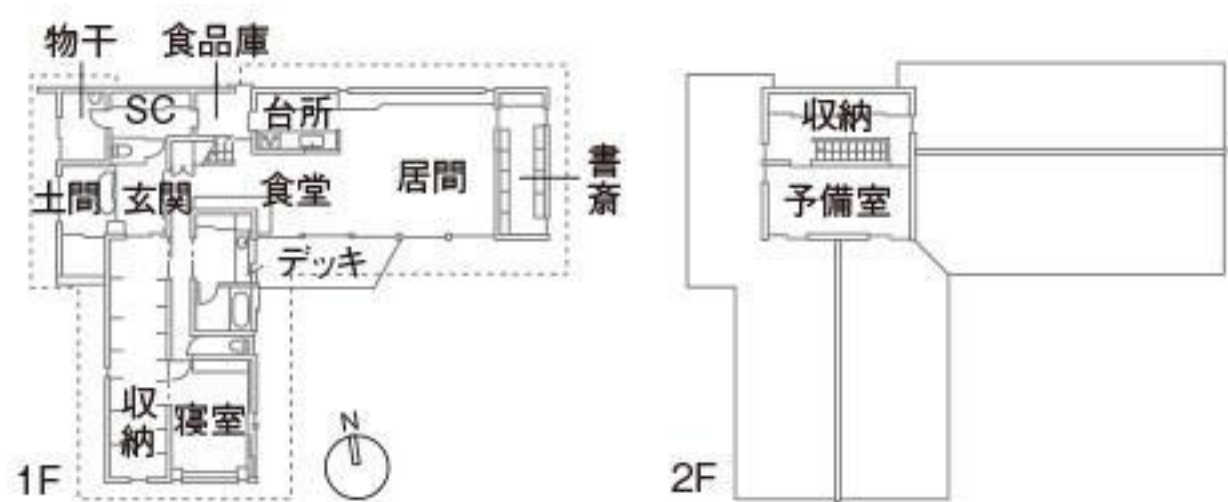
その随所に性能や質感を吟味した素材が効果的に活用されている。たとえば天井。居間と玄関では、屋根の形が室内にあらわれる。平屋ならではの醍醐味だ。共に天井仕上げは葦(ヨシ)材。葦はイネ科の植物で、高い調湿効果とほどよい吸音効果がある。茶室の天井に使われることも多く、その場合は竹などの細い材を、同時に用いるのが伝統的だ。しかし、この家の居間ではモダンな印象になるように、あえて竹を省いている。一方で玄関では細い杉材を並べ、和の印象を強めている。ちょっとした使い分けで印象が変わり、興味深い。

とりわけ、横内の「技」が詰まっているのが、自身で「特別なこだわりを持っている」と語る開口部だ。自然素材を用いた室内になじむ木製建具を用い、戸車やレールなど細部に特別な工夫を施すことで、気密性が高く、庭とすっきりつながる開口部ができるという。室内側にはメーカーと共同開発したオリジナルの断熱ロールスクリーンが装備されている。ミニマルで高性能な、いわば障子の進化形である。

玄関の土間は広く取られ、大きな沓脱石(くつぬぎいし)と共に北欧家具のテーブルセットが置かれている。調和しているのでつい受け入れてしまうが、よく見ると和と洋を織り交ぜた不思議な設えである。これは施主が希望した応接間の代用だ。横内の経験上、応接間は竣工後、ほどなく使われなくなることが多いため、独立させず玄関先にコーナーを設け、空調も用意したという。

日本をルーツとする素材や手法が用いられているが、いずれも形式的ではなく、何らかのアレンジが加えられている。それは横内が和を「形式」ではなく「思想」と考えているからだ。横内は和が「足し算」の意味を持つことに着目し、「新しいものを生み出す創造的精神ととらえている」と著作で述べている。落ち着いた空間の背後に和と洋、あるいは新旧の技術を融合する試行錯誤が垣間見える、奥深い住宅だ。

House in Higashiosaka

●所在地／大阪府東大阪市●家族構成／夫婦●構造／木造●規模／地上２階●設計期間／2018年11月～2019年11月●施工期間／2020年３月～2021年４月●敷地面積／493.48㎡●建築面積／216.30㎡●延床面積／237.94㎡

生活しやすく無駄がない合理的なプラン。

玄関を核に、正面に居間や食堂を、右手にプライベートな寝室などを振り分けた合理的なプラン。裏動線も充実し、施主の希望した大きなクローゼットなど各機能が効率よく並ぶ。

庭との一体感を高める開口部。

「常に家と庭を一体で設計する」という横内の考えで、特に開口部は木製建具と工夫されたおさまりで丁寧に設計されている。居間は大きく開き、寝室などの開口部は絞っている。

機能と美しさが両立されたアプローチ。

鉄平石を敷いたアプローチ。軒を出して建物の傷みを防ぎ、軒裏に木の細い材をあらわし屋根の傾斜を美しく見せている。外壁は弾性や耐久性が高いリシンソフトロール仕上げ。

〝横内式〟断熱ロールスクリーン。

オリジナルの断熱ロールスクリーン。ステンレスの横材を通し、両側の溝に布を飲み込ませ、断熱性を高めたもの。障子を現代の技術で、機能と審美性を進化させた装備だ。

畳ではなく床に玄昌石を。

居間の床材には玄昌石、見切り材にはタモ板目を用いた。玄昌石は深い軒に守られ夏涼しく、冬は日差しの熱を蓄え温かい。床下に温風を流すオンドルのような温熱環境も備える。

しもかわとおる 1983年生まれ。2005年独立。先人が築いた伝統や様式に敬意を払いながら現代との調和を図り、本質的な建築をつくる。細部まで熟考された美しい佇まいの建築空間には、良質な空気感を醸し出す〝何か〟が存在し、永く慈しまれると信じている。

JAPANESE MODERN HOUSE

下川自邸

AREA　福岡県久留米市

TORU SHIMOKAWA

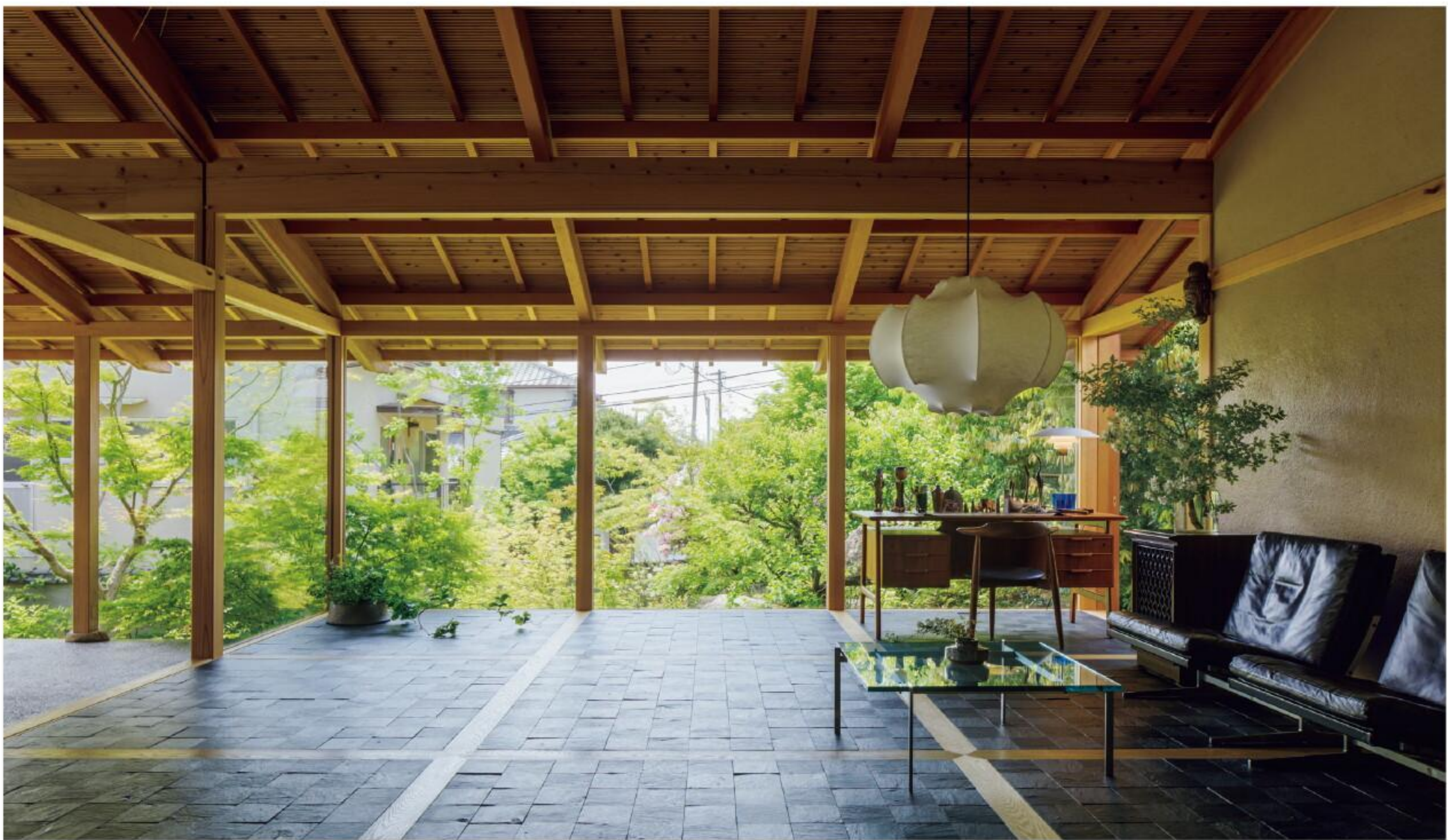
下川 徹

日本建築に宿る知恵に学び、現代の住まいをかたち作る。

日本の伝統的な工法に忠実ながら、
建築家、下川徹の自邸は素材使いの妙で、
現代的な佇まいを実現しています。

photo_Ken'ichi Suzuki　text_Yoshinao Yamada
editor_Tami Okano

高さ1.5mの基礎に建つ家。

筑後川に近く有事に備え1階の床を地表1.5mまで上げた。立ち上がった基礎に束石（つかいし）を置き、柱を設置。手前はピロティ、奥が居間。屋根はむくりのある大屋根としている。

天井高の操作で豊かな空間体験を。

居間の奥は台所と食事室、２階は屋根裏のような多目的室。障子で居室を塞ぐことも可能。食事室の廊下は天井高を1.95mと低く抑えたが、居間は最頂部3.6mと開放感を持つ。

日本建築の基準となる三間四方。

三間四方の居間は、およそ９坪、18畳の空間となる。庭に面した正面の窓ははめ殺し、ピロティとつながる掃き出し窓が引き込み戸に。壁は名工・原田進による土漆喰仕上げ。

玄関と多用途に使うホール。土間は有田で製作した磁器タイル張りで、ここで来客をもてなすことも。ホールも同様に、玄関から続く間という配置にとらわれず、さまざまに使う。ホールは天袋と床の間、床柱をあつらえた日本間の仕様。床柱は大黒柱も兼ねており、クワの根付き丸太を生石灰で焼いて仕上げた。

内外が緩やかに連続した曖昧な空間の魅力。

九州を拠点に活躍する建築家、下川徹。筑後川沿いに建つ彼の自邸は、高く立ち上げた基礎に日本古来の木造軸組（在来）工法に則った構造体が載る。その姿に多くの人は和を見るだろうが、下川自身に和の建築を設計している意識はない。彼が見据えるのは「和」ではなく、日本の建築で脈々と受け継がれてきた知恵だからだ。一方で下川は、自身が設計のうえで重視する「風土、素材、技術」が「和」を感じさせるのではないかと考える。

自邸の第１期完成は2015年。初期の木造住宅だったことから、基本に忠実に、自身が大切とする要素の実験場にしようと考えた。自ら設計した建築空間に暮らし、得た気づきを、依頼される設計に反映する試みである。自邸はプランニングも非常に明快で、「目新しさはない」と下川は笑う。日本の住宅に古くから普及する田の字型を採用しており、４つに分割された空間の内訳は、玄関とホール、居間、台所と食事室に、ピロティ＝屋外が加わる。これらの居室はそれぞれ三間四方（約5.4×5.4m）、つまり「九間」となっている。

「九間」とは室町時代に成立した書院造における「座敷」の基準の広さだ。能舞台も同寸で、建築家の吉村順三はこれが人にとって最も心地よいサイズであると言及している。このように伝統的なモデュールで構成された空間を、「日本の風土に合わせて先人が築いた合理的な考えですから、それを基本にしています。その上で、独自の寸法感覚で細部まで徹底的にプロポーションを整えています」と下川。ホールから食事室に続く天井高は２m以下に抑え、その奥にある居間ではおおらかな木造の架構を現した開放的な空間を展開。それは菊竹清訓の〈東光園〉での空間体験を思い起こさせる。

部材や仕上げにも先人の知恵を参照する。柱に使うのは、丸太の中央にある芯を外して木取りした芯去り材。大木のみから取れる材で狂いが少なく、柾目の美しさに定評がある。これら柱と桁の接合部には、堅木の栓を打ち込んで強度を高める「込栓」を使用。玄関とホールをつなぐ床柱は大黒柱を兼ねたクワの根付き丸太で、生石灰で焼いて仕上げた。

「一口に日本の建築といっても、隣り合う奈良と京都でも建築のつくりは違います。奈良の古寺では武骨な素材と力強いスケールに惹かれますが、京都では庭や磨き丸太に自然を尊ぶ心を見ます。日本の伝統的な建築に共通するのは、細部から設計を重ねていく姿ではないでしょうか」と下川。では、自邸で考えた日本建築の魅力とはなにか。

「日本の建築には透かしのレイヤーがあるように思います。自邸では玄関に入ると、開口部の向こうにピロティがあり、居間、さらに奥の庭が見えます。内外が緩やかに連続し、曖昧な空間をなす。それによって両者が一体になっているように感じられます。柱と桁でフレーミングされる風景がより美しく映ることも日本建築の魅力。第２期で予定しているアトリエと庭でそのことを体感できる日を想望しています」

在来工法を巧みに活かして建具を収める。

水平窓とトップライトを備える２階の多目的室は、居間の吹き抜けに対して腰壁のみでつながる屋根裏のような空間。在来工法のモデュールを活かし、建具を巧みに収めている。

畳の間が連続した居室のような廊下。

厚さ45㎜の黒漆喰研ぎ出しの壁はレザーのよな質感。ホールと食事室の間に、台所や書斎に続く廊下の役割を果たす空間が。畳の間の連続で居室のような佇まいを持つ。

素材使いの妙で現代との調和を。

典型的な在来工法の構造ながら、透明性のあるはめ殺しのガラス、床に割肌の石を用いるなど、素材使いの妙でコンテンポラリーな空間として強い印象を与えている。

連続性こそ日本建築の魅力。

玄関よりホール、ピロティと居間を見る。それぞれの空間を分節しながら、窓、襖、障子という建具の存在で連続性を感じさせる。その内外の連続性こそ日本建築の魅力と下川。

SHIMOKAWA HOUSE

●所在地／福岡県久留米市●構造／木造●規模／地上２階●第１期設計期間／2011年４月〜2014年12月●第１期施工期間／2015年１月〜12月●敷地面積／466.45㎡●建築面積／135.26㎡●延床面積／165.24㎡

台所
玄関
食堂
居間
ピロティ
1F

寝室
書斎
2F

DESIGNERS & ARCHITECTS

text_Tami Okano, Akio Mitomi, Housekeeper

和風モダンを知る、建築家&デザイナー・リスト。

特集に掲載された和風住宅や和の空間を手がけた、建築家とデザイナーのプロフィールをご紹介。「和を感じるお気に入りの素材」について伺いました。

▶▶ リストの見方

ワンダーウォール／片山正通
Wonderwall® /
Masamichi Katayama
▶▶ P.30 翠門亭

1966年生まれ。Wonderwall®代表、武蔵野美術大学教授。国内外で多岐にわたるプロジェクトを数多く手がける。コンセプトを具現化する自由な発想、伝統や様式に敬意を払いつつ現代的要素を取り入れるバランス感覚が国際的に評価されている。

■ My Favorite Material
プロジェクトのコンセプトに沿って全体のバランスの中で素材をいかにセレクトするかが大事なので、気に入った素材は持たず、常に新鮮な視点で素材を選びます。写真は〈翠門亭〉のスチール製の手すり。

■ Contact
https://wonder-wall.com

1 設計者顔写真
2 設計者名+欧文設計者名
3 作品掲載ページ+作品名
4 プロフィール
5 お気に入りの素材の写真
6 お気に入りの素材
7 連絡先

魚谷繁礼建築研究所／魚谷繁礼
Shigenori Uoya Architects and Associates / Shigenori Uoya
▶▶ P.72 湯室のある家

1977年生まれ。兵庫県出身。2001年京都大学工学部卒業、03年京都大学大学院工学研究科修了。現在、京都を拠点に魚谷繁礼建築研究所を主宰し、国内外でプロジェクトが進行中。京都大学、京都建築専門学校などで非常勤講師。20年より京都工芸繊維大学特任教授。

■ My Favorite Material
敷瓦。黒い塊に光が触れたときのしっとりとした艶感と、使い込まれていくほどに深みを増すような質感が気に入っています。そしてある程度を越えると一気に艶感を喪失し、ただただ朽ちていく感じも。

■ Contact
http://www.uoya.info

---

photo_Takashi Homma

北条工務店／北条愼示
HOJO / Shinji Hojo
▶▶ P.30 翠門亭

1979年奈良県生まれ。一級建築士。北条工務店代表。神戸芸術工科大学卒業。いくつかの設計事務所を経て、4代続く工務店を継ぐ。設計と施工の両方の観点から意匠性と機能性、メンテナンス性を重視した新築やリノベーションを関西中心に手がける。

■ My Favorite Material
古い建物の建て替えやリノベーションでは、そこで使われていた古材を頻繁に使います。古材を使うことで、建物の持つ痕跡や文脈を引き継ぐことができます。設計施工一貫だからこそのこだわりです。

■ Contact
https://www.hojoh.co.jp

---

photo_Kazumi Kurigami

ワンダーウォール／片山正通
Wonderwall® /
Masamichi Katayama
▶▶ P.30 翠門亭

1966年生まれ。Wonderwall®代表、武蔵野美術大学教授。国内外で多岐にわたるプロジェクトを数多く手がける。コンセプトを具現化する自由な発想、伝統や様式に敬意を払いつつ現代的要素を取り入れるバランス感覚が国際的に評価されている。

■ My Favorite Material
プロジェクトのコンセプトに沿って全体のバランスの中で素材をいかにセレクトするかが大事なので、気に入った素材は持たず、常に新鮮な視点で素材を選びます。写真は〈翠門亭〉のスチール製の手すり。

■ Contact
https://wonder-wall.com

奥野崇建築設計事務所／奥野 崇

Takashi Okuno & Associates / Takashi Okuno

▶▶ P.100 城南の家

1982年愛媛県生まれ。数寄屋建築の美しさにふれたことをきっかけに、茶道を習い始める。2012年に奥野崇建築設計事務所を設立。代表作は〈五つ庭の平屋の家〉〈土間サロンのある家〉〈真言宗光林寺 位牌堂〉など。茶室空間についても複数の設計実績がある。

■ My Favorite Material

経木簾を好んで使います。「見える」と「見えない」の間のグラデーションを愉しむことができ、場面やその時の気分による光量の調整が可能な点や、そのものに清涼感を感じる点が気に入っています。

■ Contact

https://okunotakashi.jp/

中村拓志&NAP建築設計事務所／中村拓志

©KEI Tanaka

Hiroshi Nakamura & NAP / Hiroshi Nakamura

▶▶ P.90 磐座の家

1974年東京都生まれ。99年明治大学大学院で建築学修士を修了後、隈研吾建築都市設計事務所を経て2002年NAP建築設計事務所設立。自然現象や人々のふるまい、心の動きに寄り添う「微視的設計」による「建築・自然・身体」の有機的関係の構築を信条としている。

■ My Favorite Material

北山杉の丸太。木肌が滑らかで美しく、設計者がコントロールできない自然ならではの魅力がある。丸太は繊維を切断する角材より反りにくく強度があり、外形の違いを利用することでより強く嵌合する。

■ Contact

https://www.nakam.info

アルボル／堤庸策

arbol / Yousaku Tsutsumi

▶▶ P.78 篠山の家

1979年東京都生まれ、徳島県育ち。国立阿南工業高等専門学校高等課程修了後、専門学校アートカレッジ神戸卒業。田頭健司建築研究所を経て、2009年建築設計事務所アルボル設立。住宅から日用品まで幅広いデザインを手がける。住宅作品に〈House in Tamba〉など。

■ My Favorite Material

木材ではスギとヒノキ。壁の仕上げ材では漆喰。個人的には他の木材や仕上げ材よりも、和を感じることができます。特にヒノキは、和の代名詞的な素材で、写真はアルボルで作ったヒノキの収納BOX。

■ Contact

https://www.arbol-design.com

横内敏人建築設計事務所／横内敏人

Toshihito Yokouchi Architect & Associates / Toshihito Yokouchi

▶▶ P.104 東大阪の家

1954年山梨県生まれ。78年東京芸術大学美術学部建築科卒業。80年マサチューセッツ工科大学建築学科大学院修士課程修了。前川國男建築設計事務所勤務などを経て、87年に独立。91年横内敏人建築設計事務所設立。自然と呼応する住環境を提案している。

■ My Favorite Material

《プランツボード特選葭 サツマ丸糸通し》。自然素材の仕上げ材で、吸音吸湿効果が高い。和の素材だが、押縁をなくし突き付けで張ると、洋間でも使え、押縁をつけると和室の天井になる。

■ Contact

https://www.yokouchi-t.com

DESIGNERS OF JAPANESE MODERN ARCHITECTURE

masayuki takahashi design studio／高橋真之

masayuki takahashi design studio / Masayuki Takahashi

▶▶ P.78 篠山の家

1982年兵庫県生まれ。大阪を拠点に活動。自身の仕事は「空気を整える」ことだと考え、空間設計、家具・プロダクトなど多岐にわたるデザインを手がける。空間デザインでは、いつもその場所とそこにある人が本来持っている「空気感や佇まい」を大切にしている。

■ My Favorite Material

三和土。土本来の姿、素の素材であることに魅力を感じる。土と石灰に苦汁を混ぜ、足で踏みしめ、たたき棒で叩きしめることで強度のある土間ができ、素朴な素材感が整えられた空間に彩りを与える。

■ Contact

https://www.masayukitakahashi.com

TORU SHIMOKAWA architects／下川 徹

©Hirokazu Muta

TORU SHIMOKAWA architects / Toru Shimokawa

▶▶ P.108 下川自邸

1983年福岡県生まれ。2005年独立。先人が築いた伝統や様式に敬意を払いながら、現代との調和を図り、新鮮な発想で本質的な建築をつくる。細部まで熟考された美しい佇まいの建築空間には、良質な空気感を醸し出す〝何か〟が存在し、永く慈しまれると信じている。

■ My Favorite Material

陶芸家・橋本祭由さん（如菴陶房）の陶板。柔らかくむくらせた陶板は、光を受け美しいシルエットが浮かび上がる。登り窯の偶発的な窯変により陶板のフォルムや質感はすべて異なり、空間を豊かにする。

■ Contact

http://torushimokawa.com

森田一弥建築設計事務所／森田一弥

Kazuya Morita Architecture Studio / Kazuya Morita

▶▶ P.96 泉涌寺道の町家

1971年愛知県生まれ。京都大学で建築を学び、左官職人として京都の文化財修復に5年間従事したあと、設計事務所を設立。スペインでの留学経験などを経て、現在は京都市北部の集落、静原の古民家を拠点に活動。京都府立大学でも教鞭をとるプロフェッサーアーキテクト。

■ My Favorite Material

荒壁。土という素材の生命感が一番感じられる土壁だから。写真は、2013年に改修した〈御所西の町家〉、新規土壁部分。本来は土壁の「下塗り」層でもある荒壁を、そのまま可視化した。

■ Contact

https://morita-arch.com

ジェル・アーキテクツ／北出健展

JELL-architects / Takenobu Kitade

▶▶ P.84 YUWAKU CASE STUDY HOUSE

1972年生まれ。横浜国立大学大学院修了。2005年ジェル・アーキテクツ設立。16年金澤町家を購入改修し移住。茶人として『月釜』『月ノ樂釜』を共同主宰。歴史建造物修復士。金澤町家研究会にて町家の再生・活用にも従事。設計デザインに携わる方の依頼が多い。

■ My Favorite Material

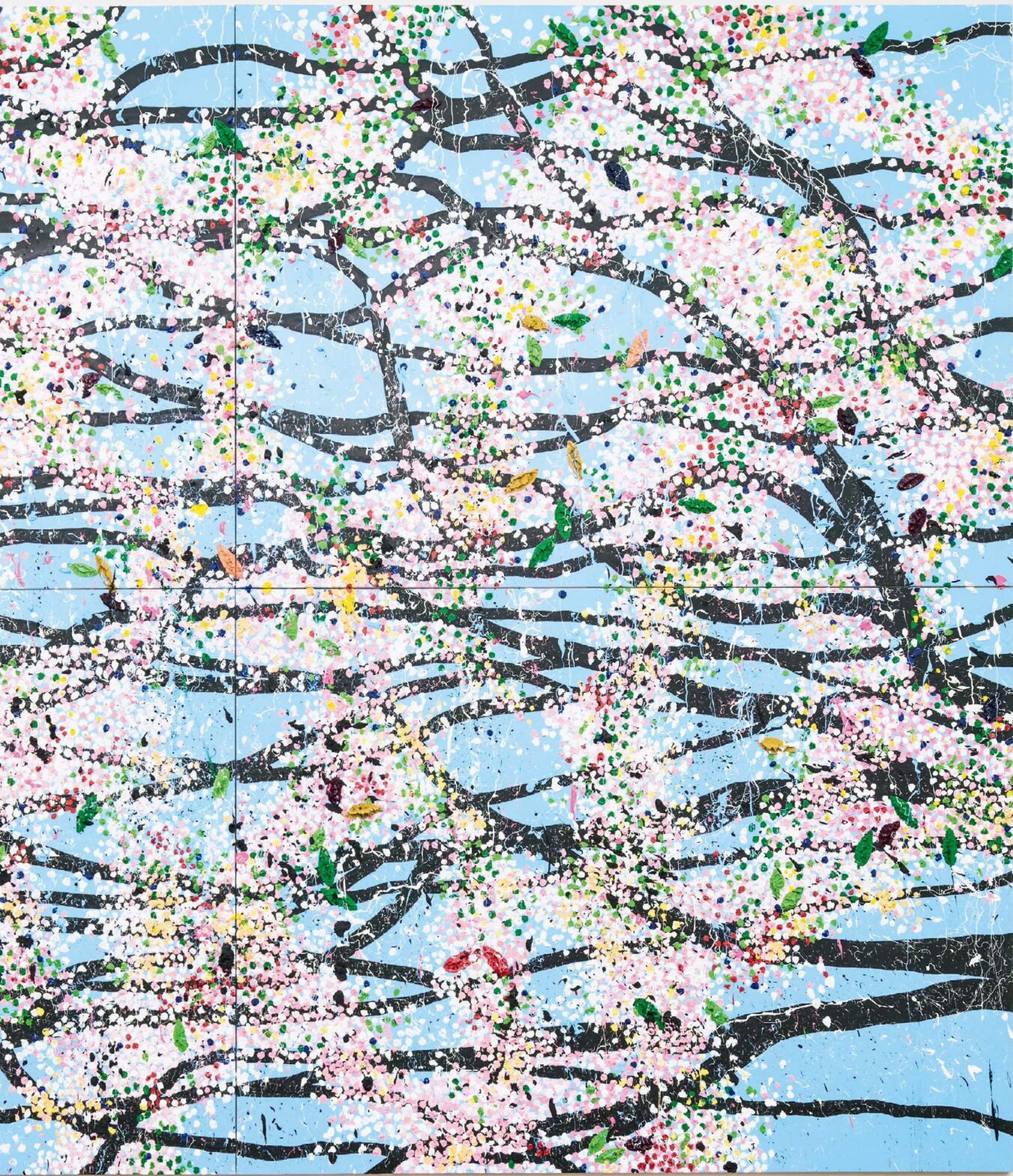
無垢の化粧木材、拭き漆や美しい木目の天井板、繊細な組子障子など、古い建物の良質な意匠材は、時を経た落ち着きと変化を内包し、新たな息吹を吹き込んでくれます。写真は湯涌の家の中の間の床板。

■ Contact

http://www.jell-architects.jp

JAPANESE MODERN

北陸の山間の道に建つ〈YUWAKU CASE STUDY HOUSE〉。和風住宅特有のベンガラ塗りの建具や幅広の板張り床に、剣持勇のラタン製のソファ&スツールが静かに馴染む。

photo_Masaki Ogawa

DAMIEN HIRST CHERRY BLOSSOMS

ダミアン・ハーストの桜と長濱ねる。

国立新美術館で開催中の『ダミアン・ハースト 桜』展。会場で咲き誇る24点の桜の絵画は何を表しているのか？長濱ねるとともに満開の桜の園を訪ねました。

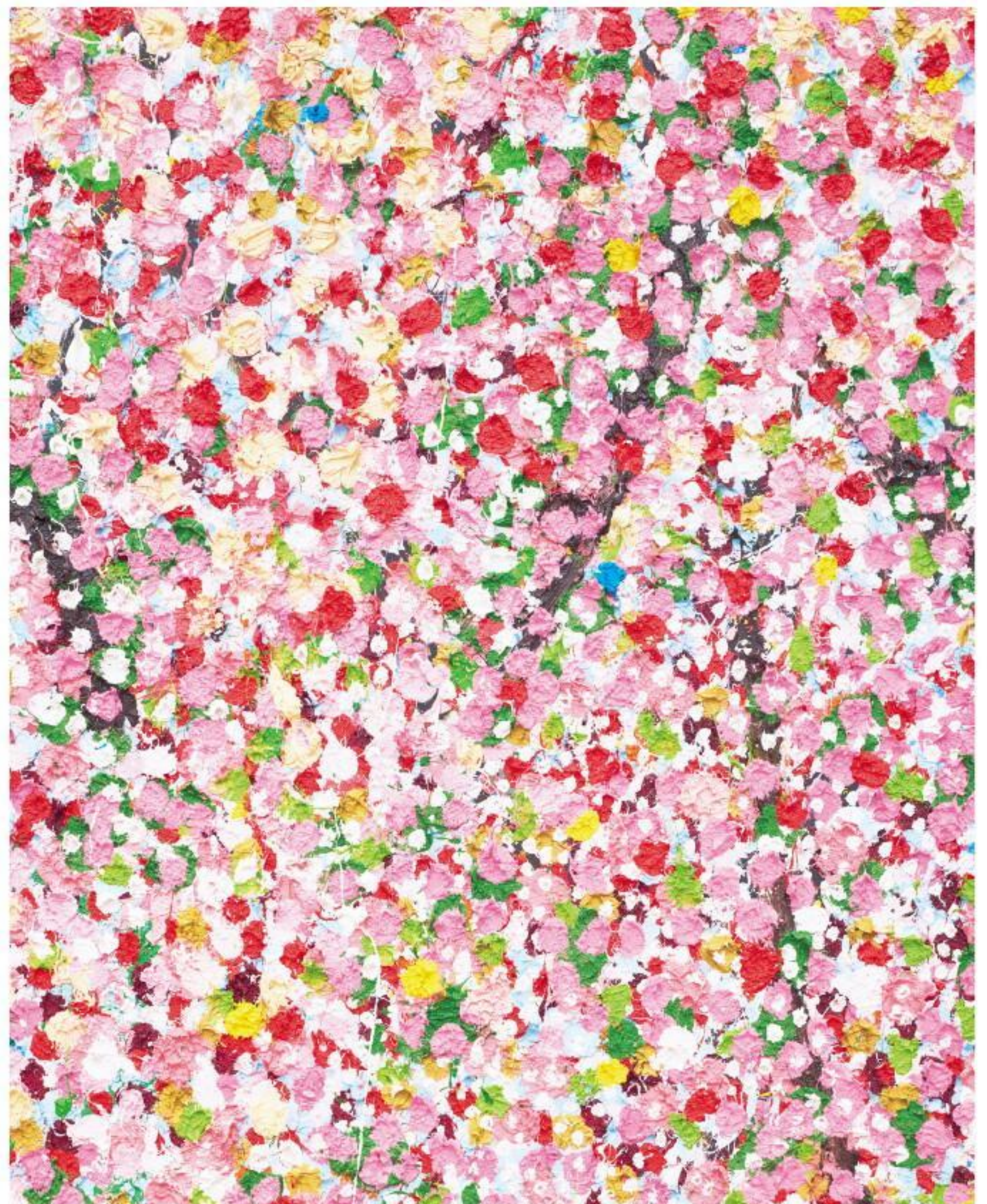
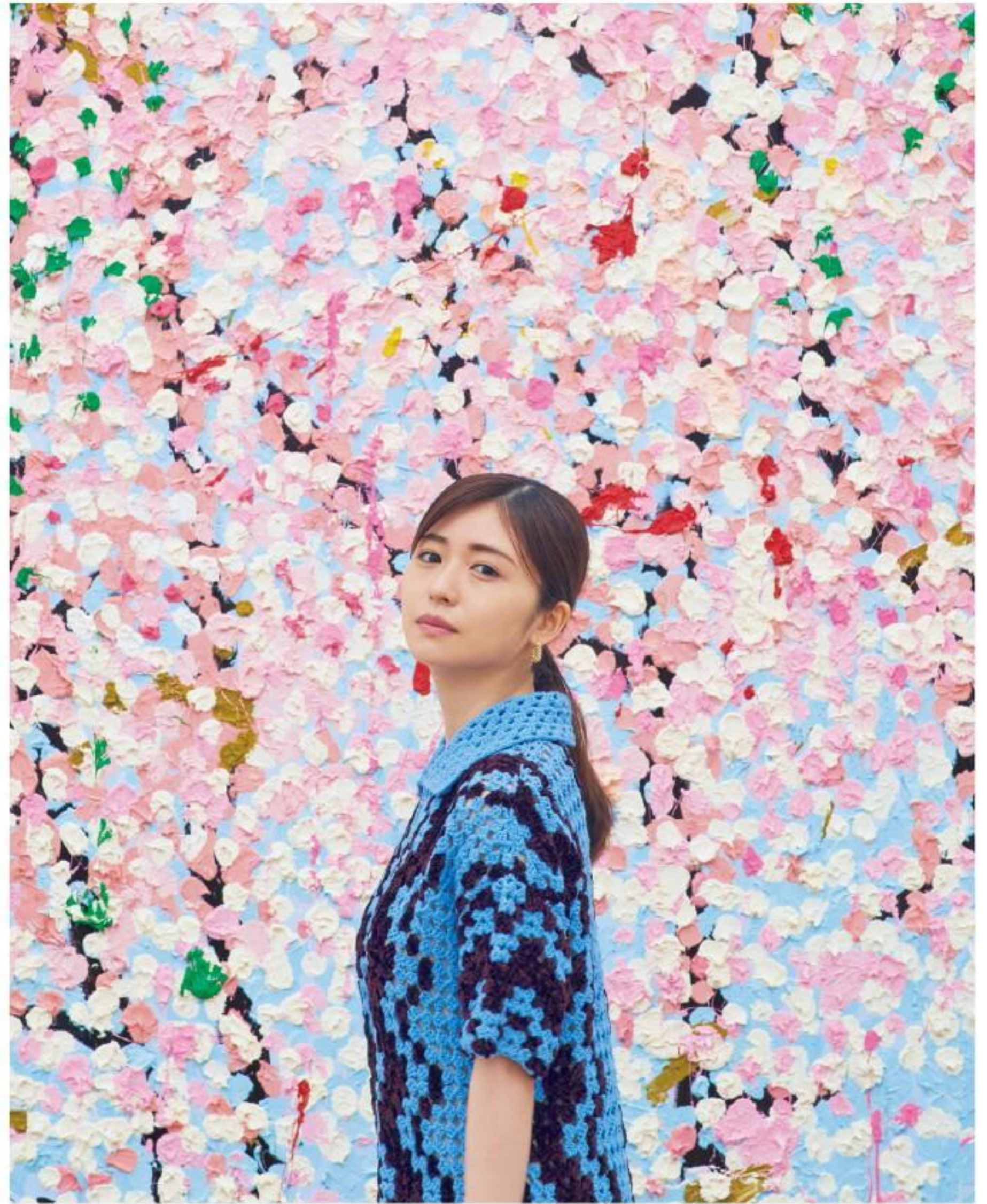
photo_Kenshu Shintsubo　styling_Naomi Shimizu
hair & make-up_Yoshikazu Miyamoto (bnm)　text_Jun Ishida

『ダミアン・ハースト 桜』展

2021年にパリの〈カルティエ現代美術財団〉の個展で初披露されたダミアン・ハーストによる《桜》シリーズの巡回展。107点ある同シリーズから24点を展示。●〈国立新美術館 企画展示室2E〉東京都港区六本木7—22—2 ☎050・5541・8600。〜５月23日。10時〜18時（金・土〜20時）。火曜休（５月３日は開館）。

ダミアン・ハースト　1965年、英国ブリストル生まれ。ゴールドスミス・カレッジ在学中（1989年卒業）に、他の学生とともにグループ展『フリーズ』を企画し、注目を集める。1995年ターナー賞受賞。2021年の〈カルティエ現代美術財団〉での展覧会は、フランスで行う初めての大規模個展に。ロンドン在住。

「絵画に没入できるように、作品を大きくしたかった」とハーストが語るように、会場内で最も大きな作品、549×732㎝の《この桜より大きな愛はない》は圧倒的な迫力。

イヤリング《クラッシュ ドゥ カルティエ》489,500円、リング《クラッシュ ドゥ カルティエ》上385,000円、下588,500円（以上カルティエ／カルティエ カスタマー サービスセンター☎0120・301・757）。ジレ306,900円、中に着たシャツ96,800円、サンダル135,300円（以上マルニ／マルニ ジャパン クライアントサービス☎0800・080・4502）。

7 5 | 3 1
8 6 | 4 2

1 一番好きな絵だという《詩人の桜》の前に立つ長濱ねる。**2** ピンク、赤、黄、青など様々な色で埋め尽くされたキャンバス。《神の桜》部分。**3** 離れたところから絵具をキャンバスに投げつけて制作された。近づくと絵具の塊の集積のように見えてくる。《母の桜》部分。**4** 季節ごとに使用される色も異なる。《夏の桜》。**5**《知恵の桜》部分。**6** 展覧会の冒頭を飾る《儚い桜》。来日は叶わなかったハーストだが、展示の指示は自ら行った。**7**《母の桜》はダミアン・ハーストが子どもの頃、母が桜の油画を描いていた記憶があることから。**8** スケジュールの隙間を見つけては美術館を訪れるという長濱。《漢字桜》部分。

イヤリング《クラッシュ ドゥ カルティエ》489,500円（カルティエ／カルティエ カスタマー サービスセンター☎0120・301・757）。ニットドレス949,300円（ジルサンダー バイ ルーシー アンド ルーク・メイヤー／ジルサンダージャパン☎0120・919・256）。

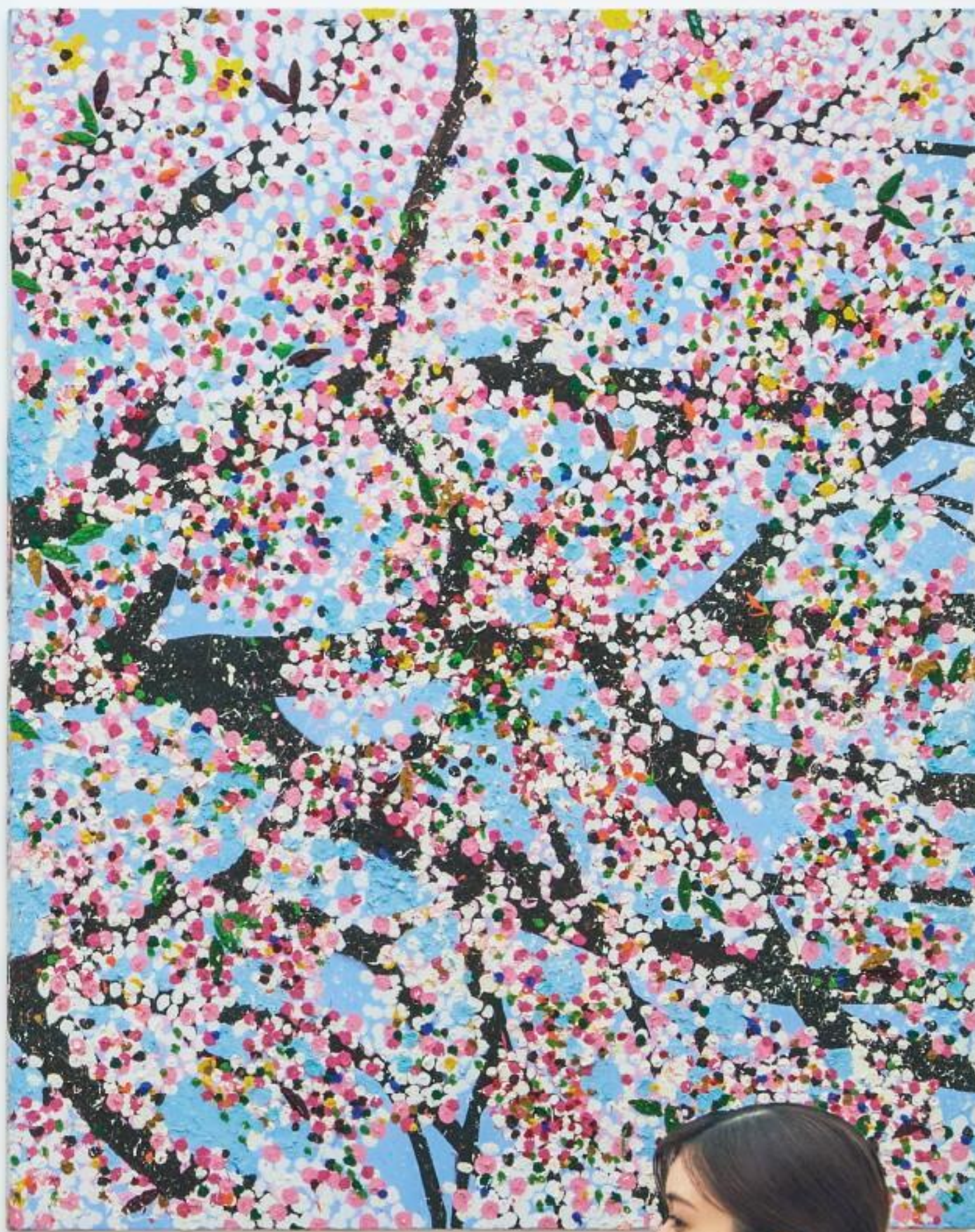
ながはまねる　1998年長崎県生まれ。３歳から７歳まで五島列島で育つ。テレビ番組『セブンルール』MC、J-WAVEでのナビゲーターやNHK・SDGsキャンペーン『未来へ17アクション』PR大使を務めるなど、幅広く活躍中。趣味は読書・音楽鑑賞など。

棚に規則正しく並べられた薬瓶、ホルマリン漬けにされた牛……。ダミアン・ハーストと聞いて真っ先に思い浮かべるのは、こうしたショッキングでコンセプチュアルな作品群だろう。現代アートの世界を一新した90年代のＹＢＡｓを代表するアーティストにして、アートの最前線を行くハーストの、日本で初となる大規模な個展が国立新美術館で開催されている。

ホワイトキューブの空間を埋め尽くすのは桜の巨大な絵画だ。２０１８年から3年にわたって描き続けた《桜》シリーズ１０７点は２０２１年にパリで〈カルティエ現代美術財団〉が初公開し、日本では本人が選んだ24点を展示。それらは離れて見る分には桜に見えるが、近づくにつれ色の塊の集積へと変わる。キャンバスに投げつけられた絵具の塊はどこか暴力的で、その色は毒々しい。展示を観に訪れた長濱ねるも同じ印象を抱いたようで、「ダミアンが描くのだから、癒しや優しい桜ではないだろうと思っていました」と語る。

「近くで見ると立体感があって、ピンクや赤だけでなく、オレンジや黄、青などいろいろな色がありますね。すべての絵が異なっていて、桜だけでいろいろな顔を表現できるのがすごいとまず思いました。全部の絵で桜が咲いているのも不思議に思えます。枯れているものがない。なぜ、すべて満開なのでしょうか？」

咲き誇る桜を待ち受けるのは死だ。そこに描かれる桜が美しければ美しいほど、私たちは間近に訪れるその死を予感する。ハーストが追い続けるテーマの一つが「生

ダミアンが描くのだから、優しい桜ではないだろうと。

者における死の物理的な不可逆さ」(作品のタイトルでもある）だが、ここでもそれは貫かれている。
「《桜》のシリーズは美と生と死についての作品なんだ。それらは極端で、どこか野暮ったい。愛で歪められたジャクソン・ポロックみたいにね。《桜》は装飾的だが、自然からアイデアを得ている。欲望、周囲の事柄をどのように扱い、何に変化させるのかについて、さらに狂気的で視覚的な美の儚さについても表現している」（本展カタログより）
ハーストが言及するように、キャンバスに絵具を投げつける振舞いはジャクソン・ポロックのアクションペインティングを思わせ、そしてその色の集積は、観るものを色の点へと解体していくジョルジュ・スーラの絵画を連想させる。大がかりな作品が注目されるハーストだが、もともとは画家を目指していた。アーティストとして歩み始めた80年代から《スポット・ペインティング》シリーズをスタートし、その後も《スピン・ペインティング》、近年では《ベール・ペインティング》と、絵画シリーズを発表している。そして「抽象的でもありながら、具象的でもあったら、この二つの世界を行き来できる」（同カタログ）と考え始めたこの《桜》シリーズは、印象派から抽象表現主義に至る西洋絵画の歴史に対するハーストのオマージュともいえる。
コロナ禍で、一人スタジオにこもり描き続けたという《桜》シリーズ。日本での展示が決まった時、ハーストは心から喜んだという。桜の季節に観る桜の絵画。その美しさ、儚さはひときわ増すだろう。

三幅対を思わせる三連画《生命の桜》を眺める長濱。ハーストは東京で桜の季節に展覧会を催すことを快諾したという。日本特有の桜にまつわる死生観は彼の絵からも感じとれる。

PRADA AOYAMA ROLE PLAY

自己への多彩なアプローチ、〈プラダ 青山店〉で『ロール プレイ』展が開催。

コンセプチュアルな現代アートの展覧会を打ち出すプラダ財団。〈プラダ 青山店〉で始まった『ロール プレイ』展は、SNS時代におけるアイデンティティについて問いかける。

photo_Masaki Ogawa　text_Jun Ishida

ハルカ・サカグチ＆グリセルダ・サン・マルティン

Typecast Project（2019）

サカグチは1973年大阪生まれ、マルティンは1978年バルセロナ生まれ。ともにドキュメンタリー写真家であり、現在はNY在住。ハリウッドにおける人種に基づくステレオタイプの偏見をテーマに本作を制作した。俳優たちが普段演じることを求められる役と、演じたい役柄の２タイプを演じる。

ボゴシ・セククニ

Consciousness Engine
2:absentblackfatherbot（2014）

1991年南アフリカ・ヨハネスブルグ生まれ。アイデンティティを再考することにおいて、オンラインとテクノロジーが果たす役割を探求する。本作は、疎遠になった父親とFacebookのビデオチャットで会話する息子の映像作品。両者はアバターとして登場し、ロボットの声を通して会話する。

ジュノ・カリプソ

Subterranean Kitchen (2017)
A Clone of Your Own (2017)
How Much Life is Enough? (2018)

1989年ロンドン生まれ。ラスベガスの大富豪が冷戦時代に建設したシェルターに滞在し、制作したセルフポートレート作品。カリプソは架空の人物「ジョイス」に変装している。地下８mにある大邸宅にはプールも併設。Facebookで管理人と交渉し、この邸宅に入ることが許されたという。

ROLE PLAY

青の空間の中で始まるアイデンティティを探る旅。

プラダはファッションブランドの中でも、最も知的で洗練されたアートを志向することで知られる。〈プラダ 青山店〉では、映像と写真、そして音声による作品をフィーチャーした展覧会『ロール プレイ』が開催中だ。

本展は、今年2月よりミラノの〈Osservatorio Fondazione Prada〉で行われている展覧会の東京バージョンで、ジュノ・カリプソ、ベアトリーチェ・マルキ、澤田知子、ボゴシ・セククニ、そしてハルカ・サカグチとグリセルダ・サン・マルティンという5組の作家が参加している。どの作家も「他者」を演じる、あるいは自らの「分身」を作ることによりアイデンティティについて問いかけるもので、キュレーションを担当したのは、アメリカの写真雑誌『Aperture』の元編集長であるメリッサ・ハリスだ。展覧会名ともなっているロールプレイについて、「私は、パフォーマンスと物語、そして写真が結びつくことにより生まれる作品に魅了されてきました。ロールプレイはまさにこの3つの言語からなるものです」と述べる。

「クロード・カアン、マルセル・デュシャン、ソフィ・カル、シンディ・シャーマンなど20世紀を代表する様々な作家たちがペルソナを探求するプロジェクトを発表してきました。では21世紀におけるソーシャルメディアの進化や私生活の可視化、そして特に若い世代に見られる疎外感の高まりを、現代の作家はどう受け止めているのでしょうか？　関心を抱きリサーチしてみると、オンラインゲーム、コスプレ、インスタグラム、ステレオタイプ、アクティビズムといったものが、とても豊かなテーマであることがわかったのです」

そして、これらのテーマはコロナ禍の到来で重要性を増していく。「リサーチはコロナ禍以前に始めていましたが、この2年間はテーマへの共感を高めました。SNS上で仮面を被る匿名性、仮想的で孤立したZoom生活……、コミュニティのあり方、個人のあり方について、私たちが考える時間となりました。自己を作り変えるというテーマは常に人々を魅了し続けてきましたが、現代の作家たちは、その要求に応えるべく進化してきたメディアをロールプレイのための革新的なコンテキストとして受け入れ、さらに自己へのこだわりを強めているのです」

東京の展示では、ヘルツォーク&ド・ムーロンによる空間を、アムステルダムのクリエイティブスタジオであるランダム・スタジオが真っ青な空間へと変質させた。深海を思わせる空間で、発光するかのように浮かび上がる作品は、観る者を沈思へと誘う。自らのアイデンティティを探る旅が始まる。

Information

PRADA AOYAMA ROLE PLAY

プラダ財団の支援を得て企画された展覧会。ミラノのガレリア・ヴィットリオ・エマヌエーレⅡにある展示施設〈Osservatorio Fondazione Prada〉で開催中の展覧会の東京バージョン。写真、映像作品を中心に５組の作家の作品を展示。●〈プラダ 青山店〉５階。東京都港区南青山5―2―6☎0120・45・1913。～６月20日。11時～20時。無休。無料。＊状況に応じて入場制限を行う可能性あり。

ベアトリーチェ・マルキ
Never Be My Friend（2014）

1986年イタリア・ガラテテ生まれ。他者との関係において善悪の間にある道徳的な疑問に悩まされるキャラクター、ケイティ・フォックスを創作し、彼女が人気者だった思春期のあるエピソードをテーマにしたR&Bソングを作り上げた。青山店のエレベーター内でその音源が流される。

澤田知子
OMIAI♡（2001）

1977年神戸生まれ。「変わらないはずの内面と変わる外見」をテーマとした作品を発表。本シリーズでは、お見合い写真をテーマに、衣装やウィッグ、メイク、そして体重を増減することで、30人のキャラクターに変身。お見合い写真専門のスタジオでポートレートを撮影してもらい制作した。

Discover Architecture Tour

櫻井翔の

ケンチクを学ぶ旅。

嵐の櫻井翔さんが、自ら日本全国の気になる建築まで足を運び、その魅力や驚き、感動を誌面でリポートします。

さくらいしょう 1982年生まれ。99年に「嵐」のメンバーとしてデビュー。ドラマや映画のほか報道番組『news zero』のキャスターも務める。テレビ番組『1億3000万人のSHOWチャンネル』『櫻井・有吉THE夜会』が好評放送中。

4階のパッサージュから2階を見下ろす。吹き抜け空間を縫うようにして、エスカレーターや階段が配置されている。吹き抜けの高さは最高で30.9mある。

vol.122

構想から約40年。人々が行き交う街のような美術館ができました。

今年2月、大阪の中心部・中之島に開館した〈大阪中之島美術館〉。黒い箱のようなシンプルな外観に対して、内部は複雑な構成を持つ。街の賑わいや動線を引き込んだ、新しいカタチの美術館を訪ねました。

photo_Norio Kidera styling_Masashi Nomura (STUTTGART)
hair & make-up_Yoshinori Takeuchi
cooperation_Yoshikuni Shirai
text_Ai Sakamoto

Osaka-shi
Osaka

大阪で、今話題の〈大阪中之島美術館〉をご存じだろうか？　この2月、中之島に開館した地上5階建ての巨大美術館。1、2階がガラス張り、3階以上が黒い外壁を持つことから、一見すると、真っ黒い箱が宙に浮かんでいるようにも見える。

「黒い外観というのは珍しいですね。ただ不思議と圧迫感はなく、意外と街に溶け込んでいるように見えます。ところどころに開けられた開口がアクセントなのかな？　それにしても、手前にあるヤノベケンジさんの作品《SHIP'S CAT（Muse）》の存在感はすごいですね（笑）」

建物北側に広がる芝生広場から、美術館を眺めながら櫻井さんが話す。外観を覆っているのは、609枚の黒いプレキャストコンクリートパネル。石や砂、黒い顔料を混ぜたコンクリートの表面を超高圧ウォータージェットで荒らし、5㎜ほどの凹凸をつけることで、より深淵な黒を再現したと建築家の遠藤克彦さん。

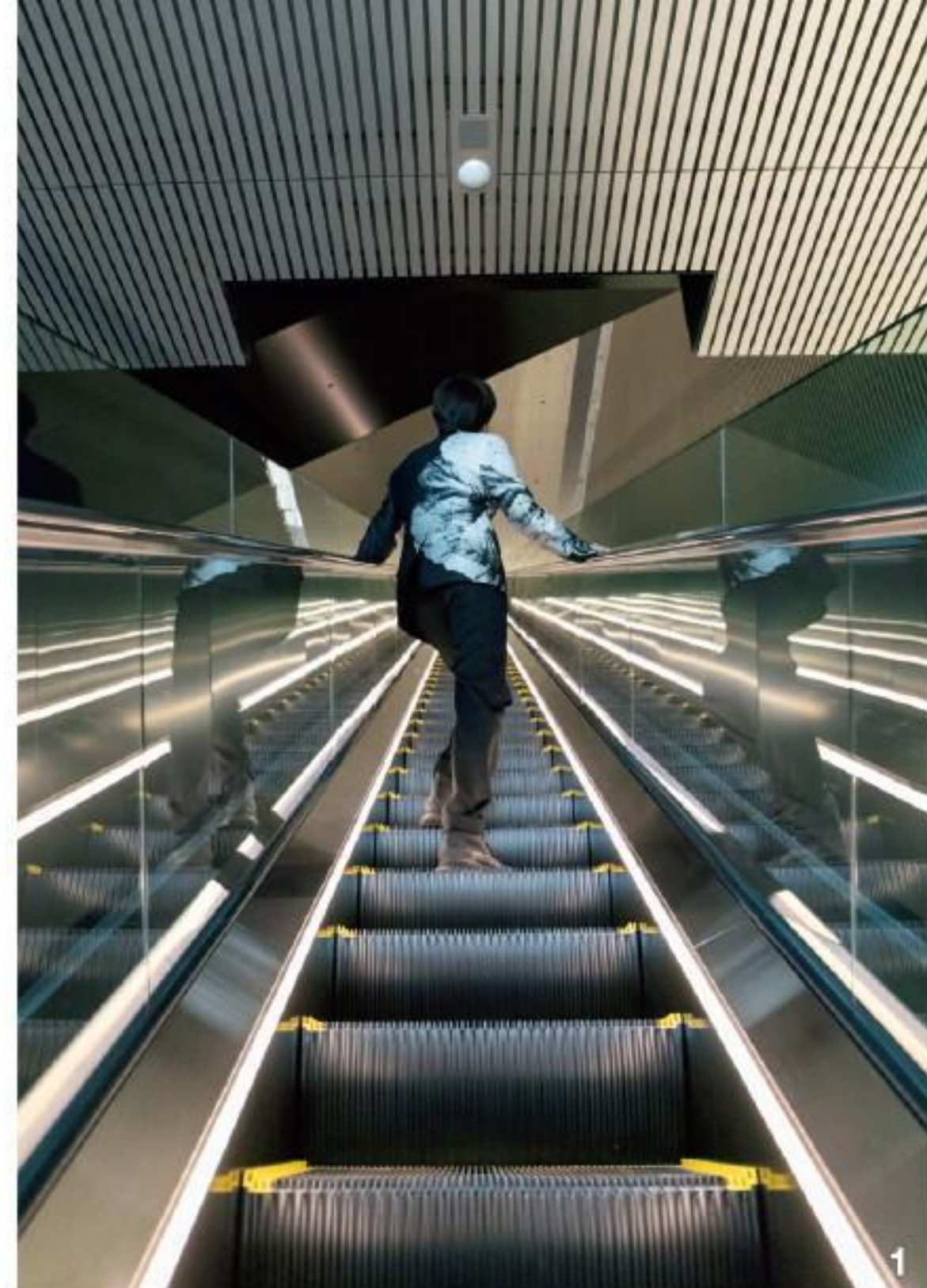
「黒を選んだのは、グレーの建物が建ち並ぶ都市の中で埋没しないため。また、環境への配慮もあります。最近多いガラス張りの建築は、室内を快適に保つため多くのエネルギーを必要とするだけでなく、光の反射によって周囲の温度を上げることが報告されていますから」

黒い箱の中に広がるパッサージュ。

〈大阪中之島美術館〉の始まりは、今から約40年前に遡る。1983年、大阪市制100周年記念事業基本構想の一つとして近代美術館の建設を発表。紆余曲折を経て、2016年に設計コンペが実施され、遠藤さんの案が選ばれた。

設計の核となるのは、フランス語で通路を意味する「パッサージュ」。ここでは「誰もが自由に行き交うことができる、広場のような屋内空間」を意図している。具体的には、1、2階を駅のコンコースのような公共的な場として位置づけ。展示室のある4階は東西、同じく5階は南北を貫くようにパッサージュを配している。5層の吹き抜けを介して、これらがシームレスにつながることで、立体的な「広場」をつくり出しているのだ。

中之島の東西を結ぶ結節点ともいうべき立地から、人々の流れを分断しないことも重要だと遠藤さんは言う。

「建物に〝正面〟をつくらず、1、2階

1 エスカレーターでの移動体験を楽しむ櫻井さん。2 外観をイメージした展示室の椅子は、遠藤さんがデザイン。3 遠藤さんと談笑する櫻井さん。二人が腰かけているベンチをはじめ、共用空間に置かれた家具は藤森泰司がデザインしている。4 4階東側の開口部。5 櫻井さん。

訪れた場所

大阪中之島美術館

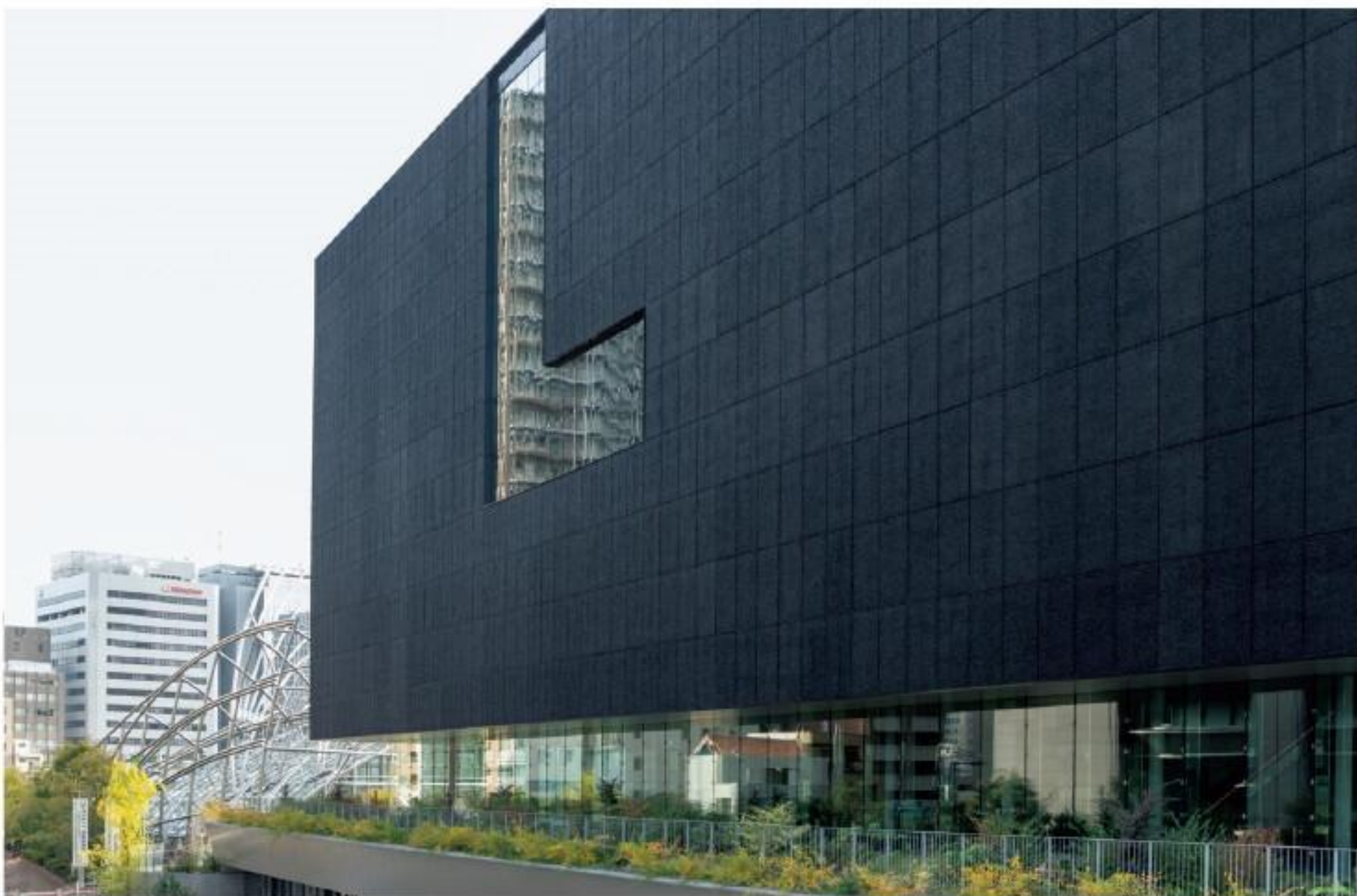
Nakanoshima Museum of Art, Osaka

2021年竣工・2022年開館。設計：遠藤克彦。佐伯祐三やモディリアーニなど、近現代美術を中心に約6,000点を収蔵。●大阪府大阪市北区中之島4—3—1☎06・6479・0550。10時〜17時（最終入場16時30分）。月曜休（祝日の場合は翌平日休）。観覧料は展覧会により異なる。開館記念特別展『モディリアーニ —愛と創作に捧げた35年—』を４月９日から７月18日まで開催。https://nakka-art.jp

設計した人

遠藤克彦

Katsuhiko Endo

1970年神奈川県生まれ。92年武蔵工業大学（現・東京都市大学）工学部建築学科卒業。95年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。97年事務所設立。2007年遠藤克彦建築研究所に組織改編。代表作に〈豊田市自然観察の森ネイチャーセンター〉〈軽井沢千ヶ滝の家〉など。プロポーザルで選ばれた〈茨城県大子町新庁舎〉〈高知県本山町役場新庁舎〉が22年に竣工予定。

東側外観。黒い箱に穿たれた開口部は、パッサージュの断面でもある。L字形のほか四角形も。

に設けた複数の出入り口から、自由にアクセスできるようにしています。中之島の街や人々の営みが内部まで続いているような建築にしたかったんです」

その説明を受け、「実際に多くの人々が訪れて、みんなに愛されるパブリックな空間になっていくのが楽しみです。一つの景色として街に馴染んだ時、美術館の存在がより特別なものになるんでしょうね」と櫻井さんも期待を寄せる。

シンプルな動線が館内を貫く。

複雑な空間構成に対して、美術館へと至る動線はシンプルだ。2階から4階へは、吹き抜けを斜めに横切るエスカレーターでアクセス。2フロアにわたる展示室での鑑賞を終えたら、4階から下り専用のエスカレーターで2階へと下りてくる、いわば一筆書きになっている。いざ、櫻井さんも展示室へ。

「うわぁ、すごく長いエスカレーターですね。上りと下りの2基が交錯している光景も面白かったけど、実際に乗ってみると、より楽しい！　上るにつれて、空間や見える景色が変化して、美術館の世界へとどんどん誘われていくようです」

美術館では、入館した際の高揚感から、アートに接するまでのシークエンス（連続性）の設計が大切だと話す遠藤さん。その仕掛けの一端を担っているのが、パッサージュの天井と壁を覆うプラチナシルバー色のルーバー材だという。

「ルーバーが、自然光や室内照明の影響を受けて、複雑な色相をまとうよう工夫しています。ほんの少しの目線の変化や光の加減で、各面の見え方が刻々と変わっていく様を楽しんでほしいですね」

一方、展示空間はいたってニュートラルだ。合わせて約１４００㎡の面積がある4階には、日本画を展示できる全長60mの展示ケースを設置。壁面が黒一色の展示室もある。約１７００㎡の広さと6mの天井高を持つホワイトキューブの5階は、大規模展から一般的な企画展まで、さまざまな規模の展覧会に対応する。

鑑賞の合間には、パッサージュに設けられた開口から周囲の街並みを見下ろしたり、ヤノベさんのもうひとつの巨大作品に出会ったり。建築家が、ここで目指したのは「アート鑑賞だけにとどまらない都市体験ができる美術館」。その“街づくり”は、今始まったばかりだ。

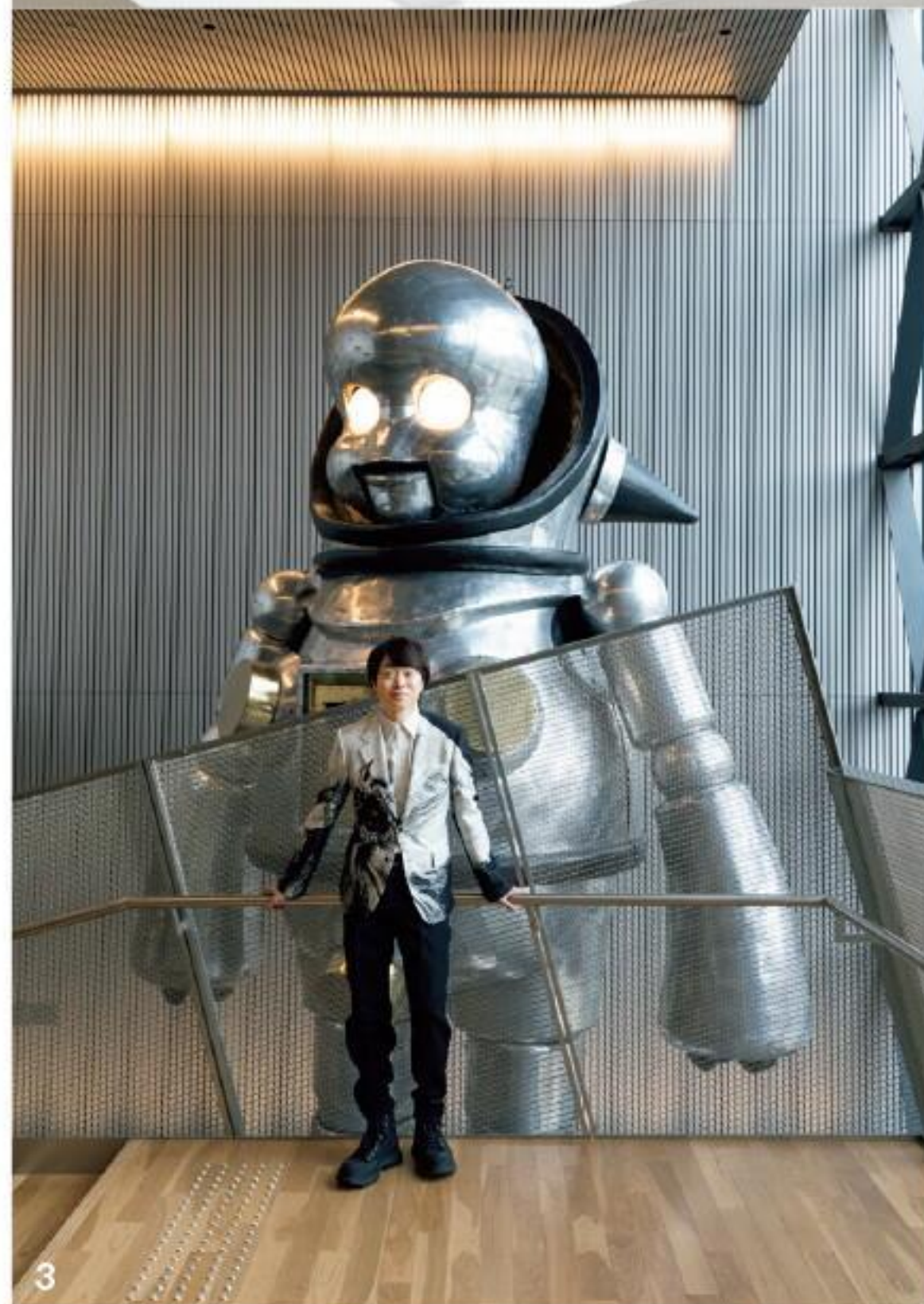
Sho's Report

僕の年とほぼ同じ歳月をかけたプロジェクトにビックリ。

美術館の基本構想が発表される1年前の1982年に僕は生まれているんですよね。それほど長い期間をかけたプロジェクトがあるとは……。長くこの連載をやっていますが、オープン前の美術館を取材したのは今回が初めて。それだけに開館してから、建築がどう変わっていくかが楽しみです。黒い外壁も、巨大な吹き抜けも、それを突っ切るエスカレーターも面白かった。しかし何より驚いたのは、ヤノベさんにお目にかかったこと。てっきり美術館スタッフの方だと思っていたら、まさかのご本人だったのでビックリしました(笑)。

ジャケット572,000円、シャツ118,800円、パンツ117,700円、シューズ99,000円（以上Alexander McQueen／アレキサンダー・マックイーン☎03・5778・0786）。

Discover Architecture Tour

1 コレクション展（現在は会期終了）。アアルト作品など家具の収蔵品も多い。2 同じく倉俣史朗の《ミス・ブランチ》デザイン1988／製造1989。3 ヤノベケンジ《ジャイアント・トらやん》のマネをして記念撮影。4 ヤノベさん。5 アスファルトのような凹凸が表面に見える外壁。

美術館の守り神でもある《SHIP'S CAT (Muse)》に見入る櫻井さん。「黒い美術館と、オレンジ色のスーツを着た猫との鮮やかなコントラストが好きだなぁ」

古今東西

かしゅか商店

店主兼バイヤーの〝Perfume・かしゅかが毎号買い付け。
日本各地の伝統工芸の「粋」を集めたバーチャルショップ。

山口／Yamaguchi

Buying No.48

INKSTONE

【赤間硯】

カカオ色の赤間石で作る硯は、
彫刻のような美しさ。

日常を少し贅沢にするもの。日本の風土が感じられるもの。そんな手仕事を探して全国を巡ってきた、店主・かしゅか。47か所目に訪ねたのは山口県下関市。室町時代に始まったチョコレート色の美しい文房具、「赤間硯（あかますずり）」に出会いました。

CRAFTED IN JAPAN

photo_Keisuke Fukamizu
hair & make-up_Masako Osuga　editor_Masae Wako

室町時代に始まり約600年の歴史を持つ「赤間硯」。今回訪ねたのは、明治29年創業の〈赤間関硯 玉弘堂〉。「子どもの頃に使っていたのは真っ黒な硯でしたが、こんなに柔らかな印象の硯があるんですね」とかしゆか店主。

かしゆか　テクノポップユニットPerfumeのメンバー。シングル「Flow」発売中。初夏にオリジナルニューアルバム発売決定。「ついに47都道府県を一周。商店は続きます。ご贔屓に！」。https://www.perfume-web.jp/

右上・右下／「墨を磨るのは小学校以来。硯の表面がつるつるして気持ちいい！」とかしゆか店主。左／現在では1か所でしか採れない赤間石。硬い層を剥ぐように削る。

47か所目の買い付けは、ずっと前から興味があった〝硯〟。チョコレートのような温かい色と彫りの美しさに惹かれ、山口県の伝統工芸品「赤間硯」の工房を訪ねました。

「硯は墨を磨るための文房具ですが、同時に、墨を磨りながらどんな文字を書こうかと想いを巡らせ、精神を整える、そういう時間を生み出すものでもあるんです」

と話すのは、下関市の工房〈赤間関硯 玉弘堂〉の硯司・堀尾信夫さん。赤間硯は関門海峡沿いの門司や下関で室町時代に始まった手仕事です。材料は、約1億年前に噴火した火山の灰が湖に堆積してできた岩層「赤間石」。硯を彫る職人さん自らが坑内に入り、石を見極めて採掘するのだとか。

「鉄分が多く粘り気があるため、彫刻しやすいのが特徴です」

まずは赤間石の塊を、全長30㎝ほどもある大きな鑿で粗く削ります。鑿の柄を肩に当て、ゴッゴッゴッと上半身で押し出すように力をかけていく。彫るというより、石の層を剥がすように削っている印象です。次に数種類の鑿を使い分け、表面に彫刻を施したり、水を溜める〝海〟と墨を磨る〝陸〟を彫り進めたり。さらに何種類もの砥石とサンドペーパーで磨き上げてようやく完成。ひとつ出来上がるまで10日間以上もかかります。

「修業時代、最初の1年は、石を平らにすることと四角く削ることだけを続けました。それが硯のデッサンなんです。肝心なのは手で削ること。石を鉄板に当ててこすれば簡単に平らになりますが、それではダメ。手で〝平ら〟の感覚を掴んだおかげで、わずか0・3

右／砥石で磨くと、赤みを帯びた赤間石本来の色が際立ってくる。左上／大小の鑿を使い分けて削る。左下／「砥石は粉になるまで大切に使います」と硯司の堀尾信夫さん。

㎜の凹みでもすぐ見抜けます」

そんな堀尾さんが作る硯は、輪郭の柔らかさも魅力のひとつ。定規で引いたような直線ではなく、人の眼で見て気持ちよく感じる線を目指しているそうです。

「石を削って硯にすることは、毎日練習すれば誰でもできる。でも、〝ものづくり〟には、最後のひと磨きまで神経を注ぐ責任と、少しでも納得いかなければゼロから作り直すくらいの自覚が必要です」

穏やかに、でもきっぱり語る表情が印象的でした。今回選んだのも、穏やかでモダンな「瓶硯」。香水瓶を表したデザインです。

「歴史ある工芸ですが、こうでなくちゃという形にとらわれないようにしています。まず自分が楽しんで作ること。ワクワクし続けること。その気持ちは必ずお客さんにも伝わると信じているんです」

瓶硯

作／赤間関硯 玉弘堂 堀尾信夫

右（p.132も）／香水瓶をモチーフにデザインした硯。17×12×2.5㎝。1点ものの硯は300,000円〜。左／赤間石のペーパーウェイト「石錘」 6×6×3㎝ 13,200円。
●あかまがせきすずり ぎょくこうどう／山口県下関市南部町22ー19☎083・222・5310。

No.188

MIRACLE CLOSET

巨匠・谷口吉郎が内装を手がけた京懐石の名店〈新宿 柿傳〉。
新宿駅徒歩1分のビルの中に佇む和風モダンの隠れた傑作には、
大都会であることを忘れてしまうほど静かな時が流れています。

fashion director_Tomoki Sukezane

photo_Junji Hata　hair_hiro TSUKUI (Perle management)
make-up_Rika Matsui (A.K.A.)　model_Jianyi (Image), Miiya (WEST)
editor_Akane Maekawa

新宿 京懐石 柿傳

オーナーと交流があった川端康成の言葉、「大人の楽しめる道草の場所」に着想を得て、1968年に茶事の道場として〈安与ビル〉に開業。川端らの紹介により内装を谷口吉郎が手がける。８階の椅子席ほか、69年に９階の茶室、77年に６階のサロンも設計。三畳半台目の茶室〈一与庵〉（p.138-139）には、腰張りに藍色を添えた谷口らしい研ぎ澄まされた直線美が際立つ。６階〈古今サロン〉（p.136-137）は、亀甲形の照明があしらわれ、茶室を備えたモダンな空間が広がる。今年２月、〈安与ビル〉（設計：明石信道）として国の登録有形文化財に登録。●東京都新宿区新宿3ー37ー11 安与ビル6F-9F☎03・3352・5121。11時〜22時。無休（年末年始・夏期旧盆を除く）。https://www.kakiden.com

スポーティーな要素を取り込んだボッテガ・ヴェネタの「SALON 03」コレクション。テクスチャーの異なる素材が、白や黒のルックに豊かな表情をつくり出す。前見開き／メンズ：コート435,600円、ジャケット338,800円、シャツ121,000円、パンツ161,700円、シューズ99,000円。ウィメンズ：ドレス370,700円、イヤリング185,900円、リング145,200円、バッグ269,500円、シューズ122,100円。右ページ／ブルゾン275,000円、パンツ258,000円。左ページ／コート500,500円、ドレス770,000円、イヤリング129,800円、リング137,500円（以上ボッテガ・ヴェネタ／ボッテガ・ヴェネタ ジャパン☎0120・60・1966）。

mizuiro ind

ノスタルジックな時が流れる〈ミズイロインド〉の佇まい。

軽やかな風が吹くような〈ミズイロインド〉の春夏コレクション。シンプルでありながら、どこか懐かしさを感じさせるスタイルは、建築家・白井晟一が残した住宅と美しいハーモニーを奏でます。

photo_Seishi Shirakawa
styling_Naomi Shimizu hair & make-up_Hiroko Ishikwa
model_Luka (etrenne) editor_Jun Ishida

アトリエNo.7

建築家の白井晟一が1959年に計画した住宅。アーティストの夫婦のために設計され、〈増田夫妻のアトリエ〉という名で発表された。それから61年後、白井の孫である白井原太が改修設計を行い〈アトリエNo.7〉として蘇らせた。現在、継承者を探している。白井晟一建築研究所（アトリエNo.5）https://www.sirai-atelier5.org/

夏らしい爽やかな雰囲気のワンピース。ドレープとふんわりしたシルエットが、軽快なマドラスチェックと共に遊び心を添える。ワンピース16,940円（ミズイロインド／マザーズインダストリー）。

繊細な刺繍が可憐なレースブラウスはスタンドカラーが甘さを引き締める。ストレッチが効いたネイビーのパンツを合わせボーイッシュに。ブラウス16,500円、パンツ12,100円（共にミズイロインド／マザーズインダストリー）。ルームシューズ（スタイリスト私物）。

胸元に配した細かなピンタックが凛としたアクセントを加えるシャツワンピース。身に着ける人のピュアさをそのまま映し出すよう。あえてアクセサリーはつけずシンプルに。ピンタックフレアーロングワンピース16,940円（ミズイロインド／マザーズインダストリー）。

立体的なフォルムを作り出すコクーンシルエットのシャツ。光沢感のあるテンセルデニムがカジュアルすぎず、優美なムードを演出する。シャツ12,980円、パンツ12,980円（共にミズイロインド／マザーズインダストリー）。ルームシューズ（スタイリスト私物）。

●問合せ／マザーズインダストリー☎03・6804・1047

Carl Hansen & Søn

Traditional Japanese Room × Danish Modern Masterpieces

和の名空間に溶け込む、デンマークの名作。

《Yチェア》の名で広く知られる北欧の名作椅子《CH24》。
これらをはじめとするハンス J. ウェグナーの名作ダイニングセットを、
村野藤吾と平田雅哉が手がけた和の空間にコーディネートしました。

photo_Kazuhiro Shiraishi　text_Yoshinao Yamada
styling_Yusuke Takeuchi (Laboratoryy)

Hans J. Wegner
CH337

Hans J. Wegner
CH88P

Hans J. Wegner
CH24

大観荘

Taikanso(1940)
by Togo Murano & Masaya Hirata

もともと中山製鋼所の創業者、中山悦治の別邸として建てられ、その際に村野藤吾が設計に携わったと考えられる。村野は中山の本宅も設計。後年、旅館として拡張した際は平田雅哉が別館を建設した。「大観の間」は現在、宿泊者のみに限定公開されている。●静岡県熱海市林ガ丘町7－1☎0557・81・8137。全37室。1室2名利用で1泊2食付き1名33,150円～(税サ込)。

右／庭園に面した本館1階の特別室が「大観の間」。左／床の間を区切る壁の下部には村野らしくゴシック建築を思わせるアーチを描いた「狆潜り（ちんくぐり）」が見られる。

熱海の街並み、そしてその先に広がる穏やかな海を眺望に持つ老舗旅館〈大観荘〉は、美しい数寄屋建築で知られる。ここにあまたの名作家具の中でも、ひときわ世界で愛される〈カール・ハンセン＆サン〉によるハンス J. ウェグナーのダイニングセットをコーディネートした。その普遍的な佇まいは、和の空間においても美しい調和を奏でる。

〈大観荘〉は1940年、中山製鋼所の創設者である中山悦治の別邸として建てられた。これを改修し、1948年に旅館として開業。中山と懇意であった日本画の巨匠、横山大観がしばしば別邸に宿泊したことから、その名をもらって宿の名とした。大観が愛した部屋は現在、「大観の間」として保存されている。これを設計したのは長らく大阪の数寄屋大工、平田雅哉とされてきた。しかし近年の研究で、そこに建築家の村野藤吾が関わったことも明らかになった。

ウェグナーの家具を置いた「大観の間」の広縁は、小ぶりな敷瓦を敷き詰めた土間のような空間だ。村野はここで土足を前提とした西洋的な空間を想定したのだろう。腰壁を設けて窓の位置も高くしており、椅子に座ると美しい庭を堪能できる。天井に吊られた逆三角錐状のペンダント照明もまた、西洋的な佇まいだ。のちに和風建築でも大いなる活躍を見せる村野が、早くから洋の東西を横断した意識を持っていたことがわかる。そしてウェグナーもまた、西洋と東洋を横断することで名作の数々を生み出した人物だ。

アルネ・ヤコブセンのもとから独立するや、ウェグナーは《チャイナチェア》を発表している。これは中国の明代に生まれた圏椅や曲彔（きょくろく）といった、背中に沿ってカーブを描く背板を持つ椅子に影響を受けた椅子だ。彼はこれを発展させ、アームを支える支柱を当初の6本から4本、そしてさらに2本まで削ぎ落とす。アームを短くして支柱を減らし、背板をY字形にすることで軽量かつモダンな椅子を実現する。こうして生まれた椅子が《Yチェア》の名でよく知られる《CH24》だ。

アームに曲げ木、Y字形に成形合板、他のパーツに無垢材の削り出しという3つの加工技術を巧みに組み合わせ、座面には職人の手作業によるペーパーコードの張り込みを採用。歴史を参照しながら、そこにモダニズムを宿らせるウェグナーの精神は村野に共通するものだ。彼らはともに職人の技術をよく知っていた。ウェグナーは家具職人として修業を修めた上でデザイナーとなった。村野は大小いずれの建築でも細部にこだわり、職人に直接指示を出したことで知られる。くしくもともに長命で、ウェグナーが92歳までにデザインした椅子の数は500脚、村野が93歳までに手がけた建築は300棟を超える。

多くの老舗メーカーは伝統と革新を社是とするが、〈カール・ハンセン＆サン〉も例外ではない。《Yチェア》をはじめとする同社のマスターピース群は、現在も製造工程や素材の見直しとともに環境配慮にも目を向ける。これはウェグナーの揺るぎないデザイン力があってこそ実現されるもの。時を超える名作、そこには揺るぎない思いが宿っている。

ウェグナーの椅子とテーブルを置いた本館1階の「大観の間」広縁。床に敷瓦を用いている。1955年発表の椅子《CH88P》は、木材にスチールを組み合わせミニマルなデザインを実現。82,500円～。両端の伸長板でサイズを拡張することができるテーブル《CH337》は、来客時などに広く使える。386,100円～。代表作の《CH24》は素材違いで様々なバリエーションが用意されており、どんな場所にも馴染む普遍性がある。84,700円～。

Dining Set Campaign 2022

ダイニングテーブルとダイニングチェアをセットで購入するとお得になるキャンペーンを、正規販売店（一部除く）、フラッグシップストア、オンラインショップにて開催中。対象商品など、詳しい内容については実施店舗までお問い合わせください。5月8日まで。

●問合せ／カール・ハンセン＆サン フラッグシップ・ストア東京☎03・5413・5421。https://www.carlhansen.com

〈カリモク家具〉と部屋。

〈マス〉の《シェルフベンチ》は、国産針葉樹の持ち味を生かしたフレキシブルにして潔い家具。履物職人の関塚真司さんの空間に、その姿が映える。

WK Shelf Bench

WK Shelf Bench Short / Long
シェルフベンチ　ショート / ロング

Wataru Kumano
熊野 亘

フィンランドのアアルト大学などで学んだ熊野亘によるデザイン。〈マス〉は国産針葉樹の有効活用に取り組むコレクションで、ヒノキの素材感を巧みに生かしている。《シェルフベンチ》は、さまざまな組み合わせができるように脚部の間隔や形状が工夫された。ロングは幅186cm、ショートは幅108cm。

Vol.2
MAS
マス

photo_Tomohiro Mazawa　text_Takahiro Tsuchida

関塚真司さんは、草履や下駄といった日本の伝統的な履物を作る職人だ。約10年間の修業を経て独立し、京都郊外にオープンさせたのが隣り合う２つのスペース〈履物 関づか〉と〈岩倉 AA〉。〈履物 関づか〉では自身の手で履物を作り、〈岩倉 AA〉は洋服やアートはじめユニークなアイテムを扱うギャラリーとして運営している。自らデザインしたこの空間は、以前は建材置き場だったという建物で、心地よい静けさに包まれている。

今回、ここに置いた〈カリモク家具〉による〈マス〉の《シェルフベンチ》は、ロングサイズの上にショートサイズを重ねた。この家具は、積み重ねた時に安定するように脚部の上端と下端の形状を工夫してあり、ベンチとしても、多様なシェルフとしても使える。そんなフレキシブルさが大きな特徴だ。

この製品のもうひとつの特徴は、主な素材に国産ヒノキの無垢集成材を用いたこと。針葉樹ならではの白木の木目が美しく、その持ち味を生かす整然とした姿をしている。

「無垢の木は、置いたものを引き立てるんです。特に小さいものを余白を取って置くと、とてもきれいに見えます」と関塚さん。家具も大好きだという彼は、店内にある点数の何倍もの量の家具を所有している。明確な素材感を備え、フォルムが本質的で、「もの」としての力を持つデザインが彼の好みであるようだ。そのような個性を組み合わせ、溶け込ませていく感覚も鋭い。

「お客さんの足を測り、使い道を聞き、体を支えるものを作るのが履物の仕事。履物を通してお客さんの生活や人生を共有するんです。家具も体や生活に密着しているものだから、同じような感覚で好きなんです」

履物の修業に打ち込んだ年月を通して、関塚さんは日本のものづくりの感性を自分の中に凝縮するとともに、それ以外のデザインへの興味も爆発的に広がったそうだ。一方、〈マス〉をデザインした熊野亘は、８年間にわたりフィンランドの学校で家具を学んだ。和と洋を超えた感性で創造に臨む姿勢は、彼らの共通点だろう。「素」を感じさせる潔さと深みが、そこから生まれている。

3	2	1
5	4	

1 関塚さんが立っているのが〈岩倉 AA〉で、ガラスで隔てた左側にあるのが〈履物 関づか〉。**2**〈MAS〉の《シェルフベンチ》は脚上部に凹みがあり、脚先の凸部とフィットするので重ねて使える。**3** 意外性のあるセレクトが魅力の〈岩倉 AA〉。丸い照明はマイケル・アナスタシアデスによるもの。**4** あえて天井を低く設えた〈履物 関づか〉。ディスプレイや無垢材のベンチにも審美眼が光る。**5**《シェルフベンチ》はベンチとしても十分な安定感。関塚さんの下駄に似た雰囲気もある。

Shinji Sekizuka

関塚真司　シューズブランドを経て、京都・祇園町の老舗履物店で約10年間にわたり修業。2020年、京都で〈履物 関づか〉〈岩倉 AA〉を開業。職人としての活動と並行して、ギャラリーの運営や空間のデザインを手がける。
https://hakimonosekizuka.com

●問合せ／カリモク家具☎0562・83・1111

JAPANESE-STYLE MODERN HOUSE

photo_Satoshi Nagare
text_Rie Nishikawa

木の特性を生かしたダイナミックな平屋住宅。

140年の歴史を持つ、福島県の〈斉藤工匠店〉。
伝統の手仕事で作り出した新たな和モダンの住宅は
木の特性を知り尽くした大工職人だからこそのカタチです。

ダイニングと緩やかにつながったリビング。
床材は床暖房に対応できる無垢のカーボネイトバーチを使用。ケヤキの梁が美しい吹き抜けから続く、リビングの格子天井が印象的。

〈天空の平屋〉は木造1階建て。機能と意匠を兼ね備えた段屋根が特徴。第15回福島県建築匠賞コンクール匠賞準賞受賞作品。

1 玄関ホールのケヤキの梁は割れも自然の表情として生かしている。**2** 折り上げ天井に間接照明を組み込んだダイナミックな玄関ホール。高さ6mのケヤキを大黒柱に使用。**3** 吹き抜けの柔らかな光が落ちるダイニングキッチン。食器棚を兼ねたカウンターはキッチンと意匠を合わせた職人の手づくり。**4** 和室の畳は縁なしでシンプルに。扉もオリジナルで製作。

Information

斉藤工匠店

1877年（明治10年）に福島県二本松市で創業。神社仏閣をはじめ、住宅建築を主に手がける。6名の専属大工職人が在籍し、代表自ら手を動かし、受け継がれてきた伝統工法を生かした特徴ある建物づくりを行っている。https://saitocoshoten.co.jp

個性の異なる木の特性を見極めて加工する伝統技法「手刻み」にこだわった家づくりをするのが、福島県を拠点とする〈斉藤工匠店〉。材木1本1本と向き合って、〝木の目〟を読み、墨で印をつけてノコギリやカンナ、ノミなどを駆使して手加工で仕上げていく。そんな木材がふんだんに使われた住宅が〈天空の平屋〉だ。

福島の山麓、自然に囲まれた避暑地に建つ住宅は当初、純和風のプランであったが、徐々に和モダンへと仕上げられたという。

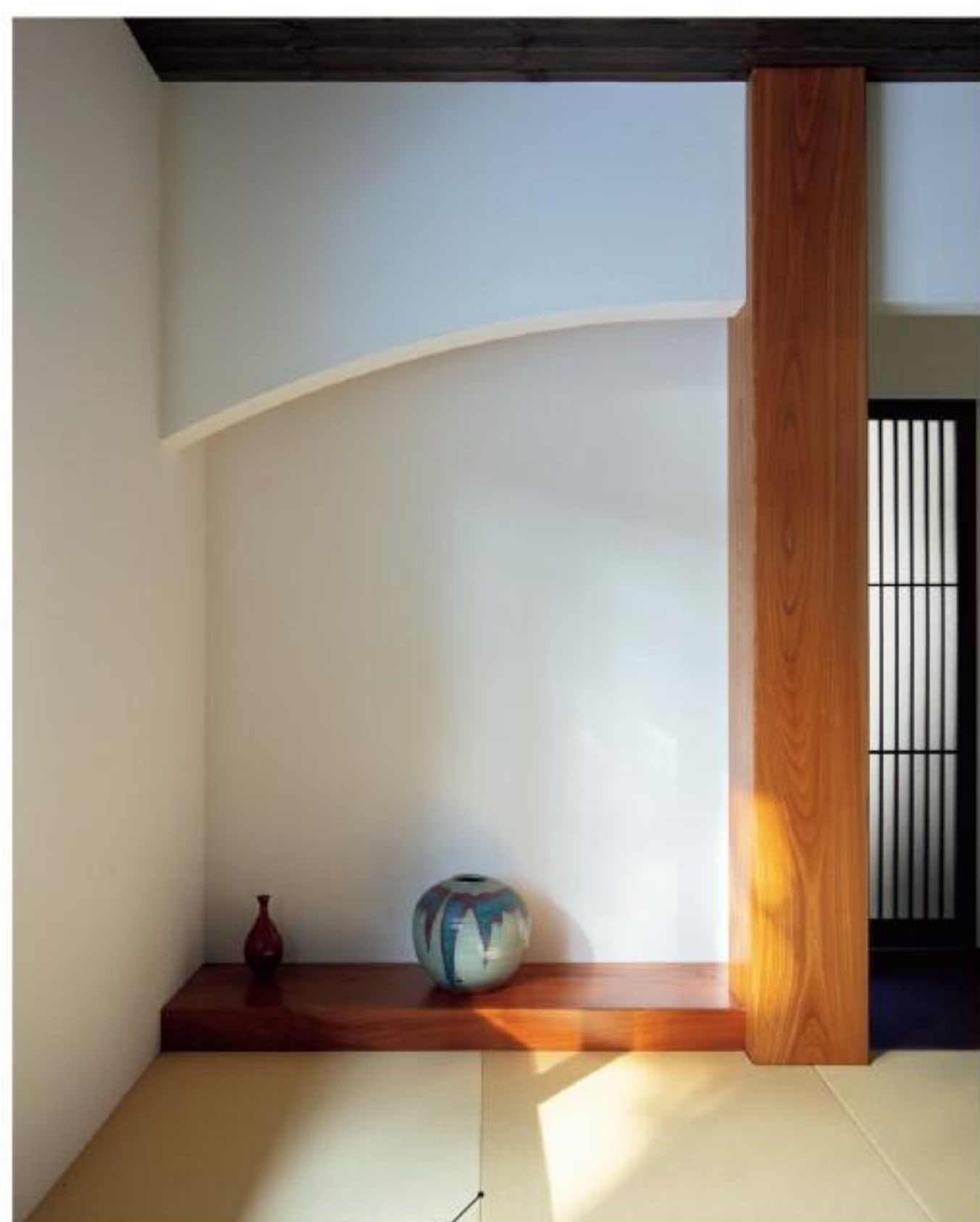
「玄関ホールを抜けたら廊下があって、両サイドに建屋がある和風住宅の基本は変えていません。現代の暮らしに合わせていくと和モダンが答えのひとつであったと思います」というのは〈斉藤工匠店〉の5代目、齋藤守平さん。

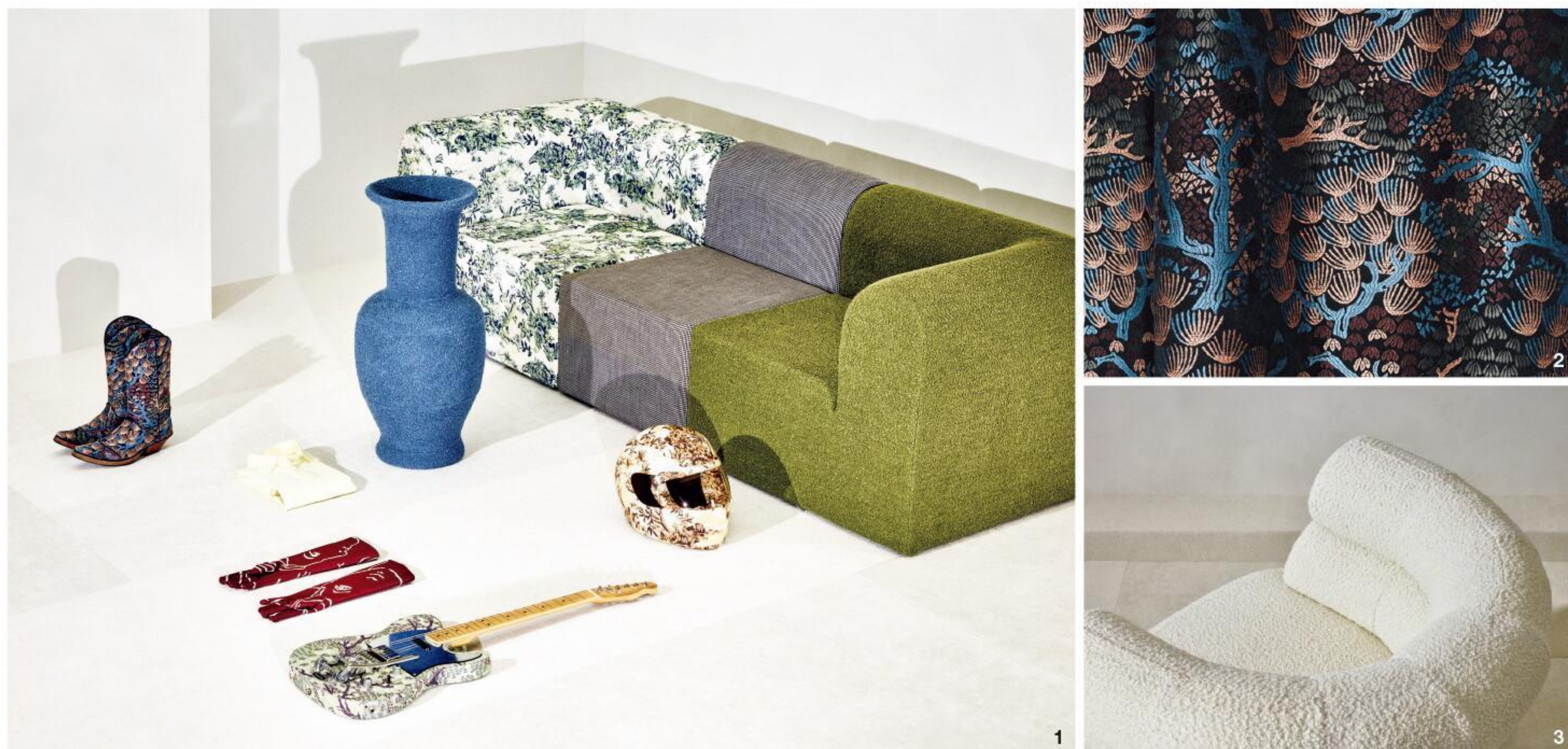
ケヤキ材を吹き抜けの梁や柱に使い、メインの構造材は地松を丁寧に加工した。家具や照明、建具など、できるところはほとんど手づくりで製作。様々な木材や素材が使われているものの重い印象にならず、段屋根からの採光で、室内は柔らかな光に包まれている。

「障子や土壁といった典型的な和風デザインから、余計な線やテクスチャーを除いていき、今の形になりました。私にとってのモダンとは、近代建築の思想が表現されたル・コルビュジエのサヴォア邸。機能的でありながらシンプルとも違っていて、無駄がないとでもいうのでしょうか」

選んだ素材や意匠にはそれぞれ意味がある。さらに長く快適に暮らせる住宅をつくることは、齋藤さんのポリシーでもある。

「手加工で形成された木材は経年変化に強く、メンテナンスの手間がかかりません。同じように窓枠とクロスの収め方や外壁材の防水処理の仕方なども工夫しました」

素材を最大限に生かしきる、歴史に裏づけられた確かな技術があるからこそできる、家づくりがここにはあるのだ。

テキスタイルブランド〈サコ〉から新作コレクションが誕生。

カーテンから家具の張り地まで、部屋の印象に大きく作用するテキスタイル。ドイツの老舗ブランドから、住み手のパーソナリティに寄り添い、心に語りかけるような新作が生まれた。

1 ソファ、ギター、ブーツなどが新作コレクションをまとった〈サコ〉のキャンペーンビジュアル。パーソナルな趣味嗜好にも柔軟に対応できることを表現している。**2** 刺繍を施したようなジャカード織りのカーテンテキスタイル《ミラリ》。着物に着想を得たという。**3** ブークレ糸で織られた柔らかな触感が特徴の《エル》で張ったアイリーン・グレイの名作椅子《ビベンダム》。

SAHCO

BRAND STORY 1831年にドイツ南部のニュルンベルクで設立。2018年にデンマークを拠点とするテキスタイルメーカー〈クヴァドラ〉のグループブランドとなり、テキスタイルの新しい可能性を提案している。

例えば椅子の張り地、ベッドシーツ、そしてカーテン。空間の至る所を占める「布」を変えると、部屋の印象はぐっと変わる。手近な模様替えのきっかけに、ドイツ発祥の老舗テキスタイルブランド〈サコ〉の新作を提案したい。

今年1月に発表された新作の「イヴォーク」コレクションは、カーテン7種、インテリア4種の全11種からなるテキスタイルコレクション。自然界の有機的なフォルム、陰影などからインスパイアされ、レモングラスやサクラピンクといったフレッシュな色や、モスグリーン、ゴールデンオリーブといったアーシーな色彩でカラーパレットを構成した。デザインディレクターのアナ・ヴィルヘルミン・エベセンいわく「目と心を自由に解き放ち、それぞれの個性や生活を反映した空間作りの一助となります」。

パーソナリティに寄り添い、見る人の感情を高まらせてくれる、布選びの新たな選択肢が誕生した。

●問合せ/クヴァドラ ジャパン☎03・6455・4155

5 exotic fragrance

3 goblet in ceramic

1 furniture with fashion

6 fantastic knit

©Disney

4 crystal architecture

2 high-spec cardboard box

5.
野性的な美しさを秘めた濃厚な香り。

〈アスティエ・ド・ヴィラット〉がブランド初のパルファン《ツーソン》を発表。アメリカ大西部の砂漠地帯をイメージ。イモーテルやラブダナムの樹脂の香りが溶け合ったエキゾチックなスイートアンバーのアロマがエレガントなガラスのボトルに詰められている。100㎖ 29,700円（Astier de Villatte 伊勢丹新宿店☎03・3352・1111）。

6.
〈ステラ マッカートニー〉が魅せるファンタジー。

ディズニー映画『ファンタジア』からインスピレーションを受けた〈ステラ マッカートニー〉の幻想的なニット。ファッションとファンタジーを遊び心たっぷりに融合させたコラボアイテムが伊勢丹新宿店のポップアップを皮切りに登場。ニット163,900円（ステラ マッカートニー カスタマーサービス☎03・4579・6139）。

3.
30年を経て実現した石本藤雄の器。

石本藤雄が〈アラビア〉のアートデパートメント時代に生んだアイデアを元に、30年の時を経て製品化された〈ムスタキビ〉の《ONNEA》。故郷である愛媛県の砥部で製作されたゴブレットや小鉢は、形や色などそれぞれ個性を持ちつつも、組み合わせた時の一体感も美しい。全20種展開。4,180円〜（ムスタキビ☎089・993・7497）。

4.
建築の持つ創造力をアートピースに。

2014年からスタートした〈ラリック〉の《クリスタル アーキテクチャ コレクション》。今回発売の限定アートピース《タンドリラ》はフランス人建築家、エリザベート・ド・ポルザンパルクとコラボレーション。「繋がりの建築」を指針とする氏らしい軽快で伸びやかなフォルムだ。556,600円〜（ラリックジャパン☎0120・505・220）。

1.
世界初！あの名作チェアがマルチカラーに。

15周年を迎えた〈ジャーナル スタンダード ファニチャー〉が、ミリタリーアイテムをイメージしたカラーを施した〈トン〉の名作《アームチェア no.30》を別注。マルチカラーは世界初。Pコート、ローバーチェアから着想したカラーの２種を展開。107,800円（ジャーナル スタンダード ファニチャー 渋谷店☎03・5728・5355）。

2.
水も入れられる！ハイスペックなダンボール箱。

日本初の機能性ダンボールを開発した〈アイザック〉と〈シンク オブ シングス〉の協働で生まれた《カートン2.0》。冷蔵品などの運搬に使用する防湿、保冷機能を持つ特殊ダンボールを隙間ない折り込みで水が漏れない構造に。機能を生かした様々な使い方を発見したい。2,900円（シンク オブ シングス☎03・6447・1113）。

 photo_Keiko Nakajima　styling & text_Tomomi Nagayama, Yumi Nakata, Kohta Kawai, Yusuke Takeuchi (Laboratoryy)

11.
たべる・はたらく・くつろぐ・あそぶ。

〈アクタス〉と〈カンディハウス〉が共同し、倉本仁がデザインを手がけた《フォー》は、昨今のニーズを満たすマルチタスクな椅子だ。〈コクヨ〉の協力による道具として妥協のない機能性とインテリアにも合う美しさを併せ持ち、暮らしに寄り添う普遍的な魅力を宿している。209,000円〜（アクタス☎03・5269・3207）。

12.
１本で何役も兼ね備える新しいカトラリー。

〈クリストフル〉の新境地を見る《アンフィニ》は、現代の求めるデザイン性とカジュアルさを追求した。１本でも多用途に使えるサイズと形状が普段使いに最適。シンプルな中にアクセントとなる持ち手の稜線が指先に心地よく馴染む。ラージユニバーサルスプーン15,400円〜など（クリストフル 青山本店☎03・3499・5031）。

9.
〈ライカ〉の哲学を凝縮した腕時計。

ライカ初の腕時計〈ライカWatch〉から《ライカL1》と《ライカL2》の２機種が登場。いずれも機械式で新開発のムーブメントとプッシュ式のリューズを搭載。各部のデザインは過去のライカ製品から着想を得ている。カメラ同様に本質にこだわった高性能な製品だ。《ライカL1》1,298,000円（ライカ銀座店☎03・6215・7070）。

10.
世界の丹下健三を堪能できるTシャツ。

日本が誇る巨匠・丹下健三、そのDNAを受け継ぐ息子・丹下憲孝と〈グラニフ〉のコラボアイテムが登場。丹下都市建築設計のロゴである「TANGE」の文字をコラージュしたデザインの中に広島平和記念資料館、東京計画1960、国立代々木競技場などが当てはめられている。Tシャツ2,500円（グラニフ https://www.graniph.com）。

7.
鉄骨梁をイメージさせるキャンドルホルダー。

〈ストリング ファニチャー〉から、キャンドルホルダーが新たに登場。スウェーデン国立博物館の大規模改修プロジェクトのためにTAFスタジオがデザインした《ミュージアム》シリーズをさらに発展させた。グリーン、ホワイト、ダークブラウンの３色展開。W13×D15×H40cm 17,270円（ストリング ファニチャー☎03・6427・9362）。

8.
河原シンスケが描くウサギたち。

2020年冬から始まった〈ピエール アルディ〉と河原シンスケのコラボレーション。レザーに施されたモノクロな世界観にアイコニックなウサギがプリントされている。取り外し可能なベルトも付いておりバッグとしてもポーチとしても使用できる。右／バッグ67,100円、左／バッグ75,900円（ピエール アルディ 東京☎03・6712・6809）。

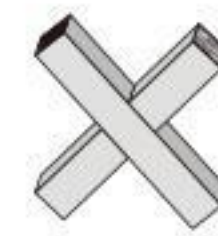
11 from work to dining

9 Leica style

7 rational structure

12 vitality of food

10 TANGE T-shirts

8 monochrome rabbits

17 U.S.NAVY

15 patchwork cushion

13 elegant and casual

18 graphical art

16 BATMAN × Lanvin

14 80's design lamp

17.
ギャザーが美しい〈ハイク〉のシャツ。

ボリュームのある袖が特徴的なシャツは〈ハイク〉の新作。U.S.NAVYのシャンブレーシャツからインスピレーションを得ており5オンスのシャンブレーが使用されている。素材の軽さやバック部のギャザーなど着心地の良さを追求したデザインは春から夏にかけて重宝できる一着だ。26,400円（ボウルズ☎03・3719・1239）。

18.
〈ダネーゼ〉のアイコン的グラフィック。

エンツォ・マーリが手がけた〈ダネーゼ〉のカードゲーム《Gioco delle Favole》。その中だけに存在していた動物３種がグラフィックアートシリーズ《La Serie della Natura》として新たにポスター化された。写真の《２羽のガチョウ》の他に子羊と狐がラインナップする。39,600円（クワノトレーディング☎03・6661・7964）。

15.
ポエティックなクッションカバー。

フランスを拠点とするデザインスタジオ〈パンゲア〉による、〈ザ・コンランショップ〉限定のクッションカバーが登場。夜の鳥を意味する《オワゾドゥニュイ》は２羽の鳥が寄り添う柄がパッチワークで表現されている。一つあるだけで部屋が春らしく華やぎそうだ。50×50cm 33,000円（ザ・コンランショップ☎03・5322・6600）。

16.
アメコミ『バットマン』が華麗に参上。

〈ランバン〉の洗練されたアイテムに『バットマン』のコミック調のイラストが描かれた2022年春夏コレクション。今にも飛び出してきそうなバットモービルがデザインされたボストンバッグのほか、様々なピースに落とし込まれている。カジュアルになりすぎない絶妙なバランスに注目。326,700円（コロネット☎03・5216・6518）。

13.
日本初、〈アライア〉の直営店がオープン。

エレガントなフォルムでありながらカジュアルさを併せ持った〈アライア〉のバブーシュ。用途に合わせて付け替えられるアンクル部分のベルトも付属している。日本初の直営店がGINZA SIXに４月29日にオープン予定。オープン限定でバブーシュのほかバッグも発売予定。129,800円（リシュモン ジャパン☎03・4461・8340）。

14.
ポストモダンのリバイバル!? ポップな照明。

メンフィスの一人であるジョージ・ソーデンによる新たなブランド〈ソーデンライト〉が登場。《ポータブルランプ》の他にペンダントランプなども展開予定。そのどれもに優しく光を透過させるシリコン製のシェードが用いられ、カラフルで楽しげなピースが揃う。9,570円（マーケット https://maarket.jp）。

デザイン狩人

長山智美

No.164

獲物

〈Make History〉の メモリアルアイテム。

ながやまともみ インテリアスタイリスト。すてきエピソードが生まれがちなこの季節。春物のお洋服をお買い物してみましたの。長〜い冬眠生活を終えてワタクシにもそろそろ春の訪れてのがあっても良き頃かと存じます♡

1_Little Quote Jar

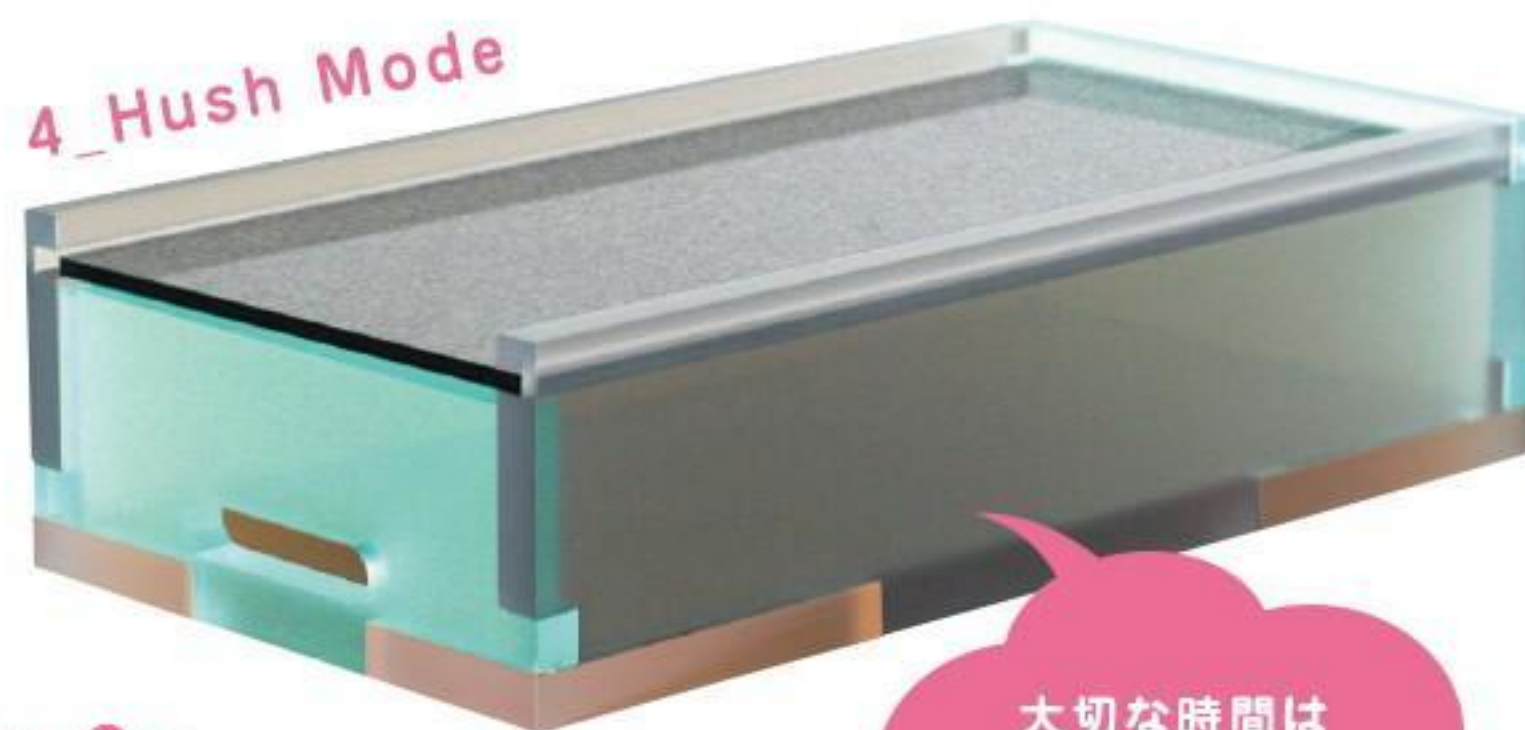
ウォーホルアートの進化版☆

2_Time Capsule

3_Growth Chart

4_Hush Mode

大切な時間はデジタルデトックス。

5_Treasure Tin

6_Time Capsule Ornament

「歴史を作ろう！」がコンセプト。オランダ発の〈メイク・ヒストリー〉。**1** 残しておきたい言葉をメモに書いて詰め込み、未来の自分へと残せます言葉の貯金箱。3,740円。**2** 時空を超えて思い出の品々をストレージ。6,050円。**3** お子さまの日々の成長を保存できますアナログ記録メディア。4,125円。**4** スマートフォンを収納することで大切な人との大切な時間を確保できますデジタルデトックスボックス。8,800円。**5** 小さくても大切なモノを収めるための宝箱。各1,155円。**6** 願い事を書いたメモを入れて吊してデコれますガラスのオーナメント型タイムカプセル。2,640円（以上CAST JAPAN☎03・5835・1943）。

スイートメモリー☆

アンディ・ウォーホルは私的な書簡や新聞の切り抜きや小物など、生涯で600点余りに日付を書き込んで段ボールに詰め込み、それを「タイムカプセル」と呼んでましたとか。彼のそのよな有名エピソードからインスピレーションを得てファーストプロダクトが完成しましたていう〈メイク・ヒストリー〉。「歴史を作ろう！」をキーワードにオランダの女性プロデューサーが立ち上げました歴史メイキンググッズのブランドでございます。日々の何げないアレコレやこまごまとしたモノたちをプレシャスな歴史に変えるコトができちゃいます魔法のよなツールたちが勢揃い。第1弾の《タイムカプセル》に続き、第2弾《言葉の貯金箱》、第3弾《グロース・チャート》と身近な思い出をストレージできる画期的アイテムを次々とリリースし続け、先ごろついに最新作の第6弾《ハッシュ・モード》を発表。いずれもが基本アナログ方式。自分だけのオリジナルなカタチで残された思い出はそれゆえに愛着もひとしおかと存じます。春爛漫のこの季節。お別れや出会いや新しいスタートや、残しておきたい様々なエピソードを大切な宝物のよにストレージ。そして時々は取り出して眺めつつスイートな気分に浸ってみるのはいかがでしょ？

photo_Kayoko Aoki

右／奥から鰤のハラス、ホタルイカのなめろう、白魚（写真は19,800円のおまかせコースの一例）。左／しびまぐろのふきおろし。マグロの幼魚を使った一品。

レストラン予報 *#101*

RESTAURANT FORECAST

〝坂裏〟の路地で鮨職人の技が輝きを放つでしょう。

レストラン予報士
小寺慶子

こでらけいこ　肉を糧に生きる肉食系ライターとして雑誌やWebに執筆。趣味はひとり焼肉と食べ物回文を考えること。「よーく、たい焼き焼いた。食うよ！」（甘味好き）

〝鮨は好み〟ではあるけれど、実直な仕事を貫く魅力的な職人がいる店は、やはり多くの人の心を掴むものだ。

良店ひしめく神楽坂は、いま東京で最も勢いのある街のひとつ。2月に〝坂裏〟の路地にオープンした〈一宇〉は、鮨好きのあいだで早くも、刮目すべき一軒として話題を集めている。

店主の濱野紘一さんは〈小十〉や〈菊乃井〉など名だたる日本料理店で修業を積み、熊本の〈鮨 仙八〉で7年働いたのちに独立。物腰は柔らかいが、一本筋の通った人柄は一品料理が5品前後、握りが13貫登場するコースにも見て取れる。まずは檜がふわりと香る食前酒で乾杯。そのあとに続く季節の料理は、旨みをベースに酸味や苦みなどを丁寧に重ねた逸品揃いで、椀物、茶碗蒸しの出汁の深い味わいに口福のため息が漏れる。赤酢2種に梅酢をブレンドしたシャリを使う握りは江戸前の仕事を施した魚の風味がより引き立ち、最後は遊び心をしのばせたデザートも。華美ではないが、食べ手の心を穿つ鮨店に未知の可能性を感じる。

オープンは2月15日。清々しい空気に心身が研ぎ澄まされるようなカウンターのみの空間。福岡県〈日月窯〉の福村龍太など、親交の深い若手作家の器も料理の美しさをいっそう引き立てる。●東京都新宿区神楽坂2－22☎03・6280・7047。18時からの一斉スタート。不定休。

神楽坂
一宇
いちう

■予算：1人22,000円～
19,800円のおまかせコース1種のみ。日本酒はメニューにないものも多数。1,000円～（1合）。

■予約：ぜひ、猛急に!
基本的にはワンオペ営業で現状もすでに予約が取りづらいが、今後はますます人気が高まりそう。

■ドレスコード：カジュアルシック
神楽坂らしいしっとりとした大人のコーデと振る舞いを。〝香りもの〟は避けるのがマナー。

メルディアグループ
三栄建築設計住宅設計競技2021｜入賞決定｜

テーマ

「松原 住宅計画」

都心に住まう
新たな価値創造の提案

【審査総評】
この設計競技の最大の特徴は、実際の住宅建設予定地を対象としている点にある。また、A部門の「実施設計部門」においては、最優秀案は建設と販売を前提としており、若手建築家にとっては自身の建築作品を実現できる絶好のチャンスとなる。一方で、主催者である三栄建築設計にとっては、斬新なアイディアとともに販売を達成しなければならない大きなチャレンジでもある。今回の対象地である世田谷区松原の狭小敷地は、角地とはいえ、2方向の道路からの斜線制限がかかった難しい敷地であった。難しい敷地だったからこそ、知恵が凝縮されたヴァリエーションある設計解に通じたといえるのかもしれない。最終選考に残った6案はどれも、難しい条件を逆手に取った特徴ある提案だった。B部門である「学生アイディア部門」も斬新な建築提案よって、プロフェショナル対象のA部門に決して負けない、インパクトある提案が目立った。

審査委員長
木下 庸子 建築家

【審査総評】
大変盛り上がった審査会だった。実際に設計し建築する設計競技のため、提案者それぞれが普段どのような視点やアプローチで設計しているかビシビシ伝わってきて、審査側が試されているような緊張感があった。審査には、最優秀作品を共に建築する三栄建築設計のメンバーもおり、どこまでギリギリ可能で、どこから難しいかの紙一重のところを狙って議論し、野心的でありながら冷静さを持続させる時間だった。最優秀賞の「松原ハウス」は、審査員全てが推すポイントを持つ意欲作で、建築の建ち方と立体的な空間体験の双方から評価された。その他の入賞作も、心を捕まれる切れ味を持つ案ばかりであったが、同時に設計段階やその後の住み方に不確定さを孕んでおり、その不確定さを面白がり、設計段階でどう上手くバランスしていくかが、審査の時間内では議論し尽くせなかった。ただここで提案された視点や設計は、未来に向け今後も議論し続ける価値あるものであった。

審査委員
西田 司 建築家

応募登録・作品締切
2021年8月2日（月）～10月29日（金）

A部門（実施設計部門）	登録件数 169件	作品応募 67点
B部門（学生アイデア部門）	登録件数 121件	作品応募 51点

審査委員

審査委員長
木下 庸子 建築家・工学院大学教授

審査委員
西田 司 建築家・東京理科大学教授

審査委員
宮本 宜一 （株）三栄建築設計 取締役
並木 昭久 （株）三栄建築設計 執行役員設計本部長
山田 麻子 （株）三栄建築設計 デザイン研究開発室

賞金

部門	賞	賞金
A部門（実施設計部門）	最優秀賞（1点）	100万円
	審査委員賞（2点）	各30万円
	佳作（3点）	各10万円
B部門（学生アイデア部門）	最優秀賞（1点）	30万円
	審査委員賞（2点）	各10万円
	佳作（2点）	各 5万円
	選外佳作（5点）	

A部門（実施設計部門）

最優秀賞

『松原ハウス』－暮らしがまちににじみ出し、暮らしを豊かにするランドスケープ－
桐 圭佑 KIRI ARCHITECTS

審査委員賞（木下賞）

『都市型キャンプ式住居』
井上 亮　吉村 明 Inoue Yoshimura studio株式会社

審査委員賞（西田賞）

『都市に浮かぶ』－小さな個が都市へとつながる家－
山田 紗子　鈴木 心　福田 海武　中村 裕太　近藤 暉人
一級建築士事務所 合同会社山田紗子建築設計事務所

佳　作

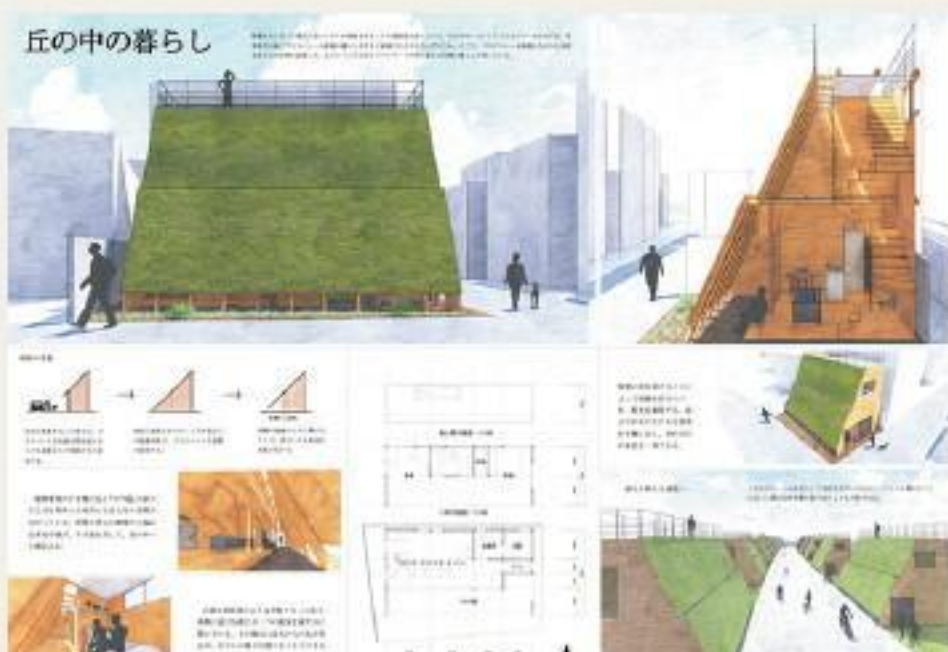
『マドベハウス』　青木 大輔 NOTE　杉山 由香 タテモノトカ

『営みの多重奏』　宮本 裕也　留目 知明　三浦 寛滋 マ·アーキテクツ

『広くて明るい部屋』　井上 岳　大村 高広　齋藤 直紀　棗田 久美子　赤塚 健 GROUP

B部門（学生アイデア部門）

最優秀賞『窓辺の詩学』
大久保 尚人 芝浦工業大学大学院

審査委員賞（木下賞）『街の棲み､街と暮らす家』
山本 充　芝氏 大輝　濱野 颯良 岡山県立大学

審査委員賞（西田賞）『丘の中の暮らし』
佐藤 直哉　早稲田 誠也　萩尾 匠 福岡大学

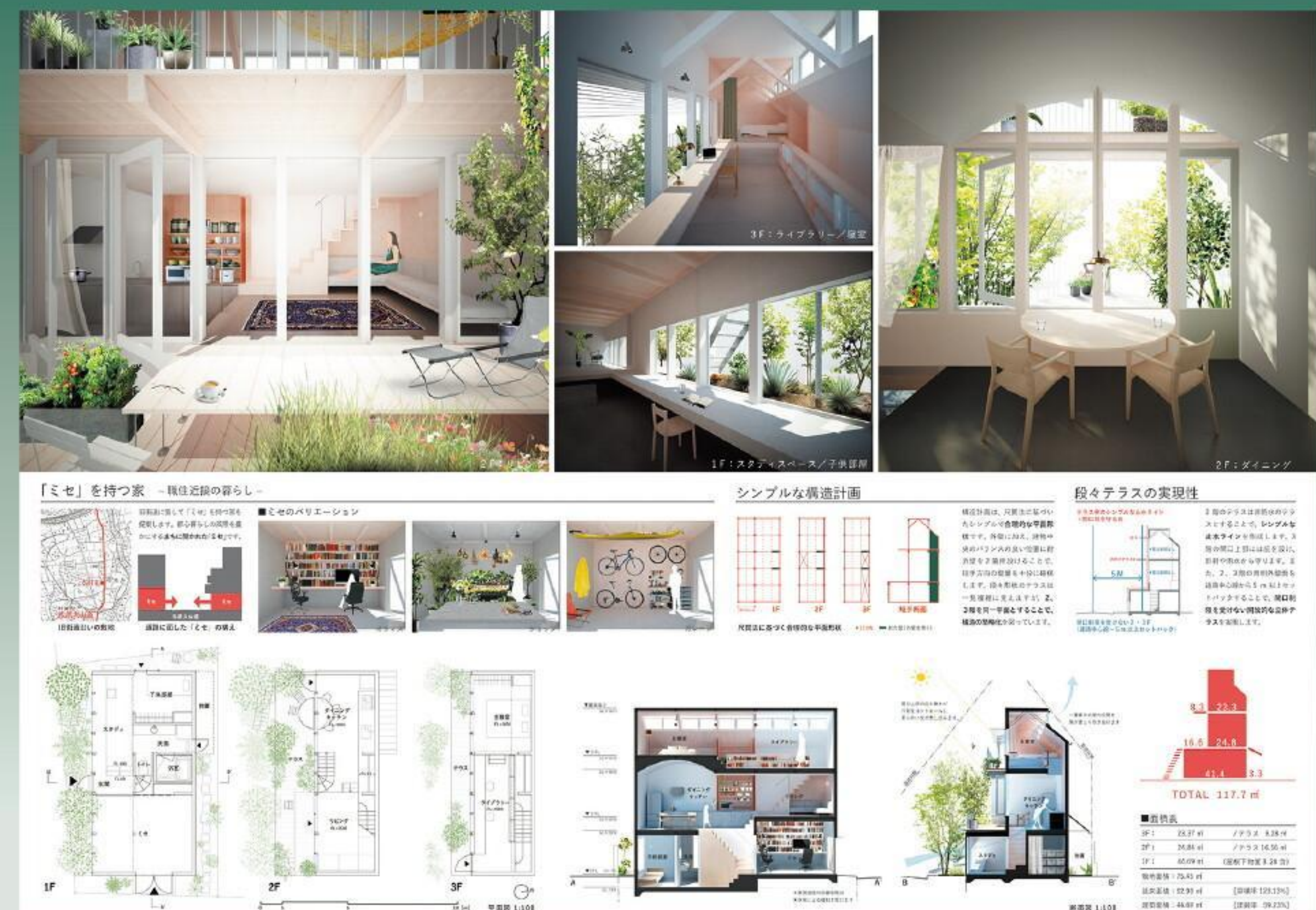
佳作『太陽と土と住まい』
棚田 悠介 東京電機大学

佳作『音色を包む雲の様～』
高島田 礼 工学院大学

B部門（学生アイデア部門）『選外佳作』
『コの時間を大切に』乾 翔太 京都大学 ／『都市と距離を測ってみる』石井 健成 工学院大学大学院・阿部 泰征　久芳萌々花　黒澤 遼平　吉村 理子 工学院大学 ／『都市に懸け造る』深谷 亮太　岩下 隆平 東京工業大学 ／『スキマに宿る生活』豊田 悠人 芝浦工業大学 ／『階段から考えるいえづくり』唐 韜 京都芸術大学大学院

Design Your Life
MELDIA GROUP 三栄建築設計

主催：株式会社 三栄建築設計　後援：一般社団法人 日本建築士事務所協会連合会　事務局：株式会社 建報社

詳しい情報はホームページ
➡ www.kenchiku.co.jp/sanei/

live wise, be happy!

Hanako

雑誌 [ハナコ] 5月号 No.1207 3月28日（月）発売! 特別定価850円

オフィシャルウェブサイト「Hanako.tokyo」好評更新中!

第2特集

お気に入りを探そう

春の器レッスン

Cover Story

中島健人

（ Sexy Zone ）

もっと知りたい！を叶える、知的ライフスタイルマガジン

5

MAY 2022

No.1207

特別定価 ¥850

海外から、地方から。あの店が銀座を選んだ理由。

プリン、カヌレ、ザッハトルテ、定番スイーツが大銀座で進化中。

大切な人に贈りたい、大銀座手土産手帖2022。

今、注目度ナンバーワン! 日本橋・八重洲お散歩ガイド。

...and more!!

古きも新しきも、一流のワクワクが揃う街。

大銀座こそナンバーワン!

Hanako_magazine　hanako_magazine　hanakomagazine　マガジンハウス

a wall newspaper

Casa BRUTUS　MAY 2022

安藤忠雄が設計監修。任天堂ゆかりの宿〈丸福樓〉を甲斐みのりが訪ねました。

かいみのり　文筆家。旅、散歩、手みやげ、クラシック建築、雑貨や暮らしなどを主な題材に執筆。最新刊は『歩いて、食べる 京都のおいしい名建築さんぽ』（エクスナレッジ）。

タイル、大理石の壁、照明などが、竣工当時のまま残されているホテルのエントランス。サギのオブジェは、リノベーションを行う際にはがした壁紙を利用して作られている。

内装や器も見どころ

料理家・細川亜衣が手がけるレストラン。

・Food・

併設のレストラン〈carta.〉は料理、空間、器をすべて細川亜衣が監修。ディナーと朝食をここで。**1** エスカベッシュ。**2** 馬肉と鯛のカルパッチョ。**3** ビーフシチュー。

1

2

3

最寄りは京阪電鉄・七条駅。鴨川と高瀬川の間に位置する鍵屋町は、昔ながらの町家や商店建築が残り、ゆったりとした時が流れる。そこに1930年に建てられたのが、1889年に花札やかるたの製造を始め、世界的ゲームメーカーへと発展を遂げた任天堂の本社社屋。正面通りから北に向かって3棟が連なり、それぞれ、事務所棟、創業家である山内家の住居棟、倉庫棟として使用されていた。

そこかしこにアールデコ調の装飾が施された鉄筋コンクリート4階建てのビルを設計したのは、京都に建築事務所を構えていた、増岡熊三・田中義光。サンドベージュのタイルを張り巡らせた外壁には、ところどころに幾何学模様の煉瓦や石材が。館内にも大理石やカラフルなタイルが贅沢に用いられ、格子窓のダークグリーンが空間全体を引き締めている。

任天堂の創業家である山内家が大切に守り続けてきた歴史的建物が、リノベーションを経て全18室の高級ホテルへと生まれ変わり、2022年4月に開業を迎えた。〈丸福樓〉という名は、山内家の屋号「丸福」に由来する。プロデュースを手がけるのは、神戸〈オリエンタルホテル〉や奈良〈菊水楼〉を運営する〈Plan・Do・See〉。既存棟2棟はオリジナルのディテールを蘇らせ、新棟は建築家・安藤忠雄により、コンクリート造りの新たな建物が誕生した。室内の調度品は部屋ごとに趣が異なり、新旧のデザインが過去から未来への物語を携えて重なり合う。既存棟と新棟が融合した「丸福樓スイート」のテラスからは、清水寺など京都の街並みを一望できる。宿泊プランはオールインクルーシブ。レシピ・内装・器・植栽に至るまで、料理家・細川亜衣が監修するレストラン〈carta.〉やラウンジで、京都の旬の食材を使った夕朝食、グラタンやうどんなどの軽食が味わえるのも心嬉しい。

ARCHITECTURE

旧山内任天堂社屋の洋館がホテルに生まれ変わりました。

京都・七条に佇む瀟洒な洋館がオールインクルーシブのホテルへ変身。設計監修は安藤忠雄です。

あんどうただお 1941年大阪府生まれ。69年安藤忠雄建築研究所設立。代表作に〈光の教会〉〈地中美術館〉〈こども本の森 中之島〉など。プリツカー賞、仏芸術文化勲章など受賞多数。

当時のデザインを継承した既存棟。

・Existing Building・

4

玩具の会社らしい遊び心が素敵です

安藤忠雄が設計した新棟。

・New Building・

モダンで居心地いい新棟の部屋

5

4 旧山内任天堂社屋の内装デザインを踏襲。顔がついた暖炉も。**5** 今回安藤忠雄が一から設計した新棟の部屋。ウォークインクローゼットなどを完備し、明るく滞在しやすい部屋にデザインされている。

注目の意匠がそこここに。

・Design・

6 古い時計や看板、丸福樓の紋など、1930年代の意匠が見られる。**7** 今は使われていないが、当時のエレベーターもデザインとして残された。主力商品だったかるたやトランプにちなんだあしらいも。

6

7

丸福樓 ●京都府京都市下京区正面通加茂川西入ル鍵屋町342。☎075・353・3355。1泊1室2名利用100,000円〜。部屋代のほか料理、飲み物などオールインクルーシブ。全18室（内7室がスイート）。https://marufukuro.com

2. 東京 / 2002

3. 国立競技場 / 2021

1. 〈船の科学館〉シーサイドプール / 2005

一見ミニチュアのような写真だが、実は人が見ている目線にとても似ている。**1** 代表作ともいえる写真集『small planet』より《Tokyo, Japan》2005、**2**《Tokyo, Japan》2002。**3** 本展のために撮り下ろした東京の風景《Tokyo, Japan》2021。**4** 震災から３か月後に撮影された《Rikuzentakata, Iwate》。tohoku 311シリーズより。**5**《giraffe》。kenyaシリーズより。**6** スクラップアンドビルドの現代都市を象徴するかのように、ラスベガスにそびえ立つ巨大なカジノ。「世界の縮図を見ている気分になった」（本城）。《urban area》。scripted Las Vegasシリーズより。

PHOTO

仮想か現実か。ジオラマのような都市の姿。

ジオラマのように実在の風景を撮影する写真家・本城直季の初となる個展が〈東京都写真美術館〉で開催中。

ほんじょうなおき 1978年東京都生まれ。『small planet』（リトルモア／2006年）で第32回木村伊兵衛写真賞を受賞。ANA機内誌『翼の王国』で連載（現在は終了）。作品はメトロポリタン美術館やヒューストン美術館に永久収蔵されている。

小さな人々で賑わうプール、二次元のような都心のビル、指でつまめそうなサバンナのキリン……。一見ジオラマに見えるこれらの写真は、本物の風景を撮ったもの。大判カメラのアオリを用いて都市をミニチュア化する、独特の表現で知られる写真家・本城直季の作品だ。現在〈東京都写真美術館〉で初の大規模個展が開催中。彼の目を通した都市の風景はなぜ人々を惹きつけるのか。そのヒントを本人に聞いてみた。

「さまざまな場所に抱いた違和感を原動力にこれまで撮ってきました。高層ビルが建ち並ぶ東京は異世界に思えたし、ケニアの草原も動物や自然によって作り出された、人工的なものだと気づいたのです。今回の展示タイトルに『utopia』という言葉を入れましたが、理想的な都市とは何なのだろうとよく考えます。どういう都市を人は求めていて、今の都市はうまく機能しているのだろうかと。そのような引っかかりを感じる場所を撮りに行っています」

本城の撮影に欠かせないのは、デビューから一貫して愛用している４×５インチの大判カメラ（通称：シノゴ）だ。ピントを合わせる範囲を極端に狭くし、あえて周囲の風景をぼかすことでジオラマのような写真になる。

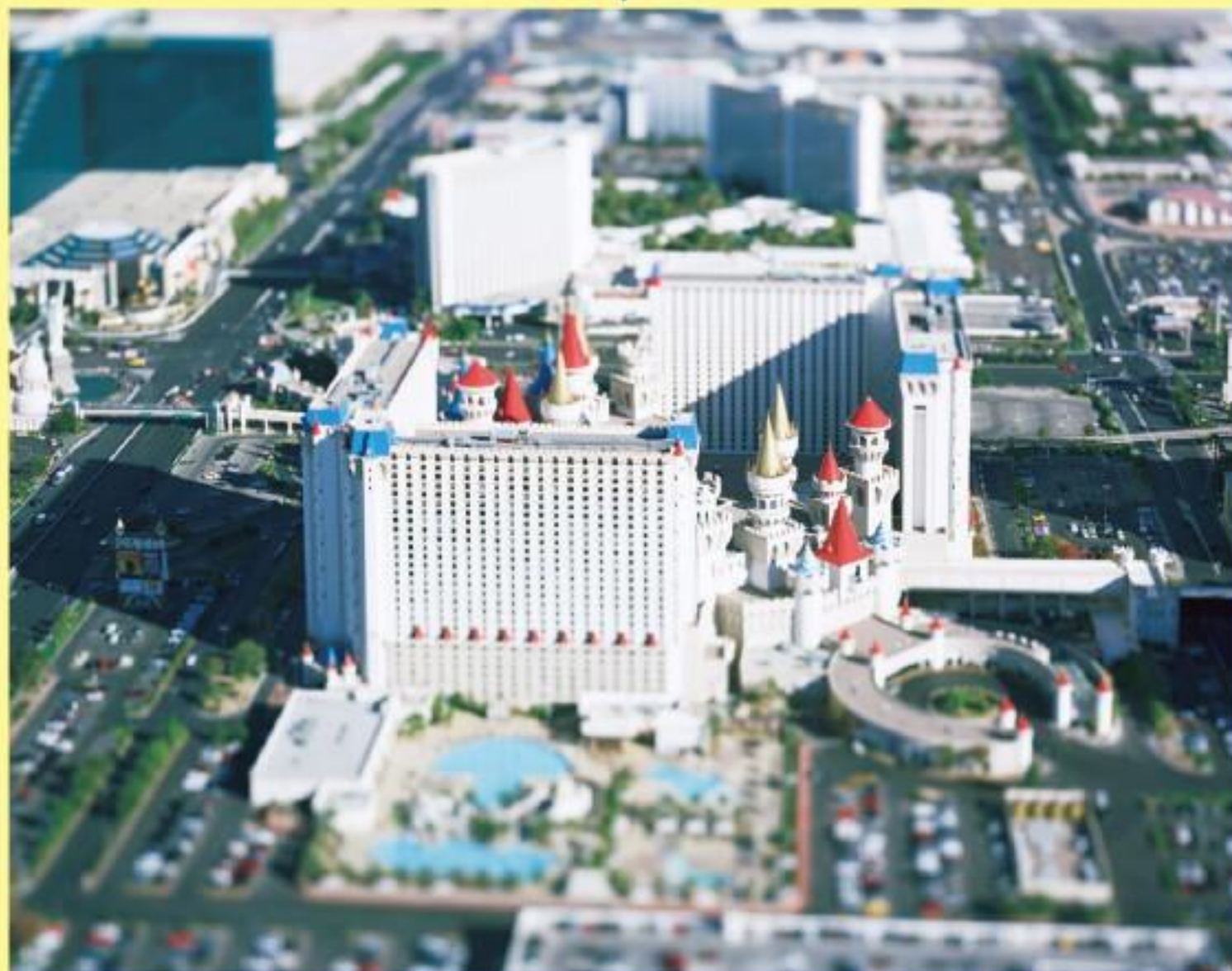
「一枚一枚に込める思いがはっきりと感じられる気がするんです。ヘリコプターに乗った空撮での撮影でも変わりません」と本城。

巡回展である本展では、開催地を被写体とした特別な撮り下ろし作品も展示している。今回「東京」を撮影した新作シリーズは必見だ。

「都市を俯瞰して撮るとき、道路網が生きもののように思えることがあります。ぐちゃぐちゃなんだけど、すべてが用途を持ちながらまとまっている。けれどちょっとしたひずみで街が機能しなくなる危うさも持っている。特に東京の都市づくりは戦後の復興の中で行われたという歴史もあり、撮影を通して人々の〝生きるんだ〟というメッセージを強く感じました。

どんどん開発されていく都市は、近年発展するメタバースなどの仮想空間との境界が薄くなっているように感じられます。ジオラマのような写真には、仮想と現実が入り混じりつつある都市の姿が映し出されているのです」

本城直季（un）real utopia
●〈東京都写真美術館〉東京都目黒区三田1－13－3☎03・3280・0099。～５月15日。10時～18時（木・金～20時）。月曜休（祝休日の場合は開館、翌平日休。５月２日は開館）。入場料1,100円。

6. ラスベガスのホテル〈エクスカリバー〉/ 2008

5. ケニアのサバンナ / 2008

4. 岩手•陸前高田市 / 2011

BOOK

あの少女漫画家たちが語る、「家」と名作と私。

一条ゆかり、くらもちふさこ、美内すずえ、魔夜峰央……。
12人の大御所漫画家が語る「家」の思い出が一冊の本に。

家、それは名作漫画が生まれた舞台裏。少女漫画界の女王、一条ゆかりは、史上屈指の大作ロマン『砂の城』を自ら設計した一戸建てで描き上げた。吹き抜けのリビングとフランスの田舎を思わせる煉瓦のキッチン。女王は言う。「建てましたよ、主人公ナタリーが住んでいるようなお家を！」

『少女漫画家「家」の履歴書』は、『週刊文春』の連載「新・家の履歴書」から少女漫画家の記事を集めた一冊。水野英子、青池保子、一条ゆかり、美内すずえ、庄司陽子、山岸凉子、木原敏江、有吉京子、くらもちふさこ、魔夜峰央、池野恋、いくえみ綾。並べるだけで感涙もののスター12人が、家族やアシスタントと過ごした空間についての秘話・逸話を、間取りイラストとともに披露する。そこから見えてくるのは、空間と環境と体験とが、創作にどれほど大きな影響を与えるのかということだ。

冒頭は、手塚治虫も過ごした〈トキワ荘〉で、唯一の女性漫画家として暮らした水野英子。「トキワ荘にいるだけで絵が上達した」10代の水野は、「美青年の」赤塚不二夫や「博識のお兄さま」石ノ森章太郎と、映画や音楽の話に熱中した。後の代表作『ファイヤー！』には、ジミ・ヘンドリックスやピンク・フロイドに魂を揺さぶられた水野の、ロック愛がたっぷり注がれている。政治陰謀ロマン『日出処の天子』の山岸凉子が語るのは、これまで住んだ家に起きた怪奇現象の数々。山岸作品に見る人間の怖さやホラー要素は、やはり「家」に育まれたものだったのか。

『ガラスの仮面』の美内すずえが20代を過ごしたのは、漫画家御用達の〝カンヅメ旅館〟。12畳の和室に雑魚寝しながら創作するさまは、憑依型天才女優・北島マヤが所属した貧乏集団「劇団つきかげ」のごとし。今も連載が続くロングセラー作家の話は「いつか縄文小屋を作りたい」で締められる。先生ったら、恐ろしい子……！

間取りイラストもついてます！

『少女漫画家「家」の履歴書』『週刊文春』の連載より、少女漫画黄金期の1970年代までにデビューした12人の回を再編集。有吉京子が自ら設計したアトリエの話や、池野恋の多世代同居生活の話も。週刊文春編。文藝春秋／902円。

水野英子

みずのひでこ 1939年生まれ。女性漫画家のパイオニア。代表作はロックカルチャーを描いた『ファイヤー！』(1969〜78)。イラストは紅一点として過ごした伝説のアパート〈トキワ荘〉。

©朝日ソノラマ

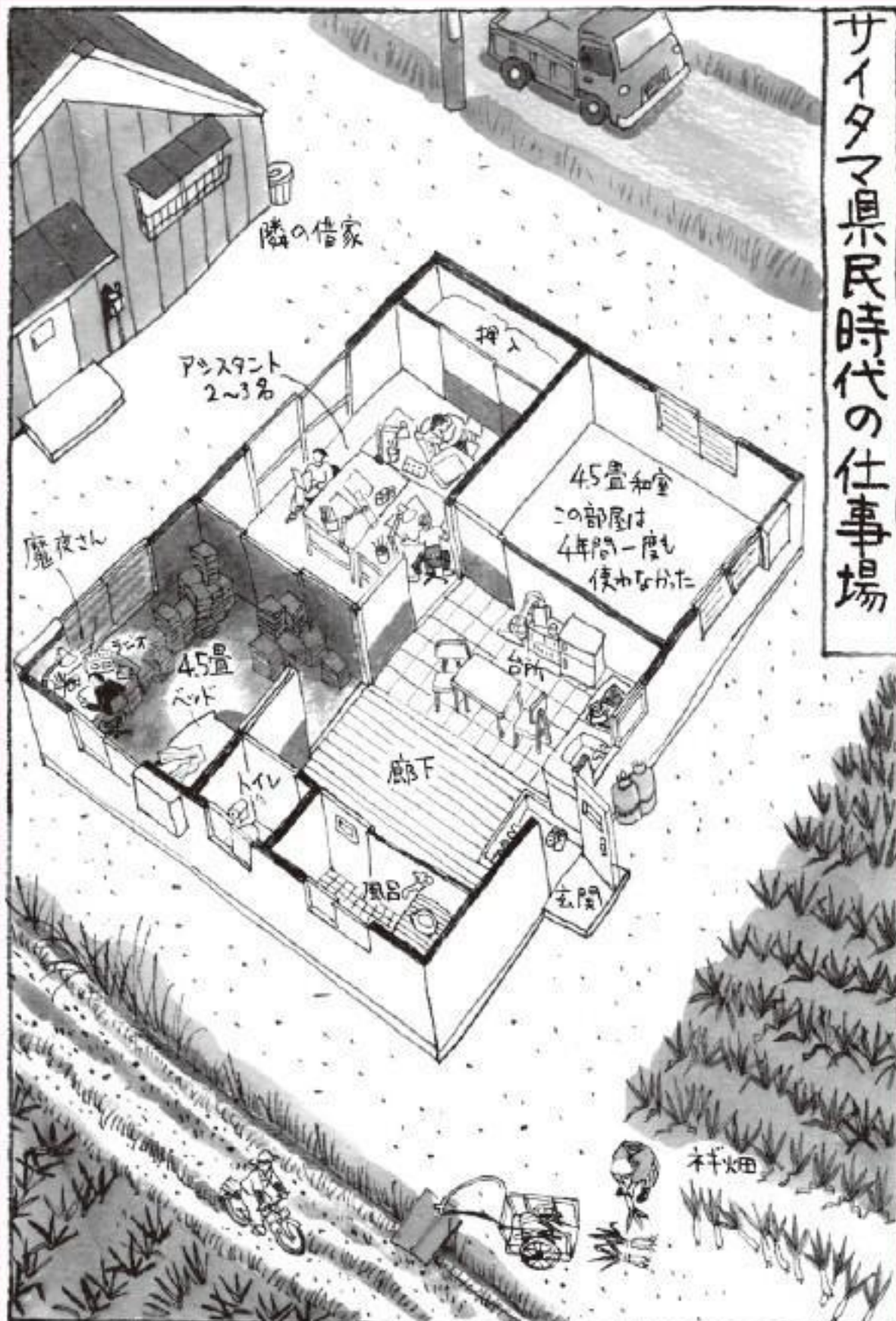
くらもちふさこ

1955年生まれ。『いつもポケットにショパン』『天然コケッコー』。イラストは、思春期までを過ごし、姉妹で漫画を描き合っていた社宅。名作『いろはにこんぺいと』の舞台にもなった。

©くらもちふさこ／集英社

一条ゆかり

いちじょうゆかり 1949年生まれ。『プライド』『砂の城』『有閑倶楽部』など名作多数。イラストは28歳で建てた一軒家。他に白い洋館やNYのコンドミニアムなど家遍歴も華やか。

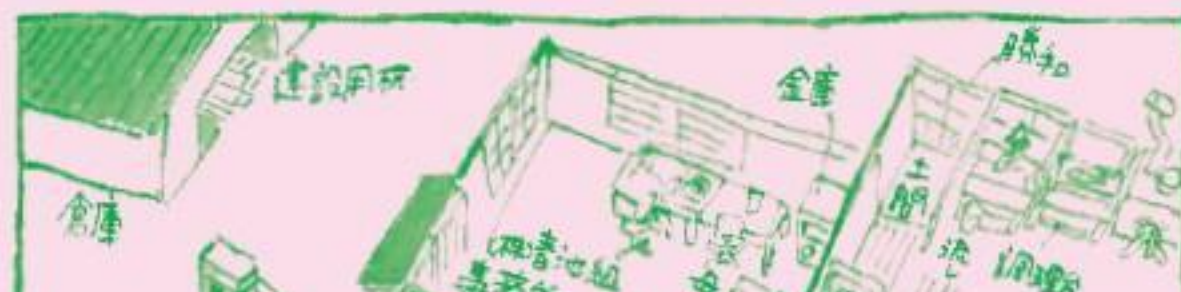
©一条ゆかり／集英社

魔夜峰央

まやみねお 1953年生まれ。代表作は、諧謔と倒錯と美的世界に溺れる少女漫画界の最長寿ギャグ漫画『パタリロ！』。イラストは『翔んで埼玉』を描いた埼玉の仕事場。隣はネギ畑。

©白泉社

DESIGN

デザイナー・石本藤雄の新たな拠点を訪ねて。

長年マリメッコやアラビアで活躍したデザイナーの石本藤雄。愛媛・松山に、彼のアトリエとショップが誕生しました。

フィンランドを代表するブランド〈マリメッコ〉や陶器メーカー〈アラビア〉で、デザイナー・陶芸家として長きにわたり名作を世に送り出してきた石本藤雄。50年の時を経て、自身の故郷からほど近い愛媛・松山に拠点を移した彼のアトリエと、デザインを手がけるブランド〈ムスタキビ〉の新しいショップが、市内の道後地区に完成した。

「いつかは日本に帰って制作活動をしようと思っていました。松山は雪がないのが少し寂しいけど、住んでいたヘルシンキと人口は大体同じくらい。それにどちらも街にトラムが走っているし、似ている気がします。フィンランドに移住して50年で帰国。ここからまたゼロからスタートです」

にこやかに笑いながらそう話す石本。ショップの隣に位置するアトリエには、陶器を制作するための型が並ぶ作業テーブルや、〈アラビア〉のアトリエのものと同じサイズで取り寄せた窯、現地で長年にわたり使用してきた道具類が用意され、新たな創作が今まさに始まろうとしている。

「アラビアでは釉薬も専任の職人が作ってくれていましたが、ここでは自分で一から作らなければいけない。これから釉薬作りも勉強していきますよ」

81歳を迎えてなお、新たな挑戦をやめない石本。そんな彼の手がけたプロダクトにいち早く出会えるのが〈ムスタキビ〉のショップ。石本の意見を取り入れて設計された、作り込みすぎない空間を意識したミニマルな店内には、彼がデザインを担当し、愛媛をはじめとする日本各地の職人が手がけた多彩なアイテムが並ぶ。

「マリメッコに入りたての頃に描いていたスケッチを手ぬぐいにしたり、アラビアでは商品化されなかったゴブレットを制作したりしています」と石本。彼がこれまでチャレンジしたかったデザインが、より自由に表現され人々に届く。

店内にはギャラリーも併設し、作品を展示・販売するスペースに。アトリエで制作した陶器作品をすぐに展示することもでき、より一層、石本のクリエイションと人々の距離が一体となった環境だ。この新天地から今後、どんな作品が生み出されるのか。これからの彼の歩みに目が離せない。

ATELIER

石本藤雄の次なる章の幕開けとなる拠点。

新しい挑戦が始まります。

1 アラビア時代に制作の過程で割れてしまったレリーフを金継ぎ職人が合わせた作品。2 砥部焼の職人が制作した釉薬のサンプル。3 陶器を焼く窯。4 アラビアなどにいた大工や金細工職人からもらった木の板。テストピースの大きさを測る際などに使用している。

石本藤雄

いしもとふじお テキスタイルデザイナー・陶芸家。1941年愛媛県生まれ。70年フィランドへ移住し、〈マリメッコ〉および〈アラビア〉の作家として活躍。2020年に帰国し、松山を拠点に活動を開始。

5 アトリエで今後の展望を語る石本。6 設計を担当したのは武松幸治＋E.P.A。7 手ぬぐい《CHUSEN》シリーズ。各2,200円。8 内装は〈upsetters architects〉による。リニューアルしたブランドのロゴも担当した。9 ゴブレット《ONNEA》シリーズ。4,180円〜。

砥部焼とコラボしたゴブレット。

MUSTAKIVI

石本のデザインによるアイテムが揃うショップ。

ムスタキビ 2017年からスタートしたブランド。2022年2月より石本藤雄のアトリエを併設する〈上人坂テラス〉内に移転オープン。●愛媛県松山市道後湯月町3－4☎089・993・7497。11時〜17時。月曜〜木曜休。https://mustakivi.jp

日々の暮らしに名作ポスターを！

7

SHOP

あの有名デザイナーのポスターが勢揃い！

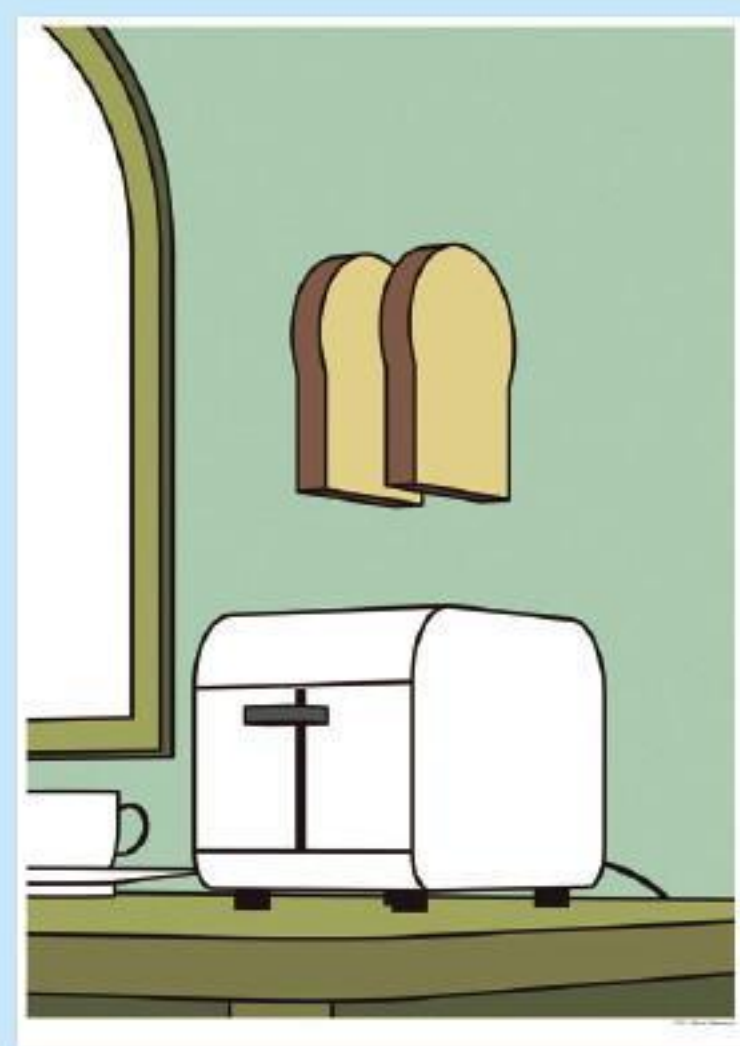
日本を代表するグラフィックデザイナーやアーティストのポスター作品を販売するサイト「POSTERS」が始動。

参加したのは、葛西薫や服部一成、菊地敦己など、デザインシーンの第一線を走る13名の作家。今回のために制作したオリジナル作品から過去の名作まで、150枚ものポスター作品が揃う。

手がけたのは、デザインユニット〈KIGI〉とクリエイティブチーム〈bluestract〉らが運営するギャラリー併設型ショップ〈OUR FAVOURITE SHOP〉。「紙からデジタルへの媒体の移行が日に日に目立ち、丹念に作り上げられたポスターを発表する機会は激減しています。この活動を通して、ポスターが再び社会に影響力を持ち、個人の日常に、また社会の風景の一部として寄り添うことができれば」と〈KIGI〉は語る。

オリジナル作品はA2〜B0から好きなサイズを選ぶことが可能。さらにデジタル証明書を発行し、作品の情報をスマホでいつでも閲覧でき、自分が作品の所有者であることを証明する役割を果たす。

POSTERS 〈OUR FAVOURITE SHOP〉での同名のポスター展覧会がきっかけで始動。第1弾として総勢13名の作家による150枚のポスター作品を販売。今後新たな作家の参加も予定している。https://posters-ofs.jp

3. YUI TAKADA　2. KIGI　1. KAORU KASAI

6. NORIO NAKAMURA　5. KATSUNORI AOKI　4. ATSUKI KIKUCHI

数ある作品の中から、その一部を紹介。なおポスターには額装も用意。素材や色違いなど、最大7パターンから仕様を選べる。1 葛西薫《葛西と佐々木の山や川_ひまわりと海》31,900円〜。2 KIGI《祝いと酔独楽Ⅰ》49,500円〜。3 髙田唯《360°AWARDビジュアルポスター》12,650円〜。4 菊地敦己《360×480 – おなじ重さ》12,870円〜。5 青木克憲《ラフォーレ・グランバザール》39,600円〜。6 中村至男《7:14 C》10,000円〜。7 オリジナルポスターにのみ付属する証明書は、同封のICタグをスキャンすることでいつでも閲覧が可能だ。

DESIGN

不朽の名作椅子《CH24》に毎月1色、限定カラーが登場！

ハンス J. ウェグナーによる名作椅子《CH24》に毎月新色が登場。北欧の自然をたたえた色調に注目だ。

デンマークを代表する家具メーカー〈カール・ハンセン&サン〉が、ハンス J. ウェグナーとの70年以上にわたる協働を記念した新作を発表。3月から12月にかけて、名作椅子《CH24》に、毎月1色、新作がお目見えするという。これまでにないコレクション。手がけたのは、ロンドンを拠点に活躍するデザイナー、イルス・クロフォード。トレンドに左右されない色を求め、鉱物や植物などの自然への関心を美しく映し出すデンマークの画家、ペア・キルケビーの絵画からインスピレーションを受けたという。そして誕生したのが、北海、大麦、スレートといった、北欧の原風景を思わせる9つのニュアンスカラー。単独でも空間に映え、組み合わせても相性がいい。さらに、発売開始月のみスペシャルプライスで購入可能。彩りをまとった名作が空間に豊かな表情をもたらしてくれる。

4月はタチアオイの花をイメージした黄色が登場！

CH24 Wishbone Chair Soft Colors Ilse Crawford　2022年3月から12月にかけて（6月を除く）、毎月1色ずつ《CH24》に新作が登場。販売期間は2023年2月28日まで。各84,700円。発売開始月のみ78,100円の特別価格に。

《CH24》のために厳選された、マット仕上げの絵画のようなニュアンスカラー。自然素材との相性がよく、空間になじみ、インテリアに深みを与えてくれる。

Super Housekeeper Cat

第146回

カーサの猫村さん

ほしよりこ

ほしよりこ　1974年生まれ。「きょうの猫村さん」を「猫村.jp」で連載、著書に『きょうの猫村さん１〜９』『カーサの猫村さん１〜５』『逢沢りく』など。信濃毎日新聞で『ほしなのです』を連載中。LINEスタンプ『猫村さん「と組」と「ら組」のことらたち』も販売中！

チキショー！
小せぇオレでもでけぇタワーを建ててやる！

8

オレは建築家になるため猛勉強した
二級建築士の試験を受けることにしたぜ！

9

試験の朝…
アニキ！試験会場まで送らせてやってよ
オメェ…

10

事故は見通しの悪いカーブで起きた…

11

アニキ…すまねぇ
う…

12

な、なんだ？ここは地獄か…？
ちがうっす 病院っす
死んでねーってことだな… ちくしょ…

13

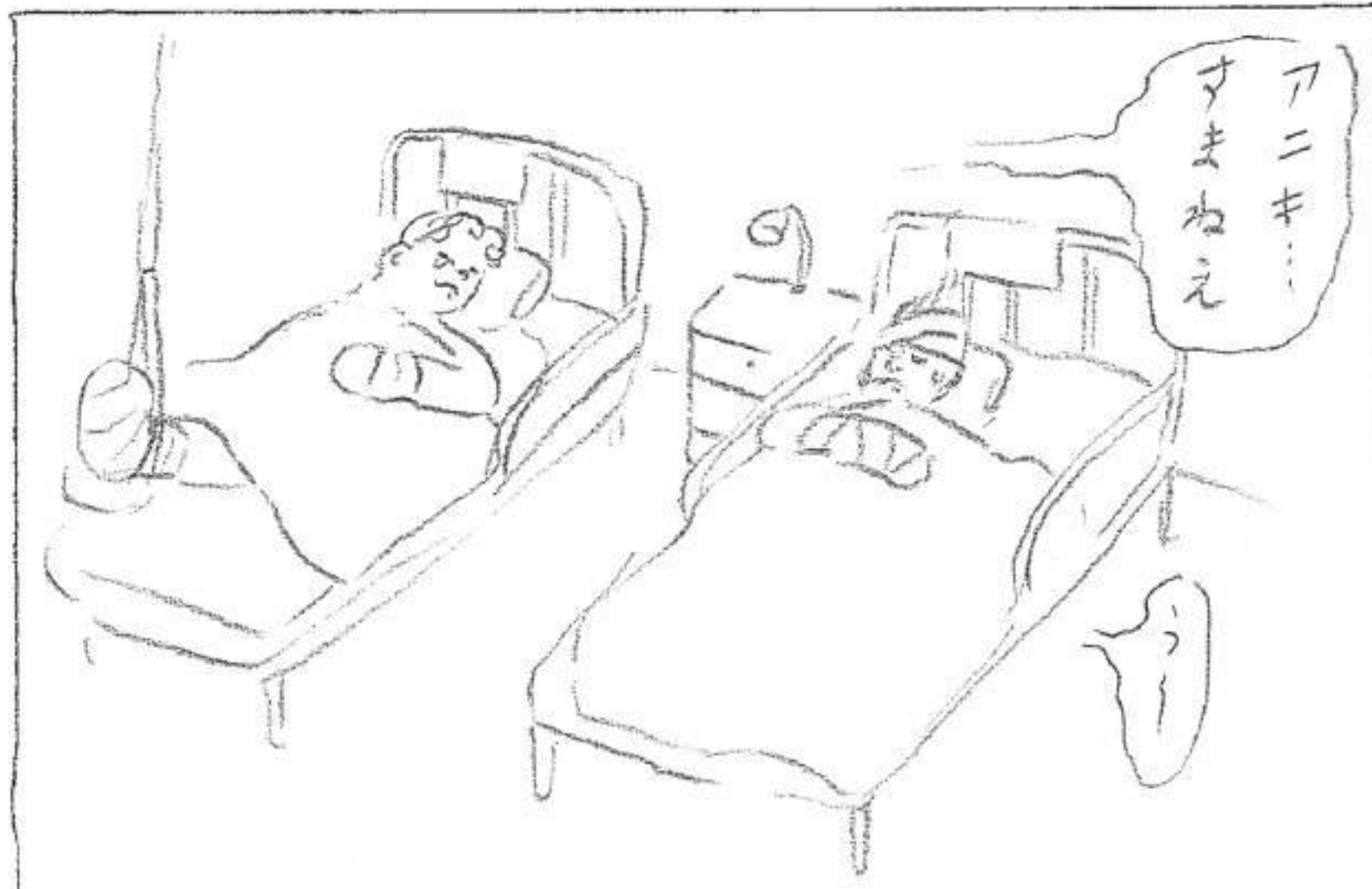
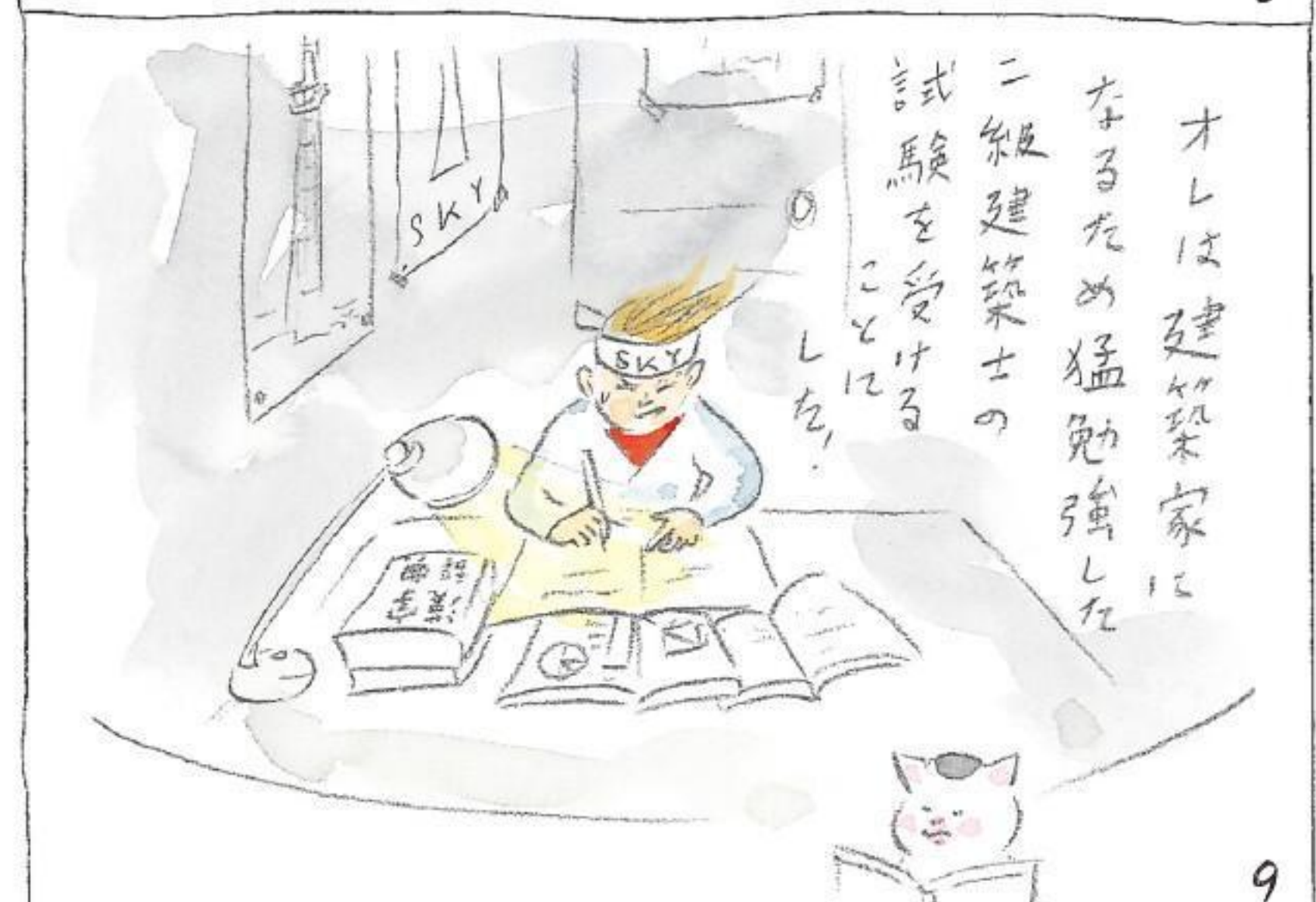
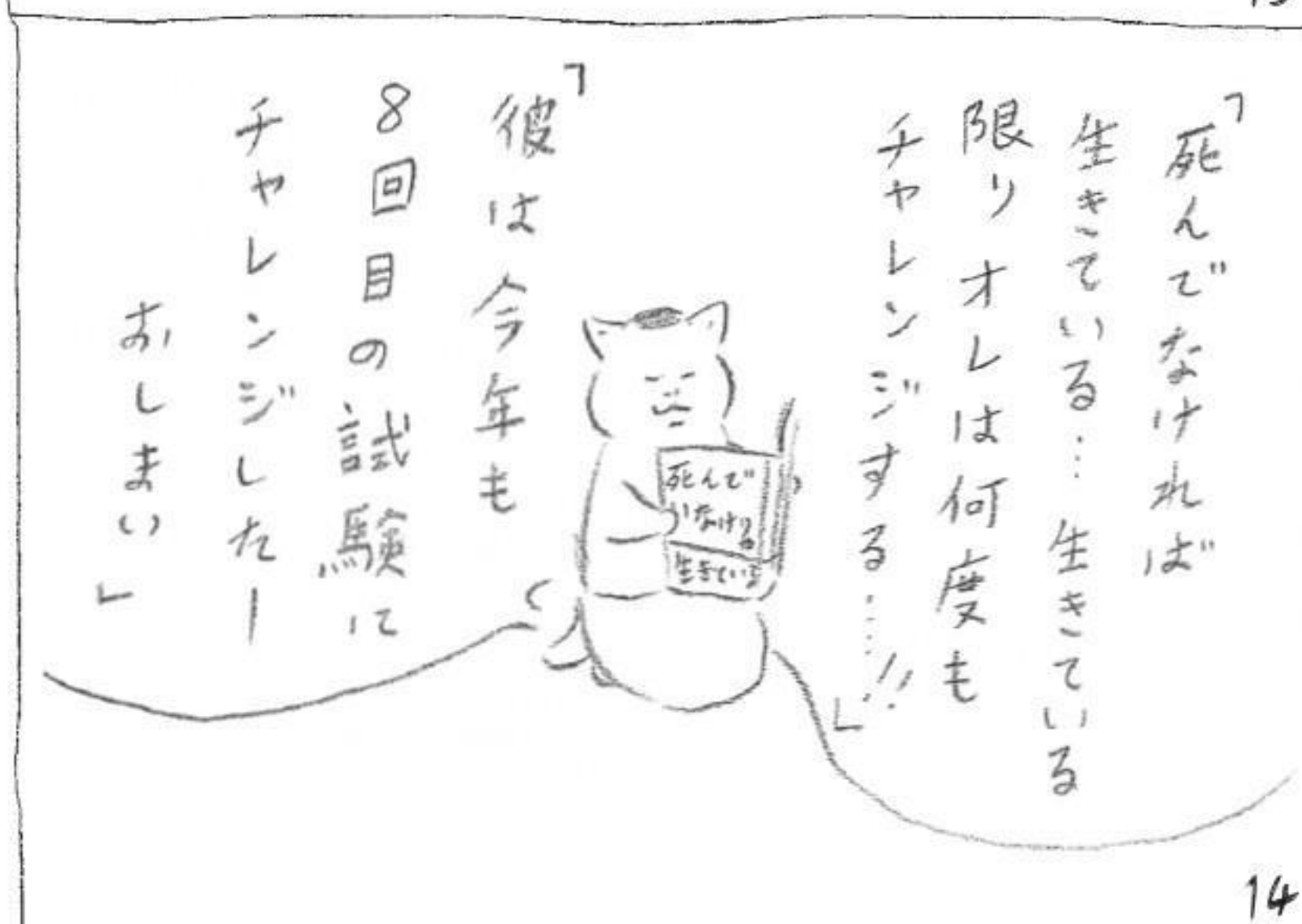
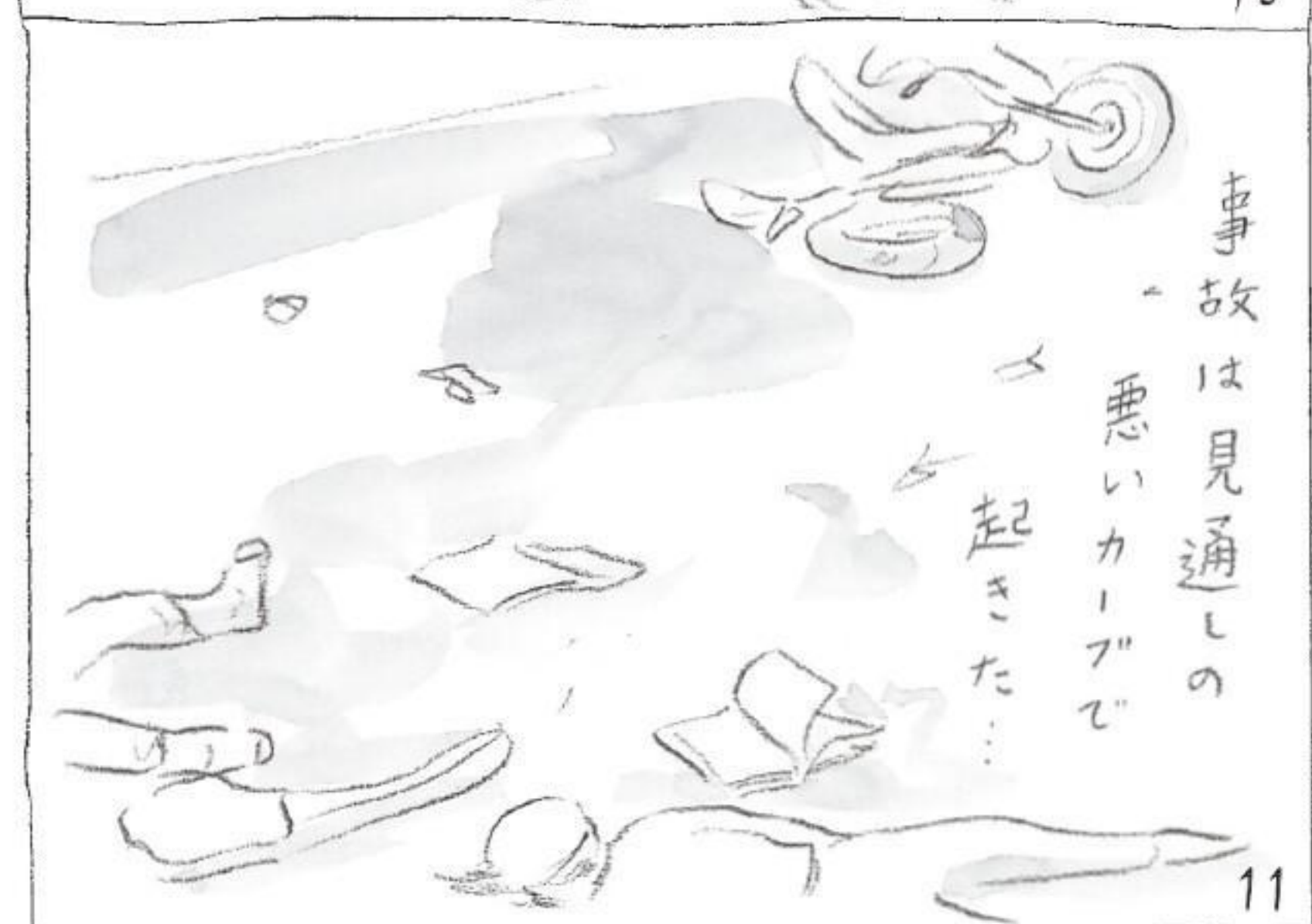
「死んでなければ生きている… 生きている限りオレは何度もチャレンジする…!!」
「彼は今年も8回目の試験にチャレンジしたー おしまい」

14

バイクの運転って気をつけなきゃいけないのよね
パタン
私も三輪車の運転、気をつけましょ ためになったわぁ…

15

つづく…

Casa BRUTUS subscription

定期購読のご案内!

CAFE&ROASTERトートが新しくなりました。
定期購読を申し込めばもれなくプレゼント!

＼NEW!／

Casa BRUTUS × KYNE

内ポケットも付いています。

Casa BRUTUS特別編集
「カフェとロースター」で
KYNEが手がけた表紙がトートに!

※トートは2022年4月中旬以降の発送となります。

＼毎月ご自宅にお届けします!／

定期購読(1年)

『Casa BRUTUS』
通常定価 980円×12冊
11,760円→
9,990円

1,770円分お得!
送料も無料!
＋
CAFE&ROASTER
トートバッグ

定期購読(2年)

『Casa BRUTUS』
通常定価 980円×24冊
23,520円→
18,800円

4,720円分お得!
送料も無料!
＋
CAFE&ROASTER
トートバッグ

※特別定価で値段が上がる号も定期購読ならお値段据え置き!

お申し込みはこちらから!

■ ウェブ
カーサ ブルータス　定期購読　検索
https://magazineworld.jp/user/subscribe/casabrutus

■ Eメール
定期購読お問合せ専用
subscribe@magazine.co.jp

■ マガジンハウス読者サービスセンター(電話)
フリーダイヤル(9:30〜18:00 土・日・祝日を除く)
☎0120-797-300

■ マガジンハウス読者サービスセンター(FAX)
フリーダイヤルFAX(24時間 年中無休)
FAX 0120-679-300

●申し込み日以降の発売号から送本いたします。申し込み日にすでに発売されている最新号を希望される場合はお申し出ください。それより以前の号については定期購読ではお取り扱いできません。●お支払いはクレジットカード決済、代金引換、または後払いです。後払いは初回送本時に、振込用紙(郵便局・コンビニ払い、一括払いです。ご注意ください)をお送りします。●発送は、日本国内に限ります。●中途解約される場合は、割引特典がなくなります。残金はお支払いいただいた金額から、送本済みの号の定価を差し引いた金額を郵便小為替でお返しいたします。●ご記入いただいた個人情報は商品・サービスをお届けするために利用し、その目的以外での利用はいたしません。マガジンハウスの個人情報保護に関する基本方針については以下のURLをご覧ください。https://magazineworld.jp/info/privacy

Chill CARS vol.058

時代を超えて愛される、デザインの良い車。

photo_Futoshi Osako　text_Izuru Endo
illustration_Daijiro Ohara

2

1

4

3

1 丸い２灯式ヘッドライトが柔和な雰囲気を醸し出す。**2** 上下・奥行きともに薄いダッシュボードと、か細いステアリングホイールは、1960年代に生まれたクルマに共通する特徴だ。**3** ドアノブなどの機能部品も、現在の水準から見ると驚くほどに華奢。**4** ステーションワゴン版の〝ファミリアーレ〟は、追加されたラゲッジルームにより、高い積載力を誇った。

FIAT

124 (Familiare)

●フィアット 124（ファミリアーレ）

country: **Italy**
year: **1966-74**
seats: **5**
size: **L4,030×W1,625×H1,440㎜**
price: **approx.2,500,000 yen**

各国で量産された、簡潔にして完成度の高いスタンダードカー。

世界のクルマには、ごくありふれた設計で、外観もおとなしいセダンが、ユーザーから支持を得て、ベストセラーになった事例が多い。

その代表例が、イタリア〈フィアット〉が1966年に発表した《124》だ。流麗さとは無縁の箱型ボディに、熟成されたメカニズム、粘り強いエンジンを搭載。人目を引くような派手さや、手に余る高性能の代わりに、広い室内とラゲッジルーム、耐久性の高さ、街中の発進加速から高速道路まで、どの速度域でも対応できるパワーがあり、スタンダードカーとしての総合的な性能が高かった。さらに、積載性を高め、便利なテールゲートを装備したステーションワゴン版の〝ファミリアーレ〟仕様は、仕事やレジャーに使える多目的車として人気を博した。

スタンダードカーとしての優れた資質と簡潔な設計により、発展途上国でも生産が可能だった《124》は、世界各地で現地生産が行われ、小改良を重ねながら2010年代まで販売を継続。総台数は約1500万台に達し、特に東欧の各国では国民車的存在にもなった。

現在では快適装備の増加により量販車種の高級化や設計の複雑化が進み、《124》のようなシンプルながらも完成度が高いクルマは生まれにくい。世界中で愛されたスタンダードカー《124》には、これからのクルマには何が必要で何が不要なのか、という答えのヒントが詰まっていると言えるかもしれない。

special thanks to Masaru Nakamoto ※データと価格は、撮影車両を参考に算出したものです。

Next Issue

n.266 June Issue

6

LIFE & CAT

猫と暮らす家。

ウチの猫は居心地よく暮らせているのだろうか。
猫を飼っていると、いつもそのことが気になりますよね。
家の空間をそのまま自分のナワバリとする猫がより快適に生きていけるように、
そこで暮らす私たちも心地よく暮らせるように。考えることは尽きません。
そこで、猫を第一に考え、なおかつ美しく暮らす家の実例と工夫を多数ご紹介。
インテリアになじむデザインのいい猫グッズはもちろん、
今回もCasa BRUTUSオリジナルの猫アイテムを開発して販売。
猫と暮らす家づくりを一緒に考えてみませんか。

photo_Akira Yamaguchi

特集の内容です!

- 猫工夫がある家サンプル
- オリジナルの猫アイテムをつくりました
- ヒトも嬉しい、美しい猫グッズ
- 獣医監修、猫目線の家づくり
- 猫がいても飾れる花カタログ
- 猫と名作椅子

Casa BRUTUS

casabrutus.com

マガジンハウス

次号は5月9日(月)の発売です。

予価990円

*特集の内容は、予告なく変更することがあります。

Casa BRUTUS
Casa BRUTUS NO.265
2022 May Issue

photo_GION
text_Akiko Ichikawa
editor_Rie Nishikawa

LIFE @ PET

1

ギャラリーのおもてなし担当犬。

パンチ

ボーダーテリア♂7歳

オヤツも
スタイリッシュ！

2

3

　チェルシーのロフトを改造したアートギャラリーのドアを開けると、真っ先に駆け寄ってくるパンチくん。飼い主のハン・ファンさんいわく「ニューヨークではなかなか見かけない」ボーダーテリア種で、誰にでもまるで〝パンチ〟するようにぐいぐい愛嬌を振りまく。ハンさんが親しかった故ルー・リードも同じ種類の犬を飼っていたそうで、その昔は犬同士一緒に遊んだこともあったとか。ゆるやかなウェーブのブロンドヘアは、スタイリッシュなハンさんとよく似ているが、「性格もそっくりかもね。社交的で人間好きなところ、食べること、そして人を楽しませるのが大好きなところも」。

1 テーブルの上でお昼寝するのがお気に入り。**2** ニューハンプシャー州生まれ。ブリーダーさんいわく「兄妹の中で一番の甘えん坊」だったとか。**3** ドイツ＆オーストリア美術専門〈ノイエギャラリー〉特製オヤツ。**4** クーパーヒューイット美術館に展示されたハンさん作のガラスアート。**5** フランチェスコ・クレメンテによるハンさんの肖像画も展示。

■ Owner's Data
ハン・ファン

アーティスト＆ギャラリスト。料理の腕もプロ並みでおもてなし上手。https://www.hanfeng.com

4

5